

盗まれた部屋



ロベール・カサノヴァス

歴史小説



あらすじ

パリ、一九二〇年秋。西洋美術を愛する日本の貴族松方幸次郎は、ゴッホの「アルルの部屋」を入手する。この傑作は、数十年にわたって愛と敬意をもって築き上げられたヨーロッパ美術の卓越したコレクションを豊かにした。しかし第二次世界大戦がコレクションの運命を激変させる。一九四四年、フランス臨時政府の庁舎で、近代史上最も巧妙な美術品略奪の一つが画策される。八十年後、正義への渴望に駆られたピエール・ベルティエ教授が、この略奪の隠された仕組みを発見する。ただ一人の決意を武器に、彼はフランスの外交機構に対する巨大な闘いに身を投じる。実話に基づいて描かれた本作品で語られる松方事件は、正義が単に具体的な返還の獲得だけでなく、何よりも公的議論の漸進的変革によって測られることを実証している。時として、正しい答えを即座に得ることよりも、粘り強く正しい問いを発し続けることの方が重要なのである。

著者について

ロベール・カサノヴァスは名誉教授であり、文芸協会会員である。美術コレクション史に情熱を注ぐ法学者として、国家による美術品の収奪について長年研究を重ねてきた。NGO国際返還機構の理事長として、この分野で数多くの学術的著作を発表している。



警告

この歴史小説は実話に基づいたフィクションである。故人となった人物の名前は実名を使用している。存命中の人物の名前は変更されている。物語の一貫性のために一部の架空の人物が追加されている。本作品に登場する国際機関の仕組み（国連人権理事会、通報手続き等）は簡略化されている。

フランス語で書かれたオリジナル版は、いくつかの外国語に翻訳されています。

翻訳版には、言語上の誤り、誤解、または近似が含まれている可能性があります。

日本語版

改訂第2版



盗まれた部屋

ロバート・カサノバス

9, rue des Anges 66450 - Pollestres - フランス
casanovas@hotmail.com

法定預金 2025 年 9 月 - 電子書籍および印刷版

© 2025 カサノバス。全著作権所有

ISBNです。979-10-979984-1-7

表紙: 油彩・カンヴァス「アルルの寝室」フィンセント・ファン・ゴッホ作

目次

プロローグ	3～7ページ
第1章：雲が立ち込める	8～31ページ
第2章：一九四四年の陰謀	32～54ページ
第3章：包囲網は狭まる	55～71ページ
第4章：秘密交渉	72～89ページ
第5章：返還の喜劇	90～110ページ
第6章：忘却の年月	111～146ページ
第7章：闘いの復活	147～167ページ
第8章 国際的な闘い	168～185ページ
第9章：フランスの反応	186～219ページ
第10章：立法の行き詰まり	220～239ページ
第11章：長い戦い	240～254ページ
エピローグ	255ページ

盗まれた部屋

プロローグ

パリ、1920年秋

十月のパリは低く湿った空に覆われていた。松方幸次郎は愛用の美しい英国製スリーピースのコートの襟を立てた。彼は足取りを緩め、重要な面会の前のひとときの静寂を庭園に求めている。

奇妙な人生の軌跡である。元首相の息子、造船業で築いた財産、イェール大学卒業……そして今やパリの画廊を菓子屋の子供のように歩き回っている。母には決して理解されることのなかった情熱だった。「なぜあの西洋の野蛮人たちの芸術に関心を持つのです？」と、かつて明治の貴族女性特有の無意識の残酷さで彼女は言った。扇子を操るように屈辱を与えることを知る女性たちの残酷さで。彼女は息子が正しかったかもしれないことを見ることなく死んだが、同時に彼のコレクションが彼なりに自分を引き裂く矛盾を解決する方法だったことも理解しなかった。西洋化する世界で日本人であること、伝統的な美学に憑かれた現代の実業家であることの矛盾を。

彼の小さな赤い手帳がポケットの中で重みを感じさせていた。すべての取得がその性格を明かす細心さで記録されていた。手を離すことのできない完璧主義の強迫観念者、組織的な蓄積によって自らの脆さを力に変えた男。今や千点を超える絵画。彼はすべての細部、すべての歴史を暗記していた。彼の驚異的な記憶力は社交界で輝くことを可能にしたが、最小の失敗も忘れることを許さなかった。そして

今日、ポール・ローゼンベルクが彼に何か並外れたものを約束していた。

ラ・ボエシ街の画廊はニスと萎れた薔薇の匂いがした。ローゼンベルクは至る所に花束を置く癖があった。まるでその色彩によって、展示された絵画と呼応させるかのように。洗練されているが計算高く、彼は本物の趣味を経済的権力の道具に変える術を知っていた。

「ああ、松方さん！」商人は叫んだ。「寛大な気分でいらっしやることを願います」

ローゼンベルクは大商人たちの魅力的な微笑みを浮かべていた。松方は彼の率直さを評価していた。少なくとも彼とは偽りがなかった。買いに来ることを知っており、彼は売ることを知っていた。商業的関係の残酷な明確さは、純粋な芸術にのみ関心があるふりをするパリのサロンの偽善から彼を解放した。

「では、その宝を見せてください」と松方は答え、彼を蝕む焦りを隠しきれなかった。

「ファン・ゴッホです。アルルの寝室。第三版」

その名前が鞭のように空気を切り裂いた。松方は胸に何か締め付けられるのを感じた。ファン・ゴッホ……彼は常にこの狂ったオランダ人に弱みを持っていたが、その魅力はコレクターである彼を困惑させた。ヴィンセントは幸次郎が自分に禁じていたすべてを体現していた。放棄、創造的狂気、社会的判断への無関心。孤独を描く彼の方法は、根本的に孤独な男の心に語りかけた。事業では埋めることのできない空虚を芸術で埋めようとする実業家に。

カンヴァスがそこに、イーゼルに置かれ、画廊の柔らかな光に照らされていた。青い壁、赤と白の床、あなたを横たわるように誘うベッド……松方は近づいた。彼は触る収集

家ではなく、いや、彼は見つめるのだった、集中して。彼の身体的自制は日本の教育を裏切ったが、同時に恐れも、神聖だと思われるものを接触によって汚すことへの恐れも。芸術は彼にとって避難所だった。

「彼は母親のために描いたのです」とローゼンベルクがささやいた。顧客の弱点を知る男だった。「想像してください……ヴィンセントが、サン・レミの病院で一人、自分に生命を与えた女性のために清浄な部屋を描いているのを」彼に同行していた顧問の日置幸三郎が控えめに咳払いをした。職業的にも必要からも影の男である日置は、主人の表現されない欲望を推測する能力の上に経歴を築いていた。彼は、自らの慎ましい出自から生まれた劣等感を武器に変えていた。松方への彼の忠実さは、誠実な感謝と巧妙な計算を混ぜ合わせていた。先見の明のある人に仕えることで、代理で偉大さに参加することができた。

「特別な魂を持っています」と彼は日本語で言い、商人に対して親密さを作り出すために言語を選んだ。「あなたの美術館の中心的作品になり得るでしょう」

松方はうなずいた。彼の美術館……日本に西洋芸術への窓を提供するというこのやや狂った夢は、彼の本質を示していた。二つの世界の間で引き裂かれ、彼は調和によってそれらを和解させることを望んでいた。同胞たちは彼を風変わりな人間と見なしていたが、彼らの無理解もまた、異なることへの誇りを養っていた。松方には時として途方もない傲慢さに近い挑戦への嗜好があった。

「ローゼンベルク、その部屋は……子供の頃、京都の私の部屋を思い出させます。同じ簡素さ、同じ平和への探求。ファン・ゴッホは避難所を探していました。私もある意味では」

普段は自制心の強い彼にしては珍しい告白は、収集家の亀裂を明かした。達成された実業家の背後には、教育の厳格さを決して乗り越えることのなかった傷ついた子供が隠れていた。芸術は彼の感情の言語となり、脆弱性を許す唯一の領域となっていた。

商人は顧客を捕らえたことを知っていた。ローゼンベルクは購入者の心理的亀裂を解説する術に長けていた。その洗練の背後には、人間性に対するシニシズムと洞察を混同する実用主義が隠れていた。

「あなたのものです、お値段は……」

彼らは一時間交渉した。値段ではなく-松方には手段があった-詳細、真正性、来歴について。重要なことについて。彼の細心さは彼の不安を隠していた。もし彼の取得が、他のすべてのように、彼を住まわせる空虚を埋めることに成功しなかったら？しかし後戻りするには遅すぎた。作品への過食症は彼にとって軽い麻薬となっていた、社会的成功が完全に満足させることのできない存在に意味を与える唯一の方法。

その夜、七区のアパートマンで、松方は手帳に丁寧に記した：

「画家のアールの寝室、ヴィンセント・ファン・ゴッホ、一八八九年、油彩、カンヴァス、五七・三×七三・五センチメートル。ポール・ローゼンベルクより取得、一九二〇年十月十五日。長い間私の夢の中で私を追いかけている作品」

この最後の言葉を、彼は衝動的に付け加えた。目録で感情を表すのは彼の習慣ではなかった。しかし絵画の何かが彼を異なっていて感動させた。おそらく彼の孤独に響く描かれた

孤独、おそらく国際的大ブルジョワの存在の拷問的複雑さと対照をなすその率直さ。

ファン・ゴッホは自らの狂気を優雅さに変えることを知っていた；彼は自らの憂鬱をコレクションに変えようと試みていた。

彼は自分の走り書きした数語が、自分の人生を超える物語の始まりを刻んでいることを知ることはできなかった。平和な部屋が苦悩する芸術家によって描かれたものが、激的な法廷闘争の対象となることを。政府、弁護士、相続人たちが、痛ましい清貧のイメージを何年もの間争うことを。歴史の皮肉は、均衡を求める男が文化外交の最も下劣な欲望を明かす紛争の主人公となることを望んだ。

松方はペンを置き、窓からパリの光を眺めた。明日、彼は再び骨董狩りに出かけるだろう。常に パズルにピースを加えたいという渴望、絶えず逃れる美的絶対への必死の競争。常に未来のために重要な何かを築いているという確信。彼は正しかったが、彼が想像したようにはなかった。彼の個人的探求は逆説的に何十年もの対立を生み出すことになっていた。彼の和解への希望は国民国家の最悪の所有本能を明かすことになっていた。

歴史は、善意などあざ笑うものである。

第1章：雲が立ち込める

ロンドン、一九三九年八月初旬

日置幸三郎はパンテクニコン倉庫の責任者との約束があった。早めに到着した彼は、カビ臭さと蜜蝋の匂いがする使われていない事務室で待っていた。

この匂いは京都の古い寺を思い起こさせた。困惑させる連想：ロンドンでの亡命生活が彼を精神的な故郷から切り離していた。

汚れた窓から、ロンドンが霧の中で目覚めているのが見えた。急いでいる従業員たち、見出しを叫ぶ新聞売り：「ヒトラー、いかなる妥協も拒否！」。まだ疑っている者がいるかのように。その明白さが彼を重苦しくさせた。数ヶ月前から、彼は皆が見ることを拒む前兆を感じ取り、楽観的な同時代人たちからますます孤立させる明晰な悲観主義を培っていた。

待ち時間が長く感じられた。二十分。

彼は一八九六年の松方幸次郎との最初の出会いを思い出した。彼は神戸の銀行の小さな書記で、若い貴公子は日本の芸術を革新すると語っていた。当時、彼はその計画の大胆さに魅了されたが、質素な生まれが通常は禁じていた社会的上昇への希望にも魅力を感じていた。「日置よ…」、その出会いの際に彼に言った、「我々は我が国民に西洋の美を提供するのだ」。その夢は戦争の炎の中で死ぬ危険があり、それと共に理想に仕える人生全体を捧げた建造物が崩れ落ちるだろう。

日置はこの休息を利用して、数日前に受け取った手紙をポケットから取り出した。彼の手は軽く震えていた——年齢のせいではない、彼はまだ六十四歳だった——十回以上読

み返した言葉のせいだった。不安は彼を日本での最初の年月、父親が書道の機微を教えてくれた頃に連れ戻した。「震える手は疑う魂を現す」、父は彼に言っていた。松方家に仕えて四十二年、これほど当惑したことはなかった。

彼には松方の言葉だけが見えた、心に刻まれた細い字で書かれていた：「最悪に備えてください、我が忠実な友よ。軍人たちが権力を握りました。我が国は奈落に滑り落ちており、我々のコレクションもそれに続く危険があります」

。

主人との親密さは常に彼を喜ばせていた、彼は、小さな従業員、日本の最も有力な男性の一人の腹心だった。しかし今日、その親密さは決して担いたくなかった責任で彼を押し潰していた。

それは何を意味するのだろうか？日置はその文章をあらゆる角度から検討したが、より安心できるものにはならなかった。彼は松方が決して大げさに言わないことを十分知っていた。彼が奈落について語るなら、奈落は既にそこにあるのだ。

控えめなノックが彼を陰鬱な思考から引き戻した。

「日置さん？モリソンです。遅れて申し訳ありません、タクシーが故障しまして」

ジェームズ・モリソンはパンテクニコンを経営していた…いつから？二十五年？それ以上？いずれにせよ、しっかりした男だった。話すときにまっすぐ目を見るイギリス人の一人。フリーメーソンで、その界限の多くがそうであるように。イングランド連合グランドロッジのメンバーで、シティ・オブ・ロンドン・ロッジ九〇一号の元ヴェネラブル・マスターとして、多くの人脈を持ち、良質な情報源から得た情報の恩恵を受けていた。

日置は彼を評価していた。モリソンは日本のコレクションを、まるで王室の個人コレクションであるかのような敬意をもって扱った。そして神に誓って、彼の同業者の中には「エキゾチック」な顧客に対してより敬意を欠く者もいた。

「謝らないでください、機械は時として気まぐれですから。私はちょうど…」

「失礼して遮らせていただきますが、問題があることを恐れております。大きな問題です」

モリソンには事態が悪い時に「問題」を発音する特別な方法があった。彼はささいなことで動揺するタイプではなかった。典型的なイギリス人の自制心は、日置の日本人的表現力と対照をなし、まさにその違いから生まれる共感を彼らの間に作り出していた。

「すべて話してください」

モリソンはきしむ緑色の革のアームチェアに座った。彼は疲れているようだった。疲れている以上に、心配していた。本当に心配していた。日置は、見かけの倉庫での仕事よりもはるかに重い責任の重荷を負っていると疑っていた人物の疲労の兆候を認識していた。

「昨朝、内務省から二人の紳士の訪問を受けました。とても礼儀正しく、とても正しい。正し過ぎる、お分かりでしょう。罍を隠す種類の礼儀正しさです」

日置にはよく分かった。日本でそのような官僚と接したことがあった。

「彼らは何に興味を持っていたのですか？」

「あなたに。いや、コレクションに。ここに保管されているものを知りたがっていました。…措置を準備している時にする種類の質問です」

モリソンは話を中断してポケットから小さなフラスコを取り出した。日置に勧めたが、彼は手振りで断った。イギリス人はウイスキーを一口飲んでから続けた。

「彼らは書類を持っていました。これくらい厚い書類を。あなたの名前が書かれ、松方氏の名前、一九一六年以来のあなた方のすべての購入のリストが。一九二三年にデュラン・リュエルで小さなドガを購入したことまで知っていました」

「驚きです…」

「彼らは作品の価値、資金調達手段、ヨーロッパの他の日本人収集家との関係について非常に具体的な質問をしました。そして何より、日本大使館との接触があるかを知りたがっていました」

日置は額に汗がにじむのを感じた。もちろん大使館との接触があった。海外に住む日本人がどうして他のやり方ができるだろうか？しかし現在の状況では、接触は全く異なる意味を持った。その明白さは彼を永続的な外国人としての地位に引き戻した。ヨーロッパで長年過ごした後も、彼は疑われ続け、自分の存在と活動を絶えず正当化することを運命づけられていた。

「率直に申し上げます。戦争が始まれば、そして始まるでしょう、疑いません、そして日本が間違った側を選べば…作品は『敵性資産』と見なされるでしょう。そして敵性資産に戦時中何が起こるか、没収、強制売却、または『偶発的』破壊を我々は知っています」

日置は目を閉じた。この日が来ることをずっと知っていた。しかし知ることと現実と直面することは違った。遠くから崖を見ることが縁に立つことの違いのように。予知的な明晰さは彼において一種の知的マゾヒズムを現していた。彼は災難に自己満足的に備えながら、それが決して起こらないことを願っていた。

頭の中で、彼は松方とヨーロッパを駆け回ったすべての年月を思い返した。パリの画廊、モンマルトルのアトリエ、ロンドンでのオークション。西洋美術に対する彼の雇い主の貪欲な情熱。高揚する思い出は、彼が文明化の使命の一部であると感じていた時代に彼を連れ戻した。

「日置よ…」、一九二〇年に彼らが取得したばかりのファン・ゴッホの部屋の前で松方が彼に言った、「…見てください、ファン・ゴッホは部屋を描き、そこから永遠のものを作り出します。これが西洋の天才です：日常を芸術に変えること」。その言葉は日置に彼が認めるよりも深く刻まれた。それらは彼の中でヨーロッパ美術への魅惑を育み、時として自分の国の美的伝統を軽蔑させることもあった。芸術を理解せず、力関係しか理解しない政治家たちのせいですべてが消失する危険があった。

「あなたの考えでは、どのくらい時間が残されているでしょうか？」

モリソンは顎をかいた。考えている時の彼の癖だった。その親しみのあるしぐさは逆説的に日置を安心させた。そこに悪い知らせの使者の背後にある彼の相手の人間性を見出した。

「言い難いですね。三ヶ月と言いたい。最大で四ヶ月。その後、日本人に属するいかなる財産も『予防的に』押収される危険があります。彼らが今使っている言葉です」

「三ヶ月で移動させるには…」

日置は中断した。その任務の巨大さをどう説明すればよいのか？数百の作品。モネ、ルノワール、ロダンの彫刻。情熱の一生がロンドンの倉庫に積み重ねられた札のついた箱に要約されていた。自分の存在がいくつかの物質的対象に縮小されることが彼を屈辱的に思わせ、同時に憤激させた。

彼はすべての購入を覚えていた。一九一八年に芸術家から直接購入した睡蓮のモネ。松方は感動して涙を流していた。「これは純粋な光です、日置。捕らえられ永遠のために固定された光」。共有された感動は日置の最も貴重な思い出の一つであり続けた、部下の条件のすべての挫折を償う主人との精神的親密の瞬間だった。

ロダンも、カレーの市民の素晴らしい習作。彼らはムーダンの彼のアトリエで彫刻家自身と三時間交渉した。素晴らしいロダンだった。彼は各人物の物語を、まるで個人的に知っているかのように語った。その出会いは日置に印象を残した。彼の人生で初めて、西洋美術の巨人たちと対等だと感じ、彼自身が鑑識家として認められたいという隠れた野心を養う陶酔的な感覚だった。

「モリソン、ほとんど知られていないことをあなたに打ち明けます」

どこまで彼を信頼できるだろうか？しかし結局、もはや本当に選択肢はなかった。ヨーロッパでの長年の後、モリソンは彼の唯一の真の友人であり続けた。

「ここにはコレクションの一部しかありません。残りの半分はパリ、ロダン美術館の地下にあります」

「なんてこった…どのくらいの作品数ですか？」

「三百点近く。おそらくもっと。松方氏是一九二五年にすべてを日本に送還する予定でしたが…」

「しかし？」

「一〇〇パーセントの関税。日本政府は西洋美術が国内産業から金を逸らすと考えていました。伝統芸術を奨励しなかったのです」

「そして二つの火の間に挟まれることになった」

「控えめに言ってもそうです。我々のコレクションを反愛国的と見なす日本政府。間もなく敵性と見なすヨーロッパ政府たち」

モリソンは立ち上がって窓の外を見に行った。開閉扉のある倉庫で、積み重ねられた箱が見えた。それぞれが財産を含んでいた。それぞれが物語を語っていた。そしておそらく数ヶ月後、これらすべてはもはや思い出に過ぎないだろう。この光景はモリソンに漠然とした罪悪感を強めた。日本の友人から奪おうとしているシステムの代表として、彼は阻止する方法を知らない不正の共犯者であることを発見した。

「あなたに言うべきでないかもしれないことを話します。外務省での私の人脈、何人かいますが、ベルリン、東京、ローマ間の秘密協定について話しています。まだ公式なことは何もありませんが、交渉は非常に進んでいるようです」

「秘密協定？」

「軍事的な。三者同盟協定、どうやら。もしそれが本当なら、あなたのロンドンの作品は終わりです。おそらくパリのものも」

「確信がありますか？」

モリソンは日置に渡した手紙を取り出した。そのしぐさはイギリス人の道徳的勇気を証明し、彼を称えた。このように情報源を裏切ることで、彼は相当なリスクを冒していた。

「読んでください。バーミンガムの同僚が昨日送ってきました。私と同じ訪問を、ドイツ人の顧客について受けたのです」

日置は手紙を素早く読んだ。用語は技術的だったが、メッセージは明確だった。イギリス政府は「潜在的に敵対的な」国の国民に属するすべての財産を押収する準備をしていた。芸術が政治的憎悪を超越すると信じることはできたのはなぜだろうか？

「情報源についてはこれ以上お話しできませんが」、モリソンは続けた、「ロンドンがリストを作成し始めるのに十分信頼できるものです」

「何のリスト？」

「押収すべき財産の。監視すべき人物の。『保護』すべき美術品の。婉曲表現がお分かりですか？」

日置は完全に理解した。そして吐き気を覚えた。生涯、彼は法律、契約、所有権を信じてきた。そして今、国家の利益が関わる時、これらすべては目くらましに過ぎないと説明されていた。現実政治の発見は、彼の存在全体を導いてきた西洋への理想化された視野を完全に破壊した。

「何を助言されますか？」

モリソンは戻って座った。困難な瞬間に知られている深刻な眼差しをしていた。一九二九年に危機がパンテクニコンを閉鎖させそうになった時に持っていた眼差し。この深刻さは日置を不安にさせた。

「率直に？救えるものを救ってください。最も重要な作品をフランスに慎重に移してください。ロダン美術館の副館長のオーベール氏は影響力があり、おそらく少なくとも一時的には保護できるでしょう」

「フランスが陥落したら？」

「では、戦争がいつか終わることを祈ってください。そして誰かが作品が誰に属していたかを覚えていることを。私は大戦直前にこの仕事を始めました。当局がドイツとオーストリアのコレクションをどう扱ったかを見ました。公式には『一時的封鎖』でした。実際には、所有者を見つけた作品は非常に少数でした」

「つまり…」

「つまり、イギリス国家は国家安全保障上の理由を持ち出して作品を取得するということです。そして戦争の混乱の中で、封鎖は最終的な没収に非常に容易に変容するでしょう」

「しかしそれは泥棒です！」

「いいえ、政治です。泥棒は非合法性を含意します。私があなたに話していることは合法で、戦時に可決される例外法によって枠づけられるでしょう。告発することさえできないでしょう」

日置は立ち上がった。外では、ロンドンが平和の最後の日々を生きていた。人々は走り、働き、楽しみ、間もなく彼らの世界が転覆することを知らなかった。

「モリソン、マルセル・オーベールを個人的にご存知ですか？」

「業界では尊敬されています。そして何より、松方氏の個人的な友人ですね？」

「二十年近く。一九二五年のレオンス・ベネディットの死後、我々のパリでの購入を引き継いでくれたのは彼です。並外れた人物。教養があり、誠実で、芸術に情熱的。もし誰かが我々を助けることができるのであれば…」

「その場合、すぐに彼を訪ねるべきです。非常に急いで」
彼らはしばらく沈黙していた。

日置は長年にわたって出会った画商たちすべてのことを考えていた。その中の何人が味方であることが分かるだろうか？何人の他の者が状況を利用して富を築くだろうか？

「モリソン、最後に一つ質問があります。あなたの考えでは、戦争はどのくらい続くのでしょうか？」

イギリス人はフラスコを再び取り、もう一口飲んだ。

「私の意見を知りたいですか？戦争は我々が知ったすべてとは異なるでしょう。より長く、より破壊的で、より全面的。最低五年。おそらく十年」

「十年…」

「そして最後に、我々が知る世界は消失しているでしょう。帝国、国境、ゲームのルール…すべてが変わるでしょう。芸術的所有権に関する法律を含めて」

「あなたは…」

「十年後、もし我々が戦争から生きて出れば、私的コレクションという概念自体がおそらく消失しているだろうと思います。国家は芸術を統制し、何が見られるべきか、誰によってかを決定することに慣れるでしょう。そして権力を返したくなくなるでしょう」

その展望は日置の血を凍らせた。私的収集家なし、後援者なし、最も美しいコレクションを創造した個人的情熱なしのヨーロッパ？それは考えられないことだった。

「きっと大げさでしょう…」

「おそらく。間違っていることを願います。しかしドイツを見てください。ナチスはすべてを統制しています：誰が展示でき、誰が購入でき、誰が売却できるか。何が『退廃芸術』で何がそうでないかを彼らが決定します」

モリソンは日置に身を乗り出した。

「そして戦争が全世界に広がれば、国家統制のモデルがいたるところで標準になる可能性があります」

会話はさらに続いた。モリソンは鞆から連絡先のリスト、ヨーロッパの地図を取り出した。彼は秘密裏の移送のための可能な経路、避けるべき人々、信頼できる人々について説明した。

パリに一人の商人がいた。アンリ＝ピエール・ロシェといい、アメリカの美術愛好家を皆知っていた。おそらく彼がアメリカへの移送を組織できるだろうか？しかし費用は天文学的で、保険会社は国際的緊張の時期にそのような輸送をカバーすることをおそらく拒否するだろう。

スイスという解決策もあった。スイスは中立を保っており、ジュネーブの数人の銀行家は芸術作品を彼らの金庫に保管することを受け入れていた。しかしここでも現金で支払わなければならない、輸出許可を得る必要があり、それは当局の注意を引くリスクがあった。

「イタリアはどうでしょう？」と日置が尋ねた。

「リスクが高すぎる。ムッソリーニはドイツ側にいる。まだ公然とは認めていないが。もし日本がドイツと同盟すれば、イタリアは同じ没収を適用するだろう」

「スペインは？」

「内戦からようやく脱したところだ。そしてフランコはヒトラー側に傾いている。今のところ関与を避けているが」
モリソンはヨーロッパの地図を机の上に広げた。

「見てください。赤で示したのは敵対的な国々、またはおそらくそうなるであろう国々です。オレンジは侵攻されるリスクのある国々。黄色は信頼できない中立国です」

日置は地図を眺めた。緑の地域はわずかしかなかった。ますます小さくなっていった。

「我々は罠にはまっている」

「必ずしもそうではない。まだ我々が言及していない解決策がある」

「どのような？」

「売却です。迅速に、慎重に、アメリカや南アメリカの個人コレクターに。お金を回収し、安全な場所に置くのです」

「しかし松方氏は決して…」

「松方氏はすべてを失うよりも、コレクションの価値を回収することを好むかもしれません。そしてお金で、戦後に再び始めることができるでしょう」

その考えは魅力的だったが、日置は雇い主をよく知りすぎていた。松方は富を得るためにコレクションしていたのではない。彼は美術館を創るためにコレクションしていたのだ。

「いいえ。彼はすべてを失うリスクを取ることを好むでしょう」

「それなら、オベールがパリで解決策を見つけることを期待するしかありません」

モリソンは書類を閉じ、地図をしまった。

「三つの名前をお教えしましょう。パリであなたを助けることができる三人です。しかし注意してください、この混乱した時代には、食欲がしばしば友情に取って代わるのです」

彼は紙に走り書きした。その急いだ筆跡は、日置を印象づける緊急性を明かしていた：

「ポール・ギヨーム ミロメニル街のギャラリー。アメリカのコレクターと親しい。ダニエル＝アンリ・カーンワイラー 優秀なネットワーク、すべての手口を知っている。しかしドイツ系なので、彼もまた疑わしい。アンブロワーズ・ヴォラルル 古い手練、すべての手口を知っている。しかし必ずしも正直ではない」

「この人々は信頼できるのでしょうか？」

「職業にあってはできる限り。それでも用心してください。戦争は人々の真の性格を暴き出しますが、必ずしも良い方向にではありません」

「どういう意味ですか？」

「つまり、何人かはあなたの困難な状況に付け込んで、法外な手数料を交渉したり、通り道でいくつかの作品を『紛失』させたりする誘惑に駆られるかもしれないということです」

「我々はどのような世界に生きているのでしょうか？」

「間もなく戦争になる世界に。そして戦時においては、尊厳は少数の人々しか許すことのできない贅沢となるのです」

夕方、日置は頭がくらくらしながらホテルに帰った。彼は計り知れない文化遺産の未来に関わる決断を下さなければならなかった。

ブルームズベリーのラッセルホテルは、より良い日々を知っていた-そして今でも覚えているヴィクトリア朝の施設の一つだった。彼らが続けている料金から判断すると。日置は三週間そこに滞在していた。暗い中庭に面した四階の小さな部屋に。あまり豪華ではないが、慎重だった。そして何より、スタッフは彼の出入りについて恥ずかしい質問をしなかった。少なくともこれまでは。

受付係のヘンダーソン夫人は、ますます大きくなる好奇心をうまく隠しきれない微笑みとともに鍵を渡した。日置は長年にわたって表面的な礼儀正しさを培っており、それによって距離を保つことができたが、訪問者の累積は自然にスタッフの疑念を呼び起こした。

「日置さん、お電報です。午後に届きました」

日置の心臓は速くなった。電報…彼は松方からの知らせを期待し、数週間積み重なった苦悩を裏切る熱っぽい動作で封筒を破った。

「こちらも状況心配 当局がコレクションについて質問 緊急会談提案 友情を込めて オベール」

彼はロビーの色あせた肘掛け椅子の一つに重くもたれかかった。パリでさえもはや安全ではなかった。簡潔な電報は、おそらく数語の中立的な言葉が示唆するよりもはるかに深刻な展開を隠していた。

彼は六月の最後の会談を思い出した。オベールはロダン美術館の自分の事務所で彼を迎えた。二つの彫刻と、風が吹くたびに倒れるカタログの山の間で。その場所の勉学的で親切的な雰囲気は、フランス人の学芸員を蝕む心配事とは対照的だった。

「親愛なる日置さん」と彼は特徴的な慎重な重々しさで言った、「時代が変わっているのを感じます。政治家たちは

我々の収蔵品にますます関心を示しています」。当時、日置は無害な行政検査だと思っていた。彼はなんと素朴だったことか。オベールが正しかったことを彼は悟った。

彼は部屋に上がり、机代わりに使っている小さなテーブルに座った。外では、ロンドンが九月の霧の中で眠りについていた。どこかで役人たちがおそらく彼の名前の入ったリストを作成していた。またどこかで、モリソンも一日を終えながら、すべてを話したことが正しかったかどうかを自問していた。

彼は一枚の紙を取り、オベールへの返事を書き始めた。状況が要求する注意深さで一語一語を吟味した：

「こちらも状況困難 あなたとの会談不可欠 来週初め
パリ到着 最悪に備えよ 敬具 日置」

それから彼は二通目の電報を書いた。日本の松方のために。適切な言葉が彼から逃げた。何年もの仕事が煙と消える危険があることを雇い主にどう告げればよいのか？彼らが法の尊重でこれほど賞賛していた西欧民主主義国が、彼らのコレクションを没収しようとしていることをどう説明すればよいのか？

「地元当局との心配な会話 パリへの移送検討 ご指示をお待ちします 敬具 日置」

彼は用語について長く躊躇した。美しい文明世界がついに真の顔を見せた。

彼は一九三五年の松方との会話を思い出した。彼らはポール・ローゼンベルクでのピカソ展から帰るところだった。彼の雇い主はラ・ボエティ街の歩道で物思いに沈んでいた。

。

「日置…」と彼は言った、「我々がコレクションをヨーロッパに残したのは正しかったと思いますか？」

「もちろんです、松方さん。日本政府の馬鹿げた課税をどうして予見できたでしょう？」

「それについて話しているのではありません。一九二五年にすべてを日本に持ち帰るべきだったのではないかと思うのです。法外な関税を払ってでも。少なくとも、我々の作品は安全だったでしょう」

「何から安全だったのでしょうか？」

「戦争からです、日置。ヨーロッパは二十年ごとに互いを引き裂く困った傾向があります。そして大砲が語るとき、芸術は沈黙するのです」

彼の雇い主はなんと正しかったことか…日置は電報を書き終え、受付に持参するために階下に降りた。

ヘンダーソン夫人はできるだけ早く発送することを約束した。彼女は奇妙に、ますます大きくなる疑念を表す執拗さで彼を見ていた。

部屋に戻ると、彼は長年つけている日記を取り出した。思考を整理し、亡命に耐えるのを助ける日常の儀式。彼は書いた：

「ロンドン、一九三九年八月二十八日。戦争が近づいている、そしてそれとともに我々の夢の終わりがおそらく。モリソンは私の目を開かせた。我々はもはやコレクターではなく、標的である。どうしてこうなったのだろうか？」

日置はペンを置き、窓に向かった。中庭で、猫たちがネコ科動物の至上の無関心でゴミ箱を漁っていた。生活は続いていた、人間のドラマを意識することなく。猫たちは、少なくとも、守るべき美術コレクションを持っていなかった。

彼の心は松方家に仕えた最初の年月に漂った。将来の雇い主の並外れた人格が彼に即座に及ぼした魅力。

「日置…」と初回の面会で彼は言った。香と貴重な木の匂いがする豪華なサロンで、「周りを見てください。日本は世界に開かれています、技術と産業のためだけです。モネやロダンが世界のすべての商業条約に匹敵する価値があることを誰が理解するのでしょうか？」

松方における情熱は無傷だった。しかし世界は変わっていた。芸術は重要な賭けの対象となっていた。作品は、国家間の権力ゲームにおける人質だった。彼の青春の理想主義は、国際的な力関係の残酷な現実と直面していた。

ドアを叩く音が彼の思索を中断した。彼は時計を見た。夜の十時。いったい誰が…遅い時間は何も良いことを告げていなかった。

「日置さん？ある紳士が下でお会いしたいと言っています。急用だと言っています」

日置は用心深く階下に降りた。薄暗いロビーで、五十代の男が待っていた。きちんとした服装、上品な様子、しかし彼の視線の何かが気に入らなかった。

「日置さんですか？私はホワイトホールのエドワード・キャンベルです。数分お話しできますでしょうか？」

彼の血は凍った。外務省の役人が、夜の十時に…偶然にしては出来すぎていた。モリソンは正しかった。

「もちろん。サロンに参りましょう」

キャンベルは彼についてロビーに隣接する小さな部屋に入った。すり切れた肘掛け椅子とぐらつくテーブルで家具が揃えられていた。彼は招かれることなく腰を下ろした。

「日置さん、率直に申し上げます。あなたがパンテクニコン倉庫に重要な美術品を保管していることを我々は知っています。また、あなたの政府が現在ドイツとの和解を交渉していることも知っています」

日置は答えなかった。何を言えるというのか？明白なことを否定するのか？彼の相手は明らかにすべての詳細を知っており、推測だけで満足していなかった。

「このような状況において」とキャンベルはイギリスの外交官が好む丁寧な口調で続けた、「女王陛下の政府は、潜在的に敵対的な国の国民の所有する貴重品を残しておくことの適切さを疑問視しています」

「キャンベルさん、我々の活動は合法です。すべての購入は透明性を持って行われ…」

「疑いません」とキャンベルは遮った、「しかし平時の合法性と戦時の合法性は二つの異なるものです」

その区別は日置を震え上がらせた。彼らはもはや意図を隠そうとしなかった。口実も必要なかった。法が状況に応じて可変的になっていた。

「何を提案されるのですか？」

キャンベルは微笑んだ。

「あなたのコレクションを政府の保護下に自発的に置くことを受け入れていただくことを提案します。国際情勢が明確になるまでの間」

「もし拒否したら？」

「それなら我々はより…指導的な処置を取ることを余儀なくされるでしょう。すべての人の安全のために…」

日置は偽装された最後通牒に直面していることを理解した。「保護下への配置」を受け入れるか、没収を受けるか。偽善が盗みに合法性の装いを与えていた。

「決断するのにどれだけの時間をいただけますか？」

「そうですね…四十八時間。合理的だと思われませんか？」

四十八時間…モリソンは三ヶ月と言っていた。明らかに、事態は予想より速く進んでいた。あるいはモリソンが推定を誤ったのかもしれない、それも可能な仮説だった。

「キャンベルさん、もし私があなたの提案を受け入れた場合、具体的に何が起こるのか尋ねてもよろしいでしょうか？」

「あなたの作品は政府の安全な保管所に移されます。そこで敵対行為が終わるまで良好な状態で保管されるでしょう。詳細な目録が作成され、あなたは受領証を受け取ります。完全に正規のものです」

「戦後は？」

「戦後は、各ケースを個別に検討します。紛争中にあなたの政府が取った態度に応じて」

言い換えれば、もし日本がドイツ側について戦ったら、松方コレクションは さよならだった。論理は容赦なかった。

「もし作品を中立国に移すことを決めたら？」

キャンベルは軽蔑的な小さな笑いを漏らした。

「親愛なる先生、国際的危機の真っ只中に、日本国民所有の価値ある品物の輸出を我々が許可すると思われませんか？」

「しかし私には権利が…」

「権利がありました、日置さん。時代は変わります。そして権利もそれと共に」

キャンベルは立ち上がり、注意深くコートを整えた。

「四十八時間です、日置さん。その期限を過ぎれば、我々是我々の法的特権に従って行動します」

彼は出口に向かい、それから誰もだませない偽りの無関心な様子で振り返った。

「ああ、忘れるところでした。近日中にパリ旅行をお考えだと理解しましたが？」

「そうかもしれません…」

「強くお勧めしません。国際的な旅行は…複雑になる危険があります。非常に複雑に」

そして彼は去り、日置を一つずつ崩れ落ちる確信と共に一人残した。

自室に戻ると、日置は肘掛け椅子に身を投げた。四十八時間……どうやってオーベールに知らせればよいのか？こんな短時間でいったい何をどう準備すればよいのか？自分を潰そうと決めた政府を相手に、一人でどうやって奇跡を起こせというのか？

彼は手帳を取り出し、付け加えた：「午後十時三十分—キャンベル（外務省）の訪問。偽装された最後通牒：『自発的』没収を受け入れるまで四十八時間。パリ行きは危険。四方八方から罠に嵌められている」。

他に選択肢はあるだろうか？日本大使館に連絡することはできるだろうか？しかしモリソンによれば、大使館もおそらく監視されているとのことだった。それに、彼らが何をしてくれるというのか？圧力に屈する前に形だけの抗議を

するくらいだろう。現在の国際情勢では、日本は大英帝国に対して何の影響力も持たない。

個人の美術商なら、どうだろうか？密かに移送を手配してくれる人が……しかし誰がそんな危険を冒すだろう？それに仲介者に支払う金はどこにあるのか？松方の財産は日本の銀行とますます監視の厳しくなるヨーロッパの口座の間で封鎖されているのだ。

彼は突然、モリソンが言及していた名前を思い出した：アンリ=ピエール・ロシェ。アメリカの収集家たちを皆知っているパリの美術商。もし誰かが解決策を考え出せるとすれば……まあ、彼にその気があり、自分にとってリスクが大きすぎなければの話だが。

日置は新しい便箋を取り、ロシェ宛ての電報を書き始めた。一語一語を吟味しながら：「ロンドンの日本コレクション緊急事態。秘密裏の移送または保護の解決策を探している。モリソンがあなたの名前を教えてくれた。秘密会談は可能でしょうか？ロンドン、ラッセル・ホテルの日置」。これは危険な賭けだった。ロシェは彼を知らず、手助けする理由など何もない。しかしこれが最後のチャンスかもしれない。ロシェがすでに事情を知っていて、作品が安値で市場に出るのを平然と待っているということではなければ。

彼はこの電報もヘンダーソン夫人に渡しに階下へ降りた。一晩で三通の電報に加えて、省庁の使者の夜間訪問……彼女は彼の活動の性質について重大な疑問を抱いているに違いなかった。

「大丈夫ですか、日置さん？」彼女は礼儀正しい表現の下に隠れる典型的なイギリス人の好奇心をもって尋ねた。

「はい、ありがとうございます。緊急に処理しなければならない案件がいくつかありまして」

「もちろんです。おやすみなさい」

しかし彼女の口調は、だまされていないことをはっきりと物語っていた。

自室に戻っても、日置は眠りにつくことができなかった。窓から眠っているロンドンを眺めながら、平和な街を見るのはこれが最後になるのかと自問していた。

明日は決断を下さなければならない。偽装された没収を受け入れて、戦後にコレクションを取り戻せることを期待するか？それともフランスへの秘密移送を企てるか？どちらの場合も、すべてを失う危険があった。しかし少なくとも、何かを試みることで、松方の目的を救おうと努力したと自分に言い聞かせることはできるだろう。それで大したことが挽回されるわけではないが、何もしないよりはましだった。

結局、午前三時頃に眠りについた。古い日本が西洋を警戒していたのは正しかったのではないかと考えながら。おそらく自国が世界に開かれたのは間違いだったのだ。おそらく孤立の方が、西洋の自称文明よりも結局は安全だったのだ。

翌日、日置はドアを執拗に叩く音で目を覚ました。時計を見た。午前六時。いったい誰が……この朝の早い時刻は良いことを予告していなかった。

「日置さん！日置さん！緊急事態です！」

ヘンダーソン夫人の声だと分かった。

彼がドアを開けると、受付係はまだガウンを着たまま、髪を乱していた。

「日置さん、これをお聞きください。ニュースでやっています！」

彼女は彼をサロンへ連れて行った。そこではラジオがざあざあと雑音を立てていた。BBCのアナウンサーの声は重々しく、災害を予告する厳肅さに満ちていた：

「……カムデン・タウンのパンテクニコン倉庫を襲った火災。消防隊は一晩中炎と闘いましたが、建物のほぼ全焼を防ぐことはできませんでした。最初の推定によれば、損害は数百万ポンドに上ります。高価値の美術コレクション数点が破壊されたものと思われます」。

すべてが終わった。コレクションのロンドン部分が一夜にして煙と消えた。何という見事な偶然だろう。キャンベルが彼を訪問したのは火災の十二時間前で、そして今パンテクニコンが燃えているのだ。

ヘンダーソン夫人が紅茶を一杯持って来てくれた。彼は機械的に、それと気づかずに飲んだ。紅茶は灰の味がした。

「お気の毒です、日置さん。あなたの品物があそこに保管されているとおっしゃっていましたがね……」

彼は答えなかった。何と言えよいいのか？ ロンドンの空にまだ立ち上っている煙が、四十年の情熱と一緒に運び去っているのだった。

一時間後に電報が届いた。もちろんモリソンからだった：「すべて破壊。お悔やみ申し上げる。状況明確。可能ならパリを救え。幸運を祈る」。

今となっては、オーベールのところに保管されている作品しか残っていなかった。もしそれらがまだそこにあればの話だが。

彼は自室に上がり、機械的な動作で荷物をまとめた。パリ……キャンベルの「助言」にもかかわらず、行かなければならない。それは松方に対する義務だった。そして災害から何かを救う最後のチャンスかもしれない。なかった。

スーツケースを閉めながら、彼はキャンベルのことを考えた。キャンベルは考える時間として四十八時間と言っていた。しかしロンドンでもはや没収すべきものが何もない以上、その申し出は水泡に帰した。火災はあらゆる交渉よりも効果的に問題を解決したのだった。

パリが残っていた。そしてオーベール。そしてフランスでは事態が違った展開を見せるだろうという微かな希望が。彼は間違っていた。

第2章：一九四四年の陰謀

パリ、一九四四年十月

コレクションは長年にわたって生き延びていた。ロダン美術館の地下室に隠され、マルセル・オベールによって守られていたのである。オベールは、ナチスがこの宝物を手に入れることを防ぐために、機知を働かせて競わなければならなかった。実際、彼の直属の上司であるジョルジュ・グラップは、ヴィシー政権と公然と協力していたため、粛清期間中に停職処分を受け、その後解任された。しかし一九四四年十月、事態は急展開を見せることになる。

マティニョン宮の事務室には、まだ占領の匂いが残っていた。金箔を施した羽目板の会議室で、四人の男たちがホワイトカラー犯罪を犯そうとしていた。

いや、厳密には盗みではない。むしろ愛国的行為に偽装された略奪である。

ド・ゴールは将軍の制服を着て議長を務めていた。彼の視線は目の前に散らばった書類を見渡していた。赤いスタンプが押された「松方コレクション」と記された書類で定期的に立ち止まっていた。将軍は、常に管理上の複雑さよりも直接行動を好んでいた彼にとって、法的な微妙さに苛立ちを覚えていた。それでも、新たに回復した正統性には、非の打ちどころのない合法性の外観が必要であることを彼は承知していた。

右側では、暫定政府の財務大臣ルネ・プレヴァンが神経質に財政見積もりを見直していた。経験豊富な経済学者は計算していた。頭の中で、日本の作品はフランに変換されていた。多額のフランに。プレヴァンは血を流し尽くしたフランスの重荷を背負っていた。あまり深く掘り下げたくな

い疑問を提起するものであっても、潜在的な収入源はすべて救命胴衣のように見えた。

向かい側では、アンリ・トレス法廷弁護士が報告書を読んでいた。著名な弁護士は抜け穴を探していた。違法なものを合法にする方法はあるのか？トレスは法律のグレーゾーンを航行する能力で評判を築いていた。

最後に、ジャック・ジョジャールは興奮して写真カタログを眺めていた。芸術文学局長は問題となっている作品の重要性を知っていた。占領期間中、彼は国家コレクションを救うために命を危険にさらしていた。今日、彼は泥棒の立場に立たされていた。

ルイ十五世の時計が十七時を告げた。

「諸君」ド・ゴールは響き渡る声で始めた。「我々はこのに日常的な問題のために集まったのではない。これはフランスの文化的未来に関わることだ。四年間の不幸によって血を流し尽くした芸術遺産を再建する我々の能力に関わることだ。しかし、これは国家主権の問題でもある。再生するフランスは自らの権利を主張しなければならない。すべての権利を。勝利国としての資格が与える権利も含めて。」

プレヴァンが最初に発言した。彼は応用された注意深さで介入を準備し、安心させる数字の流れの後ろに自らの緊張を隠していた。

「将軍、状況を要約させてください。」

彼はファイルを開き、統計の抽象化の中に自らの不安に対する避難所を求めた。

「爆撃、ナチスの略奪、様々な破壊…我々の美術館は数千点の作品を失いました。コレクションを再建するには二十

億フランが必要でしょう。戦前の文化予算の完全に二十年分です。」

「ところが」プレヴァンは続けた。「我々は日本の松方コレクションという恵まれた好機に巡り合います。戦前から奇跡的に保存され、その大部分がロダン美術館の地下室に保管されています。私の部署では四億フランを超える価値があると評価しています。」

「四億フランですって？」ジョジャールは叫んだ。「冗談でしょう、そうでしょう？ヴァン・ゴッホの『アルルの寝室』だけで数千万フランの価値があります！」

ジョジャールの憤慨は彼の動揺を露にしていた。彼は芸術の保存に人生を捧げてきたが、今や卑俗な商品のようにその価格を論じる立場に置かれていた。

プレヴァンは肩をすくめた。

「これらの作品を日本に送り返すことを許せば、我々は千載一遇の機会を失うことになります。そして敵国に文化的処女性を回復する機会を提供することになります。」

最初からメモを取っていたトレスが、ついに頭を上げた。

「諸君、コレクションの性質づけが問題です。」

ド・ゴールは眉をひそめた。将軍は、すでに決断を下したときに障害を示唆されることを嫌っていた。

「確かに、日本は一九四〇年九月に枢軸国に加わりました。しかし、フランスがこの国と戦争に入った条件は…言ってみれば…解釈の余地があります。」

将軍の視線は硬くなった。彼は自分の決定が疑問視されることを好まなかった。特に、彼が二次的と考える詳細な点について。ド・ゴールは、技術的な異議が彼の政治的ビジョンに反するとき、それらを一掃する傾向があった。

「トレス法廷弁護士、あなたの考えを明確にしてください。一九四一年十二月の我々の宣戦布告は、日本を敵として資格づけるのに十分ではないのですか？」

トレスは緊張して咳をした。彼は将軍に反対することの危険を感じていたが、知的誠実さが彼に困難を提起することを義務づけていた。

「将軍、問題は無視できないいくつかの要素から生じます。第一に、宣戦布告は自由フランスの公式通報に掲載されたことはありません。形式的な問題です。第二に、それは国民フランス委員会から発せられたものですが、その正統性は…当時争われていました。我々の同盟国の一部によってもです。」

時計の時を刻む音だけが聞こえていた。プレヴァンはジョジャールと心配そうな視線を交わした。

「もっと厄介なことがあります」トレスは続けた。「ヴィシーは日本に宣戦布告したことはありません。反対に、一九四四年八月まで東京との正常な関係を維持していました。」

彼は頭を上げ、地雷原を歩いていることを意識していた。

「ところで、我々はその継続性においてフランス国家の相続人なのです。ヴィシー政権の多くの行為も含めて、それらを一筆で消し去ることはできません。」

ド・ゴールは身を起こし、表情を閉ざした。将軍は、ヴィシーとの何らかの継続性が言及されるたびに爆発的な怒りを感じていた。彼は国民革命との絶対的な断絶の上に正統性を築いていたからだ。

「トレス法廷弁護士！あなたはまさか、ガリスト・フランスがペタンの行為にいかなる正統性も認めることを望まないでしょうね？」

彼の声調は上がり、彼を捉えている苛立ちを明らかにしていた。

「容認できない立場です！」

「将軍、ヴィシーを正統化することではありません…」

「では、何のことですか？」

トレスは再び咳をし始め、さらに深く沈み込んでいることを意識していた。

「占領下のフランス国家の多くの行為がまだ効力を発揮していることを認識することです。実際、期間中に締結された多くの条約が維持されている理由もそこにあります。」

芸術問題の熟練した専門家であるジョジャールは、雰囲気や和らげるために発言した。局長は将軍の機嫌が嵐に向かっていると感じ、より親しみやすい領域に議論を戻すことを好んだ。

「将軍、法的な…いえ、法律的な問題は、重要ではありませんが、例外的な争点を見失わせるべきではありません。」

彼は写真アルバムを開き、作品の鑑賞の中に、彼を襲う道徳的ジレンマに対する慰めを見出していた。

「私はコレクションの内容を詳細に調査しました。世界一級の重要性を持つ宝物です。ヴァン・ゴッホの『アルルの寝室』、アメリカ人が何年も我々を羨んでいる作品。成熟期の三点のセザンヌ。息をのむような美しさの『サント・ヴィクトワール山』。世界で唯一のロダン作品。マスターが決して売ろうとしなかった『地獄の門』の数点の石膏模型…」

「全部で何点の作品ですか？」プレヴァンが遮った。

「約三百五十点の一級品。それに日本版画のシリーズ。このコレクションだけで我々の国立美術館を昇華させることができるでしょう。」

「その通りです！」ド・ゴールはテーブルを叩いて叫んだ。「まさにそれこそが、我々がこのような機会を逃すことができない理由です。」

彼はトレスの方を向き、声に焦燥が滲んでいた。

「法廷弁護士、私はあなたの予防的措置を理解します。しかし、我々の良心の呵責が国家を麻痺させてはなりません。解決策はありますか？」

トレスはそれがどう終わるかを知っていた。将軍は、いつものように、すでに決断していたのだ。彼は急がずにブリーフケースを開け、執筆していたいくつかの計画を取り出した。

「三つの選択肢を準備しました。それぞれに利点と欠点があります。最初のものは簡単です。敵国財産に関する一般命令の採択。日本は自動的にその中に含まれます。我々の領土上の彼らの財産はすべて一挙に管理下に置かれます。」

「利点は？」

「最大の効率性。我々の裁判所で異議を唱えることは不可能。日本の所有者は口を開く権利さえないでしょう。」

「そして欠点は？」

トレスはわずかに顔をしかめ、外交的困難を予想した。

「国際的に騒ぎになるでしょう。我々の同盟国は反発するかもしれません。他国における自国民に対する厄介な前例と見なすかもしれません。」

ド・ゴールは、彼の行動を妨げる詭弁に対する苛立ちを示し、重要でないハエを追い払うように異議を一蹴した。

「アメリカ人とイギリス人はドイツの財産に対して同じことをしています！」

「他の解決策は？」プレヴァンが急かした。

「第二の選択肢。公益のための徴収。我々は、すべての被った破壊の後にフランスの文化遺産を再建する義務を援用します。」

ジョジャールは頭を上げ、希望と懐疑の間で引き裂かれていた。

「確実ですか？」

「いいえ、より脆弱です。徴収は通常、補償を意味します。馬鹿げています。さらに、国務院が我々を攻撃するかもしれません。」

「第三の選択肢は？」ド・ゴールは、本質から遠ざける詳細にうんざりして主張した。

「三つの選択肢を準備しました。それぞれに利点と欠点があります。最初のものは単純です。敵国財産に関する一般命令の採択です。日本は自動的にその対象に含まれます。我が国の領土にある彼らの財産はすべて一挙に管理下に置かれます。」

「利点は？」

「迅速さです。議会討論も公開討議も不要。適用するだけで終わりです。国内法上、法的に攻撃の余地はありません。」

「では欠点は？」

「範囲が広すぎることです。中立国からの抗議、厄介な外交上の抗議を招く恐れがあります。アメリカもこれほどの強引さに動揺するかもしれません。」

ド・ゴールは身振りでその異議を一蹴した。

「アメリカ人はドイツの財産に対してそれほど気を遣っているだろうか？ ルーズベルト自身、一九四一年にすべての日本資産を凍結したではないか？」

「確かに」とトレスは認めた。「しかし一般命令は我々のやり方に注目を集めることになります。第二の選択肢はより控えめです。松方コレクションだけを対象とした個別命令です。フランス国家が戦争行為によって日本に対して持つ債権を援用します。」

「つまり？」

「インドシナです。公式には、日本は我々のアジア植民地を奪いました。損害は……そうですね……数十億に上ると評価できます。コレクションは自然な補償となります。」

ジョジャールは眉をひそめた。

「問題は、ヴィシー政権が一九四一年のダルラン・加藤協定によって日本のインドシナ占領を承認していることです。法的には、日本は何も盗んでいません。我々の許可を得たのです。」

「だからこそこの道はお勧めしません」とトレスは答えた。「残るは第三の選択肢、最も巧妙なものです。正式な所有権には手をつけません。単にコレクションを『戦時保護』の名目で凍結するのです。その後、将来の平和条約の枠組みの中で長い交渉過程を組織します。あまりに長く続けば、彼らは疲れ果てて、いくつかの象徴的な譲歩と引き換えに権利を放棄するでしょう。」

「どのくらいの期間ですか？」プレヴァンが尋ねた。

「五年？十年？誰に分かるでしょう。肝心なのは、その間、作品はフランスに、我々の美術館に、我々の管理下に留まるということです。」

将軍は指でテーブルを叩きながら考えた。

「その考えは気に入った。保護に偽装した収奪。実にフランス的だ。トレス法廷弁護士、選択肢一と三を組み合わせた命令を起草してくれ。即座の管理下への移行、その後の際限のない交渉だ。」

トレスは、操作の高揚感の中で誰もが忘れていた重要な点を思い出させる必要があると感じた。

「将軍、私は根本的な問題を強調したいと思います。命令、即座の管理下への移行には完璧です。しかしその後は？戦争が終わったとき、これらの財産をどうするのですか？管理は、定義上、一時的なものです。」

その指摘は冷水を浴びせる効果があった。プレヴァンは急に身を起こした。

「単純な管理にとどまるなら、平和条約が署名され次第、理論的には松方相続人にすべてを返還しなければならないでしょう。」

「つまり、何のために苦労したかわからない、ということです」ジョジャールは少し辛辣に付け加えた。

「何もしないより悪い！我々は何年間も保存と警備の費用を負担して、結局すべてを返すことになります。」

ド・ゴールはその時、身近な人々がよく知っている笑顔を浮かべた。

「もちろん、将来の平和条約で特定の条項を交渉することができれば別ですが…」

彼はプレヴァンの方を向いた。

「プレヴァン、同盟国との交渉における我々の立場を準備することを期待しています。条約が戦争賠償として我々にこれらの作品を保持する権利を与えることを認めさせる必要があります。」

プレヴァンは遠くから障害がやってくるのを感じていた。

「我々の同盟国がそれを受け入れると思いますか？」

「我々の同盟国は日本に巨大な利益を持っています。アメリカ人は賠償で天文学的な金額を回収するでしょう。彼らは我々がインドシナでの損失に対して補償される権利を拒否することはできません！」

トレスは狂ったように書きなぐり、将軍の思考の連鎖に従いながら、必要な法的構築を精神的に構造化しようとしていた。

「将軍、我々の戦略が持ちこたえるためには、日独同盟によってフランスが被ったすべての損害を詳細に文書化する必要があります。インドシナでの我々の損失はもちろんですが、太平洋戦争によってこの地域の我々の経済的利益に与えられたすべての損害も。」

「素晴らしい指摘です！」ド・ゴールは承認した。「私は外務省に資料作成を委託します。それが厚ければ厚いほど、我々の立場は攻撃できないものになります。」

ジョジャールはやり取り全体を聞いており、ますます不快感を覚えていた。

「将軍…申し訳ありませんが…我々はフランスのイメージを少し汚すことにならないでしょうか？これは偽装された略奪として見られる危険がありませんか？我々の国は…つ

まり、我々は私有財産の尊重について一定の評判を持っているのです…」

ド・ゴールの視線は北極の氷原に変わった。部屋の雰囲気は一気に十度下がった。将軍は、特に身近な協力者からの決定に対するいかなる疑問視に対しても、抑制された怒りを抱いていた。

「ジョジャール！私があなたの記憶を新たにする必要があるのでしょ…うか？」

彼は勢いよく立ち上がり、檻の中の野獣のように部屋を歩き回り始めた。悪い兆候だった。将軍が円を描いて歩き回り始めるときは、圧力が高まっており、彼の挫折が発散口を求めているときだった。

「我々は何万点もの作品を失ったのです、お聞きでしょうか？略奪され、破壊され、ナチスによって二束三文で『購入』されました！ドイツ人は我々の美術館を空にし、アメリカ人は我々のすべての芸術市場を奪い取り、そしてあなたはこのような機会を見逃したいのですか？」

彼は踵で向きを変え、黒い瞳で見つめた。

「いいえ！フランスには正当な権利があります。それを使用するのはです。」

「しかし将軍…松方基金は戦前から存在していました。その所有者はフランスの友人でさえあったと思うのですが…」

「まさにその通りです！」ド・ゴールは爆発した。「そして今日、日本で創設するはずだった彼の有名な西洋美術館はどこにあるのでしょうか？」

彼の身振りはますます演劇的になり、まるで見えない聴衆に語りかけているかのようで、大きな効果に慣れた演説家の気質を露にしていた。

「軍国主義の日本は美学者の国を戦争機械に変えてしまったのです！松方氏の善意は彼の国の発展によって一掃されました。我々は軍国主義の野蛮からこれらの作品を保護しているだけなのです！」

トレスは部屋に立ち込める電気の嵐を感じた。事態が悪化する前に皆を現実に戻そうと試み、緊張を緩和することに慣れた弁護士の経験を駆使した。

「将軍、予定通り進めるとすれば、我々の部署が確固たる論拠を構築する必要があります。コレクションに何があるかを評価する専門家チームの設置を提案いたします」

「素晴らしいアイデアだ！」とプレヴァンは、技術的な検討事項に注意を向けることができ安堵しながら賛同した。「フランス国内外の世論も準備しなければならない。この作戦は決して便宜的な没収に見えてはならない」

「どのように進めるおつもりですか？」とジョジャールは、将軍の爆発にまだショックを受けながら尋ねた。

プレヴァンは頭の中ですべてを計算していた。

「いくつかの要点を繰り返し強調することだ。まず、アジアにおける日本の戦争犯罪。今や十分に文書化されており、否定は不可能だ。次に、ナチス・ドイツとの同盟。そしてインドシナで我々に与えたあらゆる損害。このコレクションが我々の莫大な被害に対する正当な補償であることを世論に知らせなければならない」

「文化的な観点ではどうでしょうか？」とジョジャールは食い下がった。

「文化的な観点では、これらの西洋の作品は日本よりも、その起源である国々でよりよく保存されるであろうと説明する。戦争で荒廃し、復興に専念している国では、これらの作品が軽視される恐れがある」

ド・ゴールはうなずいた。

「諸君、この状況のあらゆる複雑さを理解していることがわかる。我々の会議は厳秘事項だ。我々の討議の書面による記録は一切残さない。よく理解したか？」

彼はそれから役割を分担した。

「トレス法務官、最長四十八時間以内に法令案を出してもらいたい。一分たりとも遅れてはならない。プレヴァン、予想される利益の正確な評価を含む財政的影響についての詳細な覚書を作成してくれ。ジョジャール、最も興味深い作品を慎重に特定し、我が国立美術館間での配分計画を策定してもらいたい」

「将軍、署名はいつ頃を予定されていますか？」とトレスは、すでに頭の中でスケジュールを組み立てながら尋ねた。

「可能な限り迅速に。日が経つにつれて、日本人がこれらの作品を中立国に送還しようとしたり、我々から逃れる他の手段を見つけようとするリスクが高まる」

彼は腰を下ろし、決然とした様子で、表に出した決意の陰に隠れた国際的な反応への恐れを覆い隠した。

「法令が署名され官報に公布されれば、彼らはもはや有効な救済手段を持たなくなる」

「それでも松方家の相続人が我が国の裁判所で異議を申し立てた場合はどうでしょうか？」とトレスは、起こりうる複雑な事態を考えながら食い下がった。

ド・ゴールは不機嫌な表情を浮かべ、愛国的な高揚の背後に隠れていた冷酷さを露わにした。

「トレス法務官、むしろ真の問題を自問したまえ。誰が彼らの弁護を引き受けるというのか？どのフランス人弁護士が、元ナチスの同盟者の利益のために、フランスの至上利益に対して弁護する勇気を持つというのか？少し教えてもらいたい…」

「たとえ誰か向こう見ずな者を見つけたとしても、どのような根拠で異議を申し立てるというのか？我々の法令は法の効力を持つ」

プレヴァンは強くうなずいて賛同し、経済学者としての彼は何の費用もかけずに大きな利益をもたらす作戦の巧妙さを味わっていた。

「彼らの立場は非常に脆弱だ。そして敗戦した日本は我々に対する圧力手段を何も持たない。それどころか、復権のために我々の好意を必要とするのは日本の方だ」

「さらに良いことがある」とトレスが付け加えた。「異議申し立てがあるとすれば、それは我々の行動の合法性に疑問を呈する弁護士からしか来ない。異議を申し立てることは国益に反する行為だと主張することができる」

この発言は的を射た。当初は渋っていたジョジャールでさえ、この仕組みの堅固さに次第に納得し始めた。

会議は長引いた。実務的な側面がすべて詳細に検討された。差し押さえの方法、美術館の貯蔵庫への安全な移送を伴う詳細な目録作成、入念に調整された広報。うまくいくプロジェクトと大失敗を分ける詳細の類である。

トレスは綿密なスケジュールまで提示した。十月第一週の法令署名、直ちに差し押さえ、十一月末までに完全な目録作成、クリスマス前の美術館への移送。

「費用はどうなりますか？」とプレヴァンが尋ねた。

「輸送と保険の費用はコレクションの評価額から差し引かれます」とトレスが答えた。「つまり、作品が自らの没収費用を賄うということです」

「完璧だ」とド・ゴールがコメントした。「費用ゼロで数億フランに相当する美術品をもたらす作戦だ」

トレスが目録作成の問題を提起すると、ジョジャールはチャンスだと思った。彼は損害を制限し、作戦において最低限の職業倫理を保つことができるかもしれないと考えた。

「後日の異議申し立てを避けるため、混合委員会による目録作成を提案します。フランス人と中立的な外国人専門家による。これにより作戦により多くの信頼性を与えるでしょう」

「絶対にだめだ！」とド・ゴールは鋭く反駁し、あらゆる外部統制への不信を表した。「いかなる外国人にも、我が領土における我々の行動を統制する権利は与えない。目録作成は完全にフランス人のみで、我々の専門家により行われる」

「しかしそれでは国際的な信頼性に問題が生じる恐れがあります」とジョジャールは臆病に反対した。「他国が疑問を抱くでしょう…」

「フランスの国際的な信頼性は、数人の外国人専門家が何を考えるかによって測られるものではない」とド・ゴールは反駁し、国際関係についての彼の軍事的な概念を露わにした。「それは我々の利益を守る能力によって測られるのだ」

その夜四人の男が別れたとき、十月の暗闇がパリに降りていた。彼らは近代において最も恥ずべき芸術品略奪の一つとなるものの基礎を据えたところだった。それぞれが自分

なりの責任の分担と正当化のメカニズムを抱えて家路についた。

共和制の合法性という衣装をまとうという点で、なおさら悪質な略奪であった。絹のネクタイを締めたスーツ姿の泥棒のように。

マティニョンの廊下では、秘書や小間使たちがいつもの仕事に従事していた。彼らは今しがた下された決定について何も知らなかった。無知は良心を守る。

外では、パリの街で生活が次第に正常な流れを取り戻していた。カフェが再び扉を開き、劇場も同様だった。人々はいよいよ息をついていた。共和国の重厚な執務室で、あまり名誉でない一頁が書かれたばかりだとは誰も想像できなかった。

一九四四年十月五日、予定通り、法令がド・ゴール自身により署名された。文面は解釈の余地を残さなかった。フランス領土内に存在する日本国民に属するすべての財産は「国家の至上利益のために」保全的差し押さえの下に置かれた。

賽は投げられた。松方コレクションは、もう二度と手放すことのない無慈悲なメカニズムの網にかかったのである。

外務省公文書館では、法令の写しが「日本問題」と記された書類綴りにファイルされた。他の写しは関係省庁に送られた。各行政機関は、官僚が愛する暗号化された言語で書かれた具体的指示を受け取った。みんなが理解しなければならぬが、何も明確に言われてはならないからである。

それと並行して、情報機関はまだフランスに滞在している日本国民をすべて監視し始めた。彼らの些細な移動、接触、外国との連絡の試みが書類に記録された。目的は？計画

された押収を遅らせる可能性のあるいかなる行動も阻止することであった。

署名から三日後の十月八日の朝、大蔵省の専門チームが主要な保管場所に現れた。内部で「秋の収穫」と名付けられたこの作戦は、軍事的精密さで計画されていた。

ロダン美術館では、この日主任学芸員ジョルジュ・グラップが不在だったため、マルセル・オベールが朝七時に、廷吏を伴った二人の役人により自分の執務室に呼び出された。厳しい目覚めであった。

生涯にわたって日仏友好のために働き、芸術が国家間の対立を超越できると確信していた彼にとって、この策略によって自分の努力が無に帰すのを見ることは、隠しきれない落胆に陥れた。

「副学芸員殿」と任務責任者は、オベールの明らかな狼狽に直面して、無表情の陰に隠れた真の当惑を覆い隠しながら、自信を持って宣言した。「貴館に保管されている日本の財産の目録作成と差し押さえを行いに参りました」

彼は確信を持って文書を差し出した。

「これが我々を授権する法令です。すべてここに、白地に黒で書かれています」

オベールは震える手で読んだ。芸術と日仏友好に捧げた人生が数行で崩壊した。松方と絵画について語り合った夕べを思い出した。芸術が国民的差異を超えて人間を結びつけることができるように思えた時代への郷愁が、痛ましく彼を襲った。

「皆さん」と彼は毅然とした声を装いながら試みた。「これらの作品は私の個人的な友人から託されたものです。フランス芸術の偉大な愛好家である松方氏は、我が国に対し

ていかなる敵対的な活動も行ったことはありません。我々は長年にわたって一緒に何かを築いてきたのです…」

「オベール氏」と役人は彼を遮った。「我々は政府の一般方針を議論するためではなく、それを適用するために来ています」

彼は乾いた音を立てて書類鞆を閉めた。オベールの視線を避けることを可能にする機械的な仕草だった。

「これらの財産は敵国の国民に属しています。したがって十月五日の法令の適用対象となります」

より若く、明らかに芸術的論拠に対して免疫のある第二の役人が、厳しい口調で追い討ちをかけた。

「副学芸員殿、作品の起源や所有者の善意など問題ではありません。重要なのは現在の所有者です。そしてその所有者は日本人です。ニュアンスをお分かりいただけますか？議論は終了です」

目録作成は即座に始まった。何時間もの間、専門家たちがリストを繰り広げ、各作品を撮影し、すべての木箱に封印を施した。細心かつ無慈悲な行進であった。

作業に立ち会うことを強制された副学芸員は、自分の忍耐強い仕事が煙と消えるのを見た。施される各封印は、彼の夢の棺に打ち込まれる釘のようだった。彼は松方と共に思い描いたすべての展覧会計画、一緒に築くことを望んでいた文化的大学について思った。

昼頃、彼は尊厳の反発に駆られて、最後の絶望的な努力を試みた。

「皆さん、パリにいる松方家の代表者である日置氏に知らせなければなりません。彼は自分が管理している財産の運命を知る権利があります」

「日置氏は今朝早く、我々の部署により通知済みです」と任務責任者は簡潔に答え、相手の純朴さに直面してある種の同情を覚えながら。「彼はもはやこれらの作品にアクセスできません」

実際、バビロン通りの小さなパリのアパートで、日置幸三郎は八時からフランス警察官二人の訪問を受けていた。彼は毎日のように茶を飲んでいるところだった。母国を思い起こし、亡命に立ち向かう力を与えてくれる儀式であった。

日置は古い世代の日本人のあらゆる尊厳を身に帯びており、形式の尊重と自制心の習得において教育を受けていた。しかし人生の仕事の崩壊に直面して、彼は自己統制の綻びを感じた。

彼は今後、保管場所に近づくことを禁じられた。日本人の人物や外国外交官との接触の試みはすべて、疑わしい行為と見なされることになった。

疑わしい。この言葉は奇妙に響いた。彼が、疑わしい？二つの文化の橋渡し役として長年仕えた後に？

日置は自分の使命が終わりに近づいていることを理解した。非常に多くのヨーロッパ滞在で習得し、多くのパリ市民よりもよく習得していたフランス語で、彼はすでに敗北したと分かっている理由のために弁護しようと試みた。

「松方氏は…」

「日置氏」と二人の警察官のうち年長者が遮った。「我々は上司の命令を適用しているだけです。下された決定の妥当性を判断するために来ているものではありません。申し訳ありません。あなたの個人的な状況は、後日関係部署により検討されるでしょう」

謎めいた文章が彼の血を凍らせた。彼は好ましくない外国人と見なされていることを理解した。潜在的に危険でさえ。この屈辱は、パリの芸術界で享受してきた尊敬と対照をなすだけに、なおさら苦々しいものであった。

同日の午後、作品はルーヴル美術館や様々な美術館の貯蔵庫への移送を開始された。憲兵の護衛付きの軍用トラックが、貴重な積み荷と共にひそかにパリを走り回った。

作戦は一切の宣伝の対象とならなかった。困った質問を避ける方が良かった。いずれにせよジャーナリストには他にやることもあり、パリ解放がまだすべての精神を魅了していた。

ルーヴル美術館で、ジャック・ジョジャールは最初の本箱の到着を個人的に監督した。彼は奇妙で相反する感情を抱かずにはいらなかった。

一方では、国立美術館を豊かにする貴重な傑作を前にした学芸員の興奮。モネ、ロダンがあるのだ！他方では、これらの至宝を回収するために用いられた手法に対するくすんだ不快感。ジョジャールは目的が手段を正当化すると自分に言い聞かせようとしたが、良心を黙らせることができなかった。

占領中、彼はナチスから非常に多くの作品を救った。ゲーリングの爪から絵画を奪い取るために、地下室や城に隠す夜が続いた。真夜中に出発するトラック、無言の共謀を覚えていた。そして今は？彼は組織的な略奪の一形態に参加しているのだ。

時代は変わる、と彼は抑えようと努めていた失望と共に自分に言い聞かせた。

「館長…」

彼の副官は、モネの絵画を収めた木箱を慎重に開けた。彼は自分が扱っているものを理解していたが、状況の曖昧さも同時に感じていた。「……これらの作品をどのように目録に記載すべきでしょうか？」この質問は重大であった。それは作戦全体の将来を左右し、行政の心を占めている実務的な懸念を露わにしていた。「『一九四四年十月五日命令による保全管理下の財産』として目録に記載せよ。当面は最終的な所有権に関する記述は一切行わない。交渉の進展に応じて、後日検討する」「一般公開についてはいかがでしょうか？」副官は焦っているようで、興奮と不安の間で揺れ動いていた。それも当然であった、あのようなモネの作品が収蔵庫にあるのだから……「公開は一切行わない。作品は新たな指示があるまで収蔵庫に保管する」ジョージャーはため息をついた。彼は、千もの疑問を抱くことなく好きなものを展示できた時代を思い出していた。失われた無邪気さの祝福された時代を。「いかなる異議申し立ての余地も与えてはならない。絶対的な慎重さが必要だ」

その間、ケ・ドルセイでは、官僚たちが日本との将来の平和交渉で使用される論拠を準備していた。作成中の書類には、日独同盟によってフランスが被った全ての損害が細心に記録されていた。

インドシナでの経済損失は百二十億フランと評価され、太平洋におけるフランスの利益への損害は五十億フラン、インドシナの軍事的奪回費用は三十億フランとされていた。道徳的・文化的損害については、その算定は不可能であった。賠償の総額は最低でも二百億フランを超え、これはコレクションの推定価値を大幅に上回っていた。

松方のコレクションは真珠湾攻撃とヒトラーとの同盟の代償を支払うことになるのであった。たとえその所有者がそ

れとは無関係であったとしても。たとえ彼が計算ではなく芸術への愛によって収集していたとしても。

行政の会計論理は心理的な機微に煩わされることはなかった。そして、誰が帳簿を検証するというのであろうか？

十月八日の夕方、ドゴールは作戦の経過に関する詳細な報告書を受け取った。すべては特筆すべき事件もなく進行していた。すべてがフランスの美術館で安全に保管され、元日本人警備員は監視下に置かれ、ケ・ドルセイにはまだ抗議は届いていなかった。

将軍は文書に目を通した。彼の頭には別のことがあった。アメリカ人たち、共産主義者たち……「完璧だ。次の段階を準備しなければならない。この一時的な管理を最終的な取得に転換する。可能な限り合法的に、もちろんだ」

パリの小さなアパートで、日置幸三郎は電話で完全な押収のニュースを知った。匿名の声が、丁寧だが断固として、松方氏の財産は今や「フランス国家によって保護されている」と説明した。

日置は抑えた怒りを感じていた。権威への敬意の中で教育された彼には、公然たる抵抗を考えることはできなかった。

。

その夜、彼は東京宛の電報を作成した：「コレクション全体フランス当局により押収 十月五日政府命令による 状況絶望的 至急指示求む 日置」

彼は三回読み返した。それから四回。それぞれの言葉が喉を引き裂くようであった。従来の句読点の代わりに使われる各「ストップ」は、彼の人生の業績への葬送の鐘のように響いた。

返答が来ることは決してなかった。

日本？ 打ち碎かれ、破滅していた。国全体が国民を養うのに苦勞している時に、海外での私的利益を守ることは不可能であった。松方コレクションはフランス行政の迷宮の中に消え去った。

この崩壊する世界の多くの物事と同じように。

日置も、フランス側の当事者たちでさえも推測していなかったのは、彼らが爆発的な先例を作り出したということであった。初めて、民主国家が戦争を口実として自国の法律を使って私的コレクションを奪取したのである。

松方事件が誕生した。それには将来が待ち受けていた。

三か月後、一九四五年一月。寒さが身を刺した。ジョジャールはルーヴルの収蔵庫に降りて行き、作品の觀照の中に自らの疑問に対する慰めを求めた。

注意深く換氣された石造りの地下室には、今や松方の傑作群が積み重ねられていた。整理され、ラベルが貼られ、目録に記載されて。まるで常にそこにあったかのように。しかしジョジャールは、もう二度と以前のようににはならないことをよく知っていた。

ジョジャールは『アルルの寢室』の前で立ち止まった。ファン・ゴッホ。キャンバスは人工照明の下で息づいており、金の額縁の中でほとんど生きているようであった。それはいつか、ずっと後になってオルセー美術館に収まることになる。何百万人もの訪問者がそれを賞賛するであろう。そのうち何人がその疑わしい出自を知るであろうか？

数週間後、憤激の手紙が雨あられと降り注ぐことになった。日本の美術専門家たち。収集家たち。数名のフランス人も。皆が偽装された盗みだと叫ぶであろう。

「時代が判断するであろう」と彼は半ば納得しない宿命論で自分に言い聞かせた。

マティニョンでは、ドゴールが他の命令に署名していた、精神は新たな挑戦に向けられて。

ペンが紙を引っかいた。国の復興が義務である。最も議論の余地があるものでさえ、あらゆる手段が良いものであった。彼はずっと以前から、国家の偉大さはその良心の咎めによってではなく、行動する能力によって測られることを学んでいた。

良心の咎め？ それは平和な時代のためのものだ。まだそこには至っていない、全く至っていないのだ。トレスは、他の書類を準備していた。他の敵性財産の「正規化」を。食べることで食欲が湧くと言われている。そして戦後のフランスは、自らを立ち上がらせるのに役立つあらゆるものに飢えていた。

一九四四年末、フランスには良心の呵責よりも他の優先事項があった。

東京では、首都の燻る廃墟の中で、松方コレクションのことを考える者はもういなかった。

パリで失われた数枚の絵画を嘆くよりも、国にははるかに緊急な他の関心事があった。まず生き延びること。食べること。再建すること。

このようにして三百五十点の傑作が所有者を変えた。音もなく、暴力もなく。ただ共和国の法の静かな力によって。

第3章：包囲網は狭まる

パリ、一九四四年十一月

解放の陶醉感。再建すべきものすべてに対する鈍い不安。パリは傷を可能な限り癒そうとしていた。腹を裂かれた建物群はまだ目に痛かった。板切れが割れたショーウィンドウを塞いでいた。食料品店の前では、行列が延びていた。

リヴォリ街、国有財産管理局の事務所では、活気に満ちていた。数ヶ月前まで、ヴィシー政権の協力者たちがユダヤ人の財産略奪を組織的に行っていたのと同じ事務所だった。新共和国、新たな主人たち。

ベルナール・ドリヴァルは、ジャン・カスーの指揮下、副学芸員を務める国立近代美術館の倉庫に到着したばかりの最初の本箱を調べていた。彼は芸術への愛を失うことなく戦争を乗り越え、同時に文化に対する愛国的な視点を採用した知識人たちを体現していた。

学者としての外見の下に隠れていたのは、戦争が明らかにした厳しさだった。状況が要求する時には弁解の余地のないことを正当化することを学んでいたが、芸術の至上の利益についての論理によって良心を保っていた。

彼の向かいで、ピエール・ジャコメが作業を監督していた。国有財産管理局長は全ての規則を知っていた。高等師範学校出身で、彼は自分の管理機構の仕組みを熟知していた。

。

「ドリヴァル氏…」

ジャコメは並んだ本箱に向かって身振りを示した。金属製の棚がある広大な在庫管理室は、倉庫の大聖堂のような雰囲気醸し出していた。彼は本箱の間を歩き回り、貪欲な

目で、作業の効率的な管理によって得られるであろう評価を味わっていた。

「我々の専門家たちは様々なものを見てきました、信じてください。しかし今回、彼らは『文字通り驚異的』な品質について話しています」

「ご存知のように、この戦争の年月の間、我々は国家コレクションが危険なほど貧弱になるのを見てきました。爆撃が残りをつぶ壊しました。結果として、アメリカやイギリスの大きな施設に対して、我々は見劣りしています」

ドリヴァルは興奮を隠さなかった。内心では、作品の美しさの前では取得の経緯など重要ではないとささやく声があった。

「館長…」

彼は言葉を切り、言葉を探した。

「近代美術における我々の重大な欠陥を考えると、この取得は摂理的ですよ…」

彼は一つの本箱に近づき、ほとんど宗教的な畏敬の念を込めて手を置いた。まるで芸術との交感によって自分を赦免しようとしているかのようだった。

「少し想像してみてください。ついに、我々の美術館が世界最大の機関と競争できるようになるのです！」

「取得とおっしゃいますが」とジャコメが慎重に口を挟んだ。「公式には、これは保全的な差し押さえであることを思い出しましょう。これらの作品はまだフランス国家に属していません。用語には慎重になりましょう」

ドリヴァルは会心の笑みを浮かべた。

「確かに、形式的にはあなたが正しいです。しかし我々の間では…」

彼は声を落とし、共謀するように言った。彼らの事業の不正について言及する時、罪深い快感の戦慄が彼を走った。

「ド・ゴールがこのような機会を逃すとお思いですか？これらの作品は我々の国家コレクションを豊かにするでしょう、賭けてもいいです。時間の問題です」

ジャコメは小さくうなずいて同意した。彼は最も大きな木箱の一つに近づいた。外科医のような手つきで、封印を破った。極度の注意。何層もの保護布。

「見てみましょう…」

彼は無限の繊細さで包装を解いた。

作品が現れた時、彼らは口をあぐりと開けたままだった。ファン・ゴッホの『アルルの寝室』。画布はオランダの巨匠に特有の色彩の強烈さで輝いていた。ベッドと壁の深遠な青が椅子と床の黄色と美しく調和していた。

ドリヴァルの声は震えていた。

「これは私が複製を研究して想像できたものよりもさらに…さらに印象的です。枕の上の厚塗りをご覧ください！腹の奥まで捉えるこの強烈さ！そして構成は…見かけ上は単純ですが、前代未聞の洗練です。このレベルのファン・ゴッホがフランスのコレクションに！我々の国際的威信にとってこれが何を意味するかお分かりでしょうか？」

「そして、この作品一点だけで、市場ではいくらの価値があるでしょうか？」

ドリヴァルは両手を空に上げた。

「このような作品は通常の市場では売られません、受け継がれるものです。これは人類の遺産です。もしオークションにかけられることがあれば-それは冒涇でしょうが-想像できる全てを上回るでしょう」

「これこそが公に持つべき論調です。これらの作品は俗悪な戦利品ではありません。フランスが保護し、全世界に知らしめる道徳的義務を持つ文化遺産です」

調査は続いた。次々と発見があった。松方が情熱的な収集の年月をかけて忍耐強く蓄積した宝物が明らかになっていった。

「見てください！」

ドリヴァルは開梱されたばかりの画布を眺めた。

「セザンヌの『サント・ヴィクトワール山』。この幾何学的な線、プロヴァンスの光の分析…そしてこのゴーギャン、『タヒチの女たち』、エキゾチックなメロディーのように歌うオークルと朱色で…」

シリーズ最後の木箱を開めた後、ジャコメはより機密的な口調を取り戻した。

「ドリヴァル、上層部では我々の…手続きの仕方について少し心配していることをお知らせしなければなりません」

「どのような心配ですか？」

ジャコメは本能的に声を落とした。まるで好奇心旺盛な耳を恐れているかのようなだった。彼は秘密と陰謀を好み、職務の単調さに対する償いを見出していた。

「さて、ケ・ドルセイでは、我々の…占有が引き起こしかねない反応を恐れています。フランスの伝統に反する偽装された略奪の形だと我々を非難する声が上がっています」

「どのような声ですか？」

ドリヴァルの口調が厳しくなった。彼は部屋を歩き回り始め、怒りの下に隠そうと努めている神経質さを裏切っていた。

「職業外交官、細かい法律家たち、芸術界と関係のある知識人たち…今のところ非常に組織的ではありませんが、拡大する可能性があります」

ドリヴァルは身を正した。

「待ってください、待ってください！我々は太平洋全体で攻撃的な拡張政策を行い、地域の西洋文明の全体的部分を破壊した国について話しているのです。そして今、彼らの財産で我々が補償を受けることを非難されるというのですか？」

彼は激昂し、疑念から自分を解放するエネルギーを憤慨から汲み取った。

「しかし結局、これは正当な補償です！」

「根本的にはあなたに完全に同意します」とジャコメがなだめた。「しかし、特にアングロサクソンの世論が、現実を覆い隠す感情的な議論に敏感になり得ることをご存知でしょう」

「どのような感情的議論ですか？」

ドリヴァルの声に苛立ちが透けて見えた。

ジャコメは革の鞆から大量の書類の束を取り出した。彼は情報を握っている瞬間、出来事に対する自分の影響力を測ることができる瞬間を好んでいた。

「我々のサービスは、ここ数週間で赤十字を通じて送られた松方家からの複数の書簡を受け取りました。そして返還を…雄弁に訴える日本の芸術界の著名人からの手紙も」

彼はフランス語の手書きの手紙を広げた。

「彼らは、松方幸次郎が偉大な芸術愛好家、無私の後援者であり、彼のコレクションを純粋に文化的で博愛的な目的で構成していたという事実を前面に出しています」

「それで？」

ドリヴァルは急に彼の言葉を遮った。

「これらの善意が何かを変えるというのでしょうか？」

「それで」とジャコメは辛抱強く続けた。「これらの人道的・文化的論拠は好意的な反響を見つける可能性があります。我々の芸術家、美術批評家、作家たちはそのような誘惑に敏感です。彼らは我々の行動に芸術的財産の神聖な権利に対する侵害を見るかもしれません」

「具体的な例はありますか？」

「まだ公にはありませんが、複数のパリのサロンでの心配な会話が報告されています。ルネ・ジンペルやジャン・コクトーのような人物が留保を表明したとされています」

この情報はドリヴァルを動揺させた。ジンペルとコクトー…ただ者ではない。彼は自分の確信が揺らぐのを感じた。

「その場合、先手を打つ必要があります。事件に関するコミュニケーションをコントロールするのです」

彼らの会話は、フランソワ・マティの慎重な到着によって中断された。外務省の外交官は注意深くドアを押し開けた。彼は少し神経質な様子で、権力の回廊を騒がせている緊張を裏切っていた。

「皆さん…」

彼は続けるよう招かれるまで待った。

「松方事件に直接的な影響を持つ日本との平和交渉に関する最新の進展をお知らせしに来ました」

「どのような新しいことが？」

ジャコメは疲れた身振りで彼に椅子を示した。長い一日で、責任が彼の肩に重くのしかかっていた。

マテイは腰を下ろし、いくつかの封印された封筒を取り出した。

「アメリカ人は既に降伏の準備をしています。彼らは比較的短期間で、敗北した日本の運命を決める一般平和会議を組織したいと望んでいます。会議は今後数年以内に開催される予定で、おそらくサンフランシスコかワシントンで。戦争賠償の重要な問題に必ず触れるでしょう」

ドリヴァルは身を乗り出し、目が輝いた。

「これらの賠償に関するフランスの公式な立場は何ですか？」

「それがまさに私の訪問の主要な目的です」

マテイは神秘的な口調を取った。

「外務大臣は、我々が請求の完全なリストを迅速に作成することを望んでいます。松方コレクションはこの全体的枠組みの中に位置づけられます」

「その組み込みをどのように正当化することを考えていますか？」

「我々は、日本の侵略とその同盟国が我々の利益に対して行った行動によってフランスとその国民が被った甚大な損害に対する現物賠償として、コレクションを提示するつもりです。ケ・ドルセーの専門家たちがこれらの損害を計算中です。彼らは巨大な金額に達しています」

「大まかな規模を教えてくださいませんか？」

「まだ暫定的な最初の見積もりは、主に太平洋に定住した我々の国民が被った破壊、我々の沈没した船舶、我々の破壊された商業施設に関するものです…」

マテイは頭の中で小さな計算をした。

「コレクションは被った実際の損害と比較して非常にささやかな補償を表しています」

ドリヴァルは文字通り歓喜し、自分自身の合理化の確認を見出していた。

「ご覧ください！これは恣意的な略奪や不当な占有ではなく、公正な賠償なのです。作品は戦争損害の名目で我々に完全な権利で帰属するのです！」

マテイは経験豊富な外交官の慎重さで熱意を和らげた。彼は状況の逆転をあまりにも多く見てきて興奮することはなく、彼の不信は失望からしばしば彼を守ってきた。

「それでも注意してください、まだ何も確定していません。我々の同盟国、特にアメリカ人と強硬に交渉する必要があるでしょう。彼らは賠償に利用可能な日本の財産の配分について独自の見解を持っている可能性があります」

「どういう意味ですか？」

ジャコメの声に不安の調子が透けた。

「アメリカ人は太平洋全体を自分たちの排他的影響圏と考える傾向があるという意味です。したがって、彼らの利益に比べて我々の利益は二次的だったと考えて、地域での実質的な賠償に対する我々の権利に異議を唱える可能性があります」

「異議に対抗する我々の選択肢は？」

「我々は非常に堅固な論証を準備しました」

マテイは自信を取り戻した。

「まず、太平洋の様々な地域における我々の古い権利と経済投資を前面に押し出すべきです。次に、戦争における我々の人的・物的犠牲を強調する必要があります。我々の倒

れた兵士、虐殺されたり強制送還されたりした我々の民間人、我々の破壊された施設、我々の壊滅した商業」

「文化的な面では？」

ドリヴァルは介入せずにはいらなかった。彼の専門分野は彼に輝き、自分の立場を正当化する場を提供してくれた。

「文化的な面では、コレクションを芸術的遺産の傑出した要素として提示することです。フランスは、その長い伝統と世界的に有名な美術館により、保存し、研究し、価値を高めるのに特に資格があります」

ジャコメは満足そうに見えた。

「論証はよく構築されているようです」

マティは身を乗り出し、陰謀家のように、自分の暴露の効果を味わった。

「さらに良いことがあります。コレクションが本質的にフランスまたはヨーロッパの芸術家の作品で構成されているという事実を主張しなければなりません、ある意味で故郷に戻るのです。ファン・ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌ、ロダン…これらすべての芸術家はヨーロッパで生まれ、生活し、創作しました。彼らの作品は日本よりもヨーロッパの美術館、特にフランスの美術館にある方がふさわしいのです」

この発言はドリヴァルを電撃のように打ち、彼が求めていた最終的な赦免を見出した。

「これは決定的な論拠です！作品はある意味で故郷に戻るのです。我々は異常を修正しているだけなのです」

議論は続いた。マティは日本の国内情勢に関する最新情報を説明した。「この国は完全に破綻しており、政府にはも

はや何の余地もない」「そして日本の世論は？」「日本の世論は主に日々の生存に関心を寄せている。飢餓の脅威があり、都市は破壊され、経済は壊滅している。ヨーロッパ芸術のコレクションは彼らの当面の優先事項にはない」「そして日本の知識人は？芸術界は？」ドリヴァルは執拗に尋ね、彼らの企てへのあらゆる障害を取り除こうとした。「彼らは爆撃で死ぬか、完全に混乱している。戦前の日本は戦争によって一掃された。再建には何年もかかるだろう」

十一月の夜がパリに降りた午後七時頃、三人の男たちはついに長い協議を終えた。彼らは保全的差押えを恒久的取得に変える全体戦略の基盤を築いていた。この戦略は、一見反駁できない論拠に支えられていたため、なお一層恐るべきものだった。

「諸君…」ジャコメは立ち上がり、満足げな様子で、よくやり遂げた仕事の満足感を味わっていた。「…我々には必要な要素がすべて揃っていると思う。マテイ、君には外務省との行動を緊密に調整してもらいたい。ドリヴァル、目録作成を続け、これらの作品を我々の国家コレクションに統合する準備をしてくれ」

ジャコメは重々しい口調を取った。この瞬間の重要性を自覚していた。「この件は我々の立場が不動になるまで、決して報道機関に漏れてはならない。日本との平和条約が署名されれば、自由に発表できる」

それに続く数週間で、フランスの報道機関は我々の国立博物館の貯蔵庫を豊かにする「日本のコレクション」について言及し始めた。世論は、これらの作品が今やフランス文化遺産に属するという考えに準備された。

慎重に書かれた記事が専門雑誌に掲載された。それらはフランスがこれらの傑作を迎え入れ、価値を高める運命にあると説明していた。権威ある記者たちは、これらの作品は日本よりもフランスの博物館でより良く保存され、より良く研究されるだろうと叫んだ。

東京では、大部分が廃墟となった都市で、重篤な病気を患った松方幸次郎が、フランス情勢の展開を募る不安とともに見守っていた。

アメリカの爆撃から奇跡的に免れた鎌倉の自宅で、この家長は日本に残した数少ない作品を見つめていた。生涯の芸術への情熱の証人であるこれらの絵画と彫刻は、彼が被ろうとしている損失の広がりをも痛切に思い起こさせた。

「四十年間のコレクション…」 献身的に彼を看病する娘の花にそう呟いた。声は少し震えていた。「…四十年間のヨーロッパ旅行、芸術家たちとの出会い、商人との交渉…すべては文明を自称する国家に私の作品を没収されるためだったのか…」

父の芸術への情熱を分かち合っていた花は、彼を慰めようとした。しかし彼女も半信半疑だった。心の奥底で、彼女は既に知っていた。

「お父さん、おそらくこれは一時的なものです。平和が戻り、関係が正常化すれば、フランスは過ちを認めて、あなたのコレクションを返還するでしょう…」

老人は悲しそうに頭を振った。彼は常に現実的だった。あまりに現実的だった。「いや、娘よ。私は国家の仕組みをよく知っている。彼らが何か貴重なものを手にすると、もう手放さない。私の作品は我々の家族にとって永遠に失われた」

愛情をもって取得された彼の作品は、それらを彼の家族遺産から消失させる容赦ない駒となった。

さらに深刻なことに、この事件は芸術作品の国際法において重要な先例を作った。近代において初めて、民主国家が、戦争賠償という名目で私的コレクションを取得するために、法律のあらゆる洗練された手法を使用したのである。

この先例は範例となり、他の多くの略奪に影響を与えた。それぞれが同じ立派な論拠で飾られた：正義、優越的文化的利益、芸術的源流への回帰。

外務省では、この微妙な案件を管理するため、経験豊富な外交官が率いる特別部門が設立されていた。その目的は明確だった。事実上の取得を公式の勝利に変えることである。

「外交の技術とは…」と部門長は部下たちに説明した。「…我々の国家利益を国際法の外観で装うことにある。我々は奪うのではなく、回収する。没収するのではなく、修復する。略奪するのではなく、西洋芸術をその母国に返還するのだ」

美しい表現だった。彼はそれを誇りに思い、盗みを正義の行為に変える意味論的な巧みさを味わっていた。

そのような修辞法は、すぐに関係するすべてのフランス側関係者によって採用された。公報で、許可された報道記事で、同じ語彙が絶えず繰り返された：「返還」、「賠償」、「正当な回帰」、「正義」。

最も注目すべきは、この専門用語が関係するすべての環境で確立された容易さだった。博物館の学芸員は作品の「本国送還」について語った。法学者は状況の「正規化」に言及した。外交官は文化関係の「正常化」について述べた。

もはや誰も「没収」という言葉を口にしなくなった。それはタブーとなった。

この意味論的变化は偶然ではなかった。それは細部まで考え抜かれたコミュニケーション計画の結果だった。明確な指示が伝達されていた。強制取得を連想させるあらゆる語彙を禁止し、中立的な用語を優先し、作戦の文化的・教育的側面を強調する。

数カ月のうちに、松方事件はフランスの世論においてサクセスストーリーとなった。フランスはその利益を守りながら芸術遺産を豊かにすることに成功した。潜在的な批判は賞賛の合唱の中に溺れた。

パリの知識人界の一部の機嫌の悪い精神だけが疑念を表し続けていた。しかし彼らの声は公式言説によって容易に封じられた。特にほとんどのフランス人がこの事件の詳細について何も知らなかったからである。

当初は消極的だったルネ・ジンペル自身も、最終的に政府の立場に同調した。社会的圧力と彼自身の世俗的野心が彼の躊躇に打ち勝った：「これらの作品はフランスにおいて真の精神的祖国を取り戻す。芸術に国籍はないが、選ばれた土地がある」

公開講演での彼の宣言は感動を呼んだ。最後の抵抗が次々と崩れ落ちた。

ルーヴルに展示されるファン・ゴッホの傑作を見るという考えに魅了されたジャン・コクトーは、当初の異議を撤回した。これまでアクセスできなかった作品を間近で研究する見通しに誘惑された美術評論家たちは、熱烈な支持者に変貌した。

ファン・ゴッホの誘惑。最も繊細な良心にとってさえも抗いがたいものだった。

一九四四年十二月末、作戦は国内面で完了した。すべての作品が目録化され、保管され、行政的に国家コレクションに統合された。もはやフランス人の声は取得に異議を唱えなかった。

国際面での勝利を固めることが残っていた。これが最も困難な挑戦だった。連合国にフランスの立場の正当性を説得する必要があったからである。

ワシントンとの最初の非公式接触は心強いものだった。敵対行為の終結とアジアの復興準備に忙しいアメリカ人は、この問題に割く時間がほとんどなかった。彼らはフランスが日本人収集家によって取得されたフランス人芸術家の作品を回収することに大きな異議を見なかった。

偏向していたとはいえ、事実の説明には明快さという利点があった。ファン・ゴッホはヨーロッパ人で、ゴーガンとロダンはフランス人だった…彼らの作品が日本よりもヨーロッパで保存される方が論理的だった。

私有財産問題に伝統的に関心を寄せるイギリス人は、より慎重な態度を示した。

しかし彼らの異議は内容よりも形式に関するものだった。彼らはフランスの手続きが外観を厳密に尊重することを望んでいた。

「問題ない…」とフランスの外交官たちは自信をもって答えた。「我々は戦争賠償権の厳格な枠組み内で行動する。すべて適正になる」

この確信はロンドンを安心させるのに十分だった。特にイギリス人自身も自国領土内のドイツの財産に対して同様の作戦を実行していたからである。

一九四五年初頭、フランスの立場はすべての戦線で固められた。国内では全会一致が得られ、連合国は決定的な異議

を示さなかった。日本だけが抗議できたが、日本はもはや独立した主体として存在しなかった。

松方事件は終わったのだろうか？決してそうではない。それは最も長い段階、すなわち事後の正当化と現実との妥協の段階に入ったにすぎない。

いつの日か、フランス共和国がいかにして、そしてなぜ日本人として生まれたという以外に犯罪を犯していない私人の財産を取得したかを世界に説明しなければならないからである。

しかし今のところ、ヨーロッパがその存在で最も破壊的な戦争からゆっくりと立ち直りつつある時、道徳的考慮はほとんど重要ではなかった。肝心なことは達成されていた。フランスは世界で最も美しい近代美術コレクションの一つを所有していた。

そのコレクションが日本人の庇護者によって構成され、完全に善意で取得され、力によって没収されたということは、すべて今や過去に属していた。歴史は、いつものように、勝者によって書かれる。

そして勝者とは、この場合、博物館を傑作で豊かにする保存管理者たち、国家利益を守ることに成功したフランスの外交官たち、軍事的敗北を文化的復讐に変えることに成功したフランスの指導者たちだった。

敗者だけが、鎌倉の家で病気の老貴族とその嘆き悲しむ家族が、この「略奪」の真の人的コストを測っていた。

パリのサロンでは、将来の展覧会について貪欲に語り始めていた。「お分かりになりますか？ルーヴルにファン・ゴッホが！」

社交界の人々は手を擦り合わせていた。美術評論家たちは賛美的記事を準備していた。美術学生たちはこれらの神話的作品を間近で研究できることを想像していた。

誰もそれらがどこから来たのかを疑問に思わなかった。あるいはむしろ、あまりその問題を考えたくなかった。

ドリヴァル自身は近代美術館の展示室の再編成を始めていた。彼は絵画の配置、ファン・ゴッホの色彩を際立たせる理想的な照明、ロダンの彫刻の理想的な場所を想像していた。それは実現する彼の保存管理者としての夢だった。

彼はもはや出所について疑問を持たなかった。あるいはごく短時間、他のことに移る前に。

ジャコメは一方で最後の詳細を練り上げていた。各作品は分類され、目録化され、国家目録に統合されなければならなかった。

マテイはパリと連合国の首都間の往復を続けていた。圧力を維持し、誰もフランスの既得権益に疑問を投げかけないことを確実にする必要があった。

日本では、松方は日一日と衰弱していった。フランスから届く知らせが彼の絶望を完成させた。

娘の花は希望を持ち続けようとした。彼女はフランス当局に手紙を次々と書き、父の大義を弁護し、彼の善意、西洋芸術への真摯な愛を思い起こさせた。しかし彼女の手紙はフランス行政の迷路の中で迷子になった。目的地に着いても、後回しに分類された。時には読まれることすらなかった。日本人の感情に割く時間が十分でなかった。

歯車は動き始めた。もはや何もそれを止めることはできなかった。

数カ月後、長くても数年後には、松方コレクションはフランスのものとなるだろう。美術専門家たちは戦後に「取得された」これらの作品について論文を書くだろう。観光ガイドはフランス国家遺産の素晴らしさを賞賛するだろう。学童たちはフランスが世界で最も美しい印象派コレクションの一つを所有していることを学ぶだろう。

そして誰も、芸術を愛するあまり財産を収集に捧げるという狂気を持ったあの日本人をもはや思い出さないだろう。

時代は松方幸次郎を消し去ろうとしていた。永遠にフランスのものとなった彼の作品だけが残るだろう。

あるいはほぼ永遠に。

第4章：秘密交渉

サンフランシスコ、1951年夏

一九五一年夏、サンフランシスコのフェアモント・ホテルは活気に満ちていた。ノブヒルの丘の上に聳え立つこの宮殿のようなホテルには、太平洋戦争を終結させる平和条約を交渉するために五十一カ国の代表団が数週間にわたって滞在していた。少なくとも表向きには。

和解についての美しい演説と儀礼的な華やかさの陰で、誰もが分け前を狙っていた。広島と長崎から六年後、日本帝国の戦利品を分配しなければならなかった。食欲は獐猛だったが、誰もそれを大声で言う勇氣はなかった。

五階のローレル・サロンでは、窓から湾とアルカトラズ島の素晴らしい景色が望めた。四人の男性が長いテーブルを囲んで座っていた。彼らの会談の争点は何か？「戦争賠償に関する諸問題」である。現実はより生々しかった：世界中に散らばった日本の財産を誰が回収するかを決定する将来の条約の第十四条を最終決定することであった。

モーリス・シューマンは戦後フランスの野心を象徴していた。外務大臣であり、元レジスタンス闘士でもあった彼は、すべてを見てきた世代に属し、フランスがその地位を取り戻すことを強く望んでいた。彼の書類は手書きの注釈で覆われていた。屈辱を受けた国の傷を背負い、外交官としての上品さの陰には復讐への渴望が隠されていた。彼は一九四〇年の敗北の影の中で生きてきており、あらゆる交渉が汚れた名誉を回復する機会を提供していた。彼の礼儀正しさは、妥協が往々にして人命の代償を払うレジスタンスで鍛えられた不屈の決意を隠しきれなかった。

彼の向かいで、ジョン・フォスター・ダレスは心配していた。トルーマン大統領の特別代表であり、アイゼンハワーの将来の右腕である彼は、このサロンで下される決定が極めて重要であることを知っていた。法律家として、国際法の微妙な点を熟知していた。彼にとって、道徳的基準は政治的必要性に譲らなければならなかった。ワシントンの廊下で、国家の問題に感傷が入り込む余地はないことを学んでいた。しかし、彼の無表情さは、アジアにおける共産主義の台頭に対する暗い不安を隠していた。

彼の右に座るオリバー・フランクス卿は、外務省の評判を作っている愛想の良さでイギリスの利益を守っていた。シティとホワイトホール双方の出身である彼は、商業と地政学の間を器用に行き来していた。イギリス人はソビエトに対する将来の同盟国である日本を懐柔したがっていたが、同時にアジアでの経済的地位を守りたがっていた。フランクスは相反するものを調和させるイギリスの技術を体現していた。彼の服装の優雅さと完璧な作法は、ロンドンの金融界での年月によって培われた厳しさを隠していた。大英帝国が崩れつつあることを知っており、あらゆる交渉がロンドンの影響力を維持するための後衛戦であった。

三人の西側諸国代表の前で、吉田茂は諦めた敗者の姿を呈していた。日本の総理大臣は占領下の国の重荷を威厳をもって背負っていた。元大使として、彼はゲームのルールを知っていた。しかし彼の行動の余地はほぼ皆無に等しかった。アメリカの後見下にある日本は交渉できる立場になかった。吉田は礼儀正しい態度の下に真の苦悩を隠していた。古い学派の外交官である彼は、交渉の美德を常に信じていた。今、彼は自分の過ちではない罪の代償を支払い、軍国主義指導者たちが平和的偉大さへの彼のすべての希望を破壊した国を守らなければならなかった。

誰もが、空虚な決まり文句を超えて、数千の日本の財産を分配していることを知っていた。とりわけ、七年間パリを悩ませ続けていた松方コレクションを。

ダレスが沈黙を破った。彼の声には疲労が表れていた。何週間にもわたる反復的な交渉が彼の忍耐を使い果たしていた。

「シューマン氏、正直に申し上げて、日本の私有財産に関するあなた方の立場は我々にいくつかの困難をもたらしています。トルーマン政権は日本を共産主義者に対する信頼できる同盟国にしたいと考えています。あまりに厳しいアプローチは日本の世論に恨みを生む危険があります。それは逆効果でしょう」

シューマンは真の意図を何も漏らさない微笑みで答えた。彼は自分の考えを隠すことを学んでいた。

「ダレス氏、和解の高揚の中で時として忘れられがちないくつかの事実を思い出していただきたいと思います。フランスはインドシナにおける日本の侵略により、物的・人的に甚大な被害を被りました。ナチス・ドイツとの日本の共謀は言うまでもありません。我々の請求は国際法を尊重しており、それは一九一八年以降にアメリカ合衆国が策定に貢献したその国際法なのです」

フランス大臣は本心を口にしなかった。心の奥底で、彼はフランスが強く出るか、二流国家に甘んじるかしかないと知っていた。一九四〇年の屈辱はまだ彼を苛んでおり、かつての敵国から勝ち取った譲歩の一つ一つが過去に対するささやかな復讐となっていた。

彼は目の前で「機密 - インドシナの被害」という表示の付いた厚紙のファイルを開いた。

「我が国の部局は被害を二百億フラン以上と算定しました。インフラの破壊、生産の損失、フランス人民間人の虐殺…リストは長いのです。我々の領土にある日本の財産の形で、これらの金額の一部を回収するのは当然です」

オリバー卿はいかにもイギリス的な区別をもって介入した。しかし彼の発言は見かけほど無邪気ではなかった。

「我々は皆、日本をアジアにおけるソビエトの拡張主義に対する防波堤にしたいと考えています。それは我々の側のある程度の…寛大さを意味します」

フランクスは一語一語を慎重に選んでいた。親しみやすい外見の陰では鈍い欲求不満が煮えたぎっていた。大英帝国は崩壊しつつあり、意志を押し付けるアメリカ人と協調しなければならなかった。ヴィクトリア朝帝国の偉大さを知っていた彼は、その衰退を無力に見守っていた。あらゆる交渉が、ロンドンではもはやワシントンの下位のパートナーに過ぎないことを思い起こさせた。

彼は吉田に向き直った。

「ところで、総理大臣、私有財産の問題に関するあなたの立場をお聞かせ願いたい」

吉田は一語一語を慎重に計りながら議論を聞いていた。占領国指導者の極度の慎重さをもって発言した。彼の声にはすべての幻滅の重みが込められていた。彼は西洋文明とその正義とフェアプレーの価値を信じることに生涯を費やしていた。戦争は彼の錯覚を打ち砕き、民主主義国家も自らの利益が危険にさらされれば権威主義体制と同じく無慈悲になりうることを明らかにした。

「皆さん、日本政府は戦争賠償に関するあなた方の請求の正当性を理解しています。我々は一九三七年から一九四五

年にかけて我が国の侵略政策によって引き起こした損害に対する責任を負う用意があります」

彼は勝利者の意志に異議を唱えるように見えることなく、異論を表明しようとしていた。節制を説いてきた彼が、徳に身を包んだ男たちによる自国の解体を目撃していた。

「しかし、公的賠償の名目で合法的に没収される可能性のある日本の国有財産と、西洋法の伝統に従って異なる地位にある我が国民の私有財産との間には区別が設けられるべきです」

敬意をもって表現されたこの発言は、エティエンヌ・ヴァッスールを激昂させた。フランス副代表は案件を完全に把握しており、そのために選ばれたのだった。ヴァッスールは最高の地位を望みながら二流の役割に甘んじなければならなかった人物の失望した野心を抱いていた。彼は任務の遂行における過度の熱意でそれを補っていた。

「総理大臣、この区別はあなたがおっしゃるほど明確ではありません。公式には私有とされながら、あなた方の国の戦争努力の資金調達に役立った、あるいは軍事征服から得た利益によって構成された財産が数多く存在します。具体例を挙げましょう：松方幸次郎によって構成された有名な西洋美術コレクションです。これは現在フランス領土にあり、一九四四年から合法的に管財下に置かれています」

吉田は顔をしかめた。彼の声にはもはや隠しきれない苛立ちの調子が感じられた。

「ヴァッスール氏、あなたはすべての日本人の私有財産が疑わしい性格を持ち、我々の戦争努力に貢献したという理由で没収される可能性がある」と示唆されているのですか？」

「いえ、我々は盲目的な没収の論理にはありません」とヴァッスールは誰も騙すことのない偽りの人懐っこさで答えた。「しかし松方コレクションに関しては、それは製鉄・造船企業が日本の戦争努力に大いに貢献した実業家によって構成されました。松方は川崎造船所を経営し、あなた方の戦艦の重要な部分を建造しました。真珠湾攻撃と太平洋戦役に参加したいくつかの戦艦と空母は彼の造船所から出ています。したがって、彼の私的財産、ひいては美術コレクションが軍需産業の利益によって構成されたと見なすのは公正です」

この論法は、ヴァッスールの得意とする詭弁の全貌を明らかにした。彼は概算を確実性に、相関関係を因果関係に変換することに長けていた。

この論法は衝撃を与えた。ダレスは、日本人への同情からというよりも地域バランスを維持する配慮から介入する必要があると判断した。

「ヴァッスール氏、あなたが言及されているコレクションの現在の地位はどのようなものですか？」

ヴァッスールに代わって答えることを望んだシューマンは、この機会のために特別に準備された四ページの覚書を彼に渡した顧問の一人に向き直った。

「ダレス氏、この比類ないコレクションは、敵性財産に関する一九四四年十月五日の政令の適用により、フランス当局によって合法的に管財下に置かれました。それは計り知れない価値を持つ数百点の西洋美術作品で構成されています」

「そしてあなた方は、それが戦争賠償の名目で没収されるべきだと考えているのですか？」とオリバー卿が尋ねた。

「その通りです」とシューマンは確認した。「それはフランスが被った甚大な被害に照らして正当化される賠償を表しています。さらに、これらのフランス人またはヨーロッパ人芸術家の作品がその起源の大陸に留まるのは論理的です」

フランス大臣はあらゆる修辭的才能を展開していた。彼の論拠の陰には確固たる意見が隠されていた。フランスには、戦争と占領によって失ったものを回復する権利、いや義務すらあった。シューマンにとって、倫理的要請は決定的勝利者だけが享受できる贅沢に属していた。

吉田はこれほど慎重な外交官にしては珍しい激しさと抗議した。西洋の廉潔さに対する彼の最後の幻想が今崩れ落ちていた。

「皆さん、いくつかの本質的事実を思い出していただかなければなりません。松方は西洋美術の偉大な愛好家であり、純粹に文化的目的でコレクションを構成した啓発された後援者でした」

日本の総理大臣は、あらゆる法的技巧でそれを飾り立てているにもかかわらず、法に対する力の勝利を目撃していることを悟った。生涯外交の美德を信じてきた彼が、その真の性質を発見していた：思想の討論に偽装された力関係である。

ヴァッスールは、自分が何を考えているかを雄弁に物語る皮肉な表情を浮かべた。

「総理大臣、松方氏の善意は、それがいかに立派なものであろうとも、残念ながら、彼のコレクションが重工業の利益によって構成され、それが後に西洋民主主義国に対するあなた方の軍事機構に大規模に貢献したという客觀的事実を消し去るものではありません」

彼は偽りの同情的表情で吉田に身を乗り出した。ヴァッスールはこの支配の瞬間を味わっていた。生涯にわたって、彼は自分より強力な者の前にかがまなければならなかった。今、ついにこの権威を行使する機会を手にしていた。

「フランスは賠償の名目で自分に帰属するものを回復しているだけです。松方氏に対する個人的な敵意は全くありません」

交渉の真の争点が白日の下にさらされた。会議のバランスを維持することを気にかけるダレスは、議論を軌道修正しようと試みた。アメリカ人は苛立ち始めていた。文化的威信の問題に関するこれらのヨーロッパの争いは、生まれつつある冷戦の挑戦に面して些細なものに思えた。

「皆さん、もっと具体的な角度からこの問題に取り組むことを提案します。真の問題は、条約の第十四条が連合国に自国の領土にあるすべての日本の財産に対する没収権を与えるべきか、それともこれらの財産の性質に応じて区別を設けることが適切かということです」

シューマンは直ちに、自分の特別な立場をより通しやすくするために議論を一般化する機会を捉えた。フランス大臣は個別の事例を一般原則に形作ることを心得ていた。

「ダレス氏、それこそ我々が最初から提案していることです。第十四条は、各連合国が自国の領土管轄下にあるすべての日本の財産を、例外なく制限なく保持する主権的権利を明確に規定しなければなりません」

「しかし、この文言は過度に広範囲に思えます」とオリバー卿が異議を唱えた。「それは理論的には、統制も救済手段もない恣意的な没収を可能にするでしょう」

フランクはそこで誠実な懸念を表明していた。元銀行家である彼は、信頼があらゆる国際経済システムの基盤を構

成することを知っていた。あまりに組織的な没収は不安定化を招く危険があった。しかし彼の声にはまた、より良心的でない同盟国によって二流に追いやられる自国を見る者の幻滅も込められていた。

「いえ」とヴァッスールは反駁した。「なぜなら、これらの没収は各連合国の国内法によって枠組みづけられるからです。したがって、管轄国内裁判所への救済の保証があるでしょう」

吉田はもはや隠そうとしない辛辣さで首を振った。

「ヴァッスール氏、あなたがおっしゃる保証は純粹に理論的であり、したがって幻想的です。実際には、いかなる国内裁判所も、自国政府に対して日本国民に有利な判決を下すことは決してないでしょう」

この発言は一時的にフランス代表団を困惑させた。吉田は提案されたシステムの根本的偽善に指を突きつけたのだった。

シューマンは素早く主導権を取り戻した。

「総理大臣、あなたは状況を大げさに描いています。フランスの裁判所は独立しており、財産権を厳格に尊重しています。しかし、国家の最高利益のために取られた政府の行為の合法性もまた尊重しています」

「つまり」と、吉田は諦観的な明晰さをもって呟いた。「我が国民は最終的に、あなた方の没収決定に対して実効的な救済手段を何ら持たないということになりますな」

「あなたは物事をあまりに否定的に捉えていらっしゃる」とシューマンは反駁した。「これは単に、文明諸国間の関係において何世紀にもわたって存在してきた戦争賠償に関する古典的国際法を適用するということに過ぎません」

フランス大臣は当時の常套句を使っていた。正当化できないものを正当化するために「文明」を援用するのである。シューマン自身も自分の詭弁を見抜いていなかったわけではないが、国家理性が道徳的配慮に優先していた。フランスは手段を選ばず、その地位を回復しなければならなかった。

この示唆に富む議論を注意深く聞いていたダレスは、言葉を選んだ。このアメリカの政治家は、自分が合法化された略奪メカニズムの構築に立ち会っていることを理解していたが、必要性が道徳的良心に勝っていた。

「諸君、双方から提示された論拠を十分に検討した結果、私は各当事者の利益を調和させる合理的な合意を見出すことができると思う」

彼は顧問たちと協議してから続けた。

「第十四条は、連合国諸国に対し戦争賠償の名目で自国領土内にある日本の財産を保持する権利を与えることができるだろうが、この権利はそれぞれの国内法に従って、かつそれぞれの伝統を尊重して行使されるべきであると明記する必要がある」

「この但し書きは問題の本質を何も変えない」と吉田は抗議した。「それどころか、恣意的なままの没収に合法性の外観を与えるという点で、むしろ事態を悪化させるものです」

日本の総理大臣は足元が崩れ去るのを感じていた。彼の世界観のすべてが崩壊していた。西欧の理想を信じていた彼は、それらがこの世的な欲望を覆う表面的な装飾に過ぎないことを発見していた。

「おそらく」とダレスは会合を驚かせる率直さで認めた。

「しかし、それには外観を保ち、最小限の枠組みを維持す

るという利点がある。各連合国は独自の正義観を適用する主権を保持することになる」

このアメリカ人は自らの哲学を余すところなく示していた。形式さえ守られれば信念などどうでもよいのである。

オリバー卿は目に見える安堵とともに同意した。

「この妥協案は合理的でバランスが取れていると思われます。連合国の利益を保持しつつ、純粋な恣意を避ける枠組みを保っています」

シューマンは内心で歓喜していた。彼はサンフランシスコに求めてきたものを正確に手に入れていた。松方コレクションやフランス国内にあるその他すべての日本財産の没収を正当化するための、議論の余地のない国際的根拠を。

「ダレス氏、すべて我々には全く申し分ございません」

吉田は自分が戦いに敗れつつあることを悟った。彼の最後の論拠も西欧諸国の決意を揺るがすことはできなかった。敗戦し占領下にある日本は、もはや海外にある自国民の私有財産を保護する手段を持たなかった。彼を襲った失望は、この会議に抱いていた希望に比例していた。彼は純真にも西欧の良心に訴えることができると信じていた。良心には地理的な限界があることを発見したのである。

続く数日間には最終的な詳細の調整に費やされた。最終テキストについてすべての代表団の正式な合意を得る必要があった。コンマ一つが重要だった。ニュアンス一つで数百万が失われる可能性があった。

一九五一年九月八日、サンフランシスコ市立オペラハウスは偽善の劇場と化した。四十八か国が数百人のジャーナリストの前で厳粛に平和条約に署名した。激しい駆け引きの産物である第十四条第二項第一号は、その最終版において、各連合国が「自国領土内にある日本および日本国民の一

切の財産、権利および利益を押収し、保持し、清算し、またはその他の方法で利用する」権利を有すると規定していた。

賠償に関する条項の中に紛れ込んだ、一見何でもない一文。実際には、それは松方コレクションと世界各地に散らばる数千の日本財産の運命を決定づけるものだった。これらの財産は二度とその所有者の元に戻ることはなく、所有者たちはあらゆる救済手段を奪われることになった。

署名直後、フランスの報道機関は真の悪意に満ちた偽善の祭典を演出した。公的機関は関係者に十分なブリーフィングを行っていた。フィガロ紙は堂々と「フランスが日本の傑作を回収」と見出しを打った。ル・モンド紙は「これらのフランス人芸術家の作品が祖国の土を踏む」と学者風に説明した。リュマニテ紙でさえ「私的コレクションから国立美術館への移管による芸術へのアクセスの民主化」を称賛していた。

真の争点を大きく知らないフランス世論は圧倒的に支持した。誰が旧敵国からフランスが賠償を受ける権利に異議を唱えることができただろうか。最も情報に通じた芸術界の孤立した数名の声が、この大規模な専有の道徳的正当性について遠慮がちに疑問を呈する勇気を見せただけだった。

これほど巧妙に設置された歯車装置が完璧さに達したのである。松方コレクションは相続人にとって失われ、そのすべての狡猾な仕組みを解きほぐすのに何十年もかかるほど巧妙に織られた網にかかってしまった。

さらに深刻なことに、この事件は多くの他の「合法的」略奪にインスピレーションを与える重要な先例を作り出していた。国家が外国財産を専有したいと望むたびに、サンフ

ランシスコ条約と第十四条のフランス的解釈を援用することができるのである。

続く数か月間、この判例はあらゆる場所で援用された。イギリス人はマレーシアのドイツ人プランテーションを没収するためにこれを利用した。オーストラリア人は南太平洋の日本財産を専有するためにこれを使った。南米の一部の国々さえも、外国企業を国有化するためにこれを援用した。

松方事件は、ほぼ偶然に新しい概念、「文化的賠償」を創出していた。後からフランスの法学者たちによって構築された理論によれば、侵略の被害国は財政的補償としてだけでなく、「国家文化遺産の充実」のためにも侵略国の文化財産を専有することができるとされた。

複数の博士論文で体系化された学説。専門雑誌の学術論文。国際公法の講義での教授。数年のうちに、当初は単なる機会主義的専有に過ぎなかったものが尊重される理論となった。フランスの作戦の天才性は、力の行為を法の原理に変換したことにあつた。

日本では、この窃盗の人間的結果が残酷に感じられていた。一九五〇年六月に家長の死によって喪失を被った松方家は、自らの芸術的遺産の清算を無力に見守っていた。

故コレクターの長女である松方ハナは、鎌倉の先祖代々の邸宅で生存する家族を頻繁に集めていた。無限の憂愁に満ちたこれらの集まりは、自分たちに対して始動した機械の力の前での一家の当惑を物語っていた。

「愛する兄弟たち」と、彼女は一九五一年秋のそうした集まりの一つで、条約署名を報じる新聞を眺めながら宣言した。「政府が連合国の条件を受け入れたと新聞は説明している。それは国の復興のため、我々の将来のためだと言っ

ている。しかし我々はそれが何を意味するかよく知っている。父のコレクションは失われた。完全に失われたのです」

彼女の声には苦い諦観が滲み出ていた。ハナは父から芸術への情熱を受け継いでいたが、国際的な力関係に対する明晰さも同時に受け継いでいた。彼女は自分の家族が、常に反対してきた軍国主義政権の過ちのために代償を払っていることを知っていた。

解体された一族企業の相続人である次男の松方浩は、戦争を生き延び、いまだに客間を飾っている数少ない西欧の作品を見つめていた。彼は手にしわくちゃになった一通の手紙を持っていた。それは父が死ぬ前に書いた最後の手紙の一つだった。

「父上は最後の数か月間、心配するのが正しかった。ハナ、覚えているだろう？父上はもう眠れず、家の中を行ったり来ったりしていた。フランス人が決して作品を返さないことを予感していたんだ。終わり頃、よくこう言っていた。『彼らは盗みを合法的行為に変える方法を見つけた、浩よ。悪魔的な優雅さだ』と。私は誇張している、病気が父上を悲観的にしているのだと思っていた…」彼の声は鈍い罪悪感の重みを帯びていた。浩は父の不安を真剣に受け取らなかったことを自責していた。復興の経済的課題の前では芸術的問題は二次的なものだと考えていたのである。

兄弟の中で最年少の松方孝助が、末っ子らしい感動的な素朴さで口を挟んだ。

「でも結局、フランスの裁判所に訴えることはできないのでしょうか？弁護士を雇って？我々の主張を訴えて？何か方法があるはずです…父はフランスで尊敬されていた、芸術界に関係者もいた、友人もいたのですから…」

ハナは悲しそうに首を振った。彼女は既にこれらすべての道筋を探り、パリの何人かの知人にそっと連絡を取っていた。彼女の失望は抱いていた希望に比例していた。

「何のお金で、可哀想な孝助？我々の財産は没収され、企業は解体され、一家は破産したのです。そして仮に手段があったとしても、実際はそうではありませんが、フランスの裁判所が日本人に有利な判決を下すと想像できますか？我々は賤民になった、辛うじて容認される元敵国民なのです」

彼女は立ち上がり、父の情熱をまだ物語るいくつかの西欧彫刻が置かれた家族の庭園を見渡すベランダに向かった。手入れする手段がないために風雨にさらされ放置されているそれらを見ることは、彼女の心を締めつけた。

「兄弟たち、もはや本当にコレクションが問題なのではありません。いえ、もちろん苦痛ではありますが。しかし何より私が憤慨するのは、フランスのような文明国が私的収集家の財産を専有できるという考えです…父はその国をとても称賛していた。そこに友人がいて、習慣があった。そしてこれが彼らの感謝の表し方なのです。これは国境と民族的憎悪を超越する芸術の死です」

この会話は松方事件の背後に隠れている人間的悲劇を物語っていた。しかし誰がそれを気にかけただろうか？

自分たちの専有の実務的側面の管理に忙しいフランス当局には、このような嘆きに時間を割く余裕はほとんどなかった。国家遺産へのコレクションの統合の組織化の時だった。具体的で、目に見えるものを作る必要があった。

一九五一年秋から、ジャック・ジョジャールは没収された作品の大規模な修復・目録作成プログラムを開始した。各作品の状態を評価し、詳細なファイルを作成するためのチ

ームが編成された。大掛かりな行政的大混乱が始動していた。

「諸君」とジョジャールは宣言した。「我々にはこの遺産を保存し、活用する責任、この言葉を強調しますが、責任があります。フランスがこれらの傑作を受け入れる最も資格のある国であったことを全世界に示さなければなりません。我々が戦利品に手をつけたなどと言わせるわけにはいきません」

彼の公的な確信の背後で、ジョジャールは夜中に彼を苛む良心の呵責を抱いていた。占領中のレジスタンスとして、彼はナチの欲望から国家コレクションを救うために命を賭けていた。今、彼は戦った略奪者の立場にいることに気づいた。状況の滑稽さは彼の目を逃れなかったが、フランスの至上利益の名の下にそれを抑圧していた。

作戦の監督を委任されたベルナール・ドリヴァルは非常に熱心だった。彼はマニアの域に達する近代美術への貪欲な情熱を磨いていた。

「我々はここに国家資金を革命化する比類ない機会を握っているのです！これらの作品によって、我々の美術館はついにMET、MOMA、ナショナル・ギャラリーと対等に戦えるようになります…」

ドリヴァルは執拗な個人的挫折を隠していた。経歴を通じて二流の学芸員だった彼は、松方事件にフランス美術に自分の印を刻む機会を見ていた。彼の裏切られた野心はついにこの大規模プロジェクトに捌け口を見出していた。

一九五二年六月、ルーヴル美術館は「発見された傑作：フランス文化に奉仕する西欧芸術」と題された展覧会で扉を開いた。

国民教育大臣が自ら出向いた。パリの上流社会のすべてが美術館の廊下を行き交った。美術評論家たち、文化を求める社交界の人々、権威あるヴェルニサージュの常連の面々。

「素晴らしい充実！」とフランス・ディマンシュ紙が見出しを打った。他の新聞も合唱のように追随した。押し寄せる見学者の側でも同様の熱狂ぶりで、多くの人々は大西洋のこちら側で見ることを決して期待していなかった作品を発見していた。

専門雑誌では、専門家たちが博学を競い合った。コレクションの重要性についての徹底的な分析、フランス遺産への寄与についての学識ある所見。満場一致が支配していた。ほぼ、である。

少数の興ざめな人々、主に極左の側が、この「充実」の疑わしい条件を控えめに思い起こした。しかし彼らの抗議は公式な祝辞の喧騒の中に消えていった。それにしても、モネやルノワールを鑑賞できるときに、誰が不平屋の声を聞きたがるだろうか？

フランス世論は素早く松方コレクションを採用した。まるでそれが常に国家文化的景観の一部であったかのように。従って、使命は成功したのである。

既成事実が独自の正当性を作り出していた。

しかしすべての美しい機械装置には欠陥がある。そしてこれは大きな嘘に基づいていた。

公式プロパガンダの主張とは反対に、松方幸次郎は「戦争成金」とは程遠い存在だった。彼の企業は確かに日本の産業努力に参加していた。しかしそれは彼の国のすべての企業と同様、独裁的軍国主義政権に対して選択の余地を持たずにのことだった。

さらに厄介なことに、彼のコレクションは戦前にさかのぼるものだった。日本の攻撃性を体現するどころか、コレクションは世界に開かれ、他文化を尊重する日本を象徴していた。

フランスの公式見解によって窒息させられた真実は、長い間影の中に留まることになった。

その間、ルーヴルやその他のフランスの美術館の空調完備の収蔵庫で、没収された作品は誰も見ようとも聞こうともしない人間的悲劇を静かに物語っていた。

当面、一九五二年末の時点では、事件は決着がついているように見えた。喪失を被り破産した松方家には、家長の記憶を悼むことしか残されていなかった。

松方幸次郎の死は一家からその最も尊敬される長を奪っていた。彼の子どもたちだけがこの全事件の苦い記憶を保持することになった。

松方ハナは残りの人生をそれに捧げることになった。父のコレクションに関連するすべての文書を辛抱強く収集しながら。いつの日か真実が勝利するという希望を抱いて。一九五二年には全く取るに足らないものに思えた希望を。事態が動き始めるのは一九五八年末まで待たなければならぬだろう。

第5章：返還の喜劇

ラ・ボワスリー、コロンベ・レ・ドゥー・エグリーズ、一九五八年十二月

サンフランシスコ講和条約後の松方コレクション全体の接收は、誰をも満足させなかった。フランス国家はすべてを保持することもできたであろう。しかし、数か月前から日本との良好な関係を維持するための措置が適切と思われていた。部分的な返還が検討されていた。それは自発的な行為として、寛大なものとして提示されるはずだった…

一九五八年五月十三日のアルジェリア軍事クーデターの結果として数か月前に政権に復帰したドゴール将軍は、今や首相となっていた。彼はコロンベ・レ・ドゥー・エグリーズの私邸「ラ・ボワスリー」で週末を過ごしていた。その滞在は勤勉なものであった。土曜日は丸一日多くの資料の読書に費やされ、特に司法大臣ミシェル・ドブレが準備した松方コレクションに関する政令案の検討が行われた。

この月曜日の朝、将軍は政府の長が執務するマティニョン宮殿に戻る準備をしていた。

八時頃、運転手フランシス・マルーが運転するDS19が準備された。将軍は車に乗り込み、車両の右後部座席に座った。それは通常、妻イヴォンヌのために確保された席であった。しかし、彼女が体調を崩していたため、この日の旅には同行しなかった。前席では、副官のガストン・ド・ボンヴァル大佐が出発の合図を出した。サン・シール軍学校出身の彼は、まずレバントで勤務した後、レジスタンスに加わった。一九四三年にゲシュタポに逮捕され、マウトハウゼン収容所に送られ、一九四五年に解放された。将軍の腹心として、ドゴールが政府の責任を一切負わず政治の表舞

台から引退していた困難な時期である「砂漠の横断」の間、忠実な同伴者であった。

将軍は新しい車両の空気圧サスペンションに慣れることができず、それが彼に吐き気を催させた。彼は以前使用していた前輪駆動の十五馬力六気筒車の方をはるかに好んでいた。しかし、数年後のプティ・クラマールでの暗殺未遂事件の際に命を救うのは、このDS19であった。二本のタイヤが銃弾で蜂の巣状にされたにもかかわらず、シトロエンは自動水平調整サスペンションと独立車輪システムのおかげで、ヴィラクブレ空港まで走り続けることができた。

護衛車一台と国家憲兵隊の二台のオートバイからなる車列は、既に一時間近く走行していた。

将軍はボンヴァルに合図し、足を伸ばすために停車を求めた。再出発の際、彼は自分の隣に座るよう招いた。偉大な人物がこのように親密さを示してくれるとき、ボンヴァルは光栄に思った。

「ボンヴァル、私を悩ませている件について、いくつか質問がある」

ドゴールは副官より約二十歳年長であったが、しばしば彼の意見を求めた。世代の違いは、別の視点を得るために貴重であった。

「将軍、喜んでお役に立ちます」

ドゴールはボンヴァルに事情を手短に説明した。ドブレが提案した政令案の概要を述べた。

「ボンヴァル、もし我々が保持している作品の一部を日本人に返還するとすれば、世論は衝撃を受けると思うか？新聞は不利に反応するだろうか？」

「将軍、私はこの件の専門家ではございません。私の見解があまりお役に立てないのではないかと心配しております。しかし、現在国民はアルジェリアの出来事により関心を寄せていると思います。母親たちは軍が徴集兵を動員したことを心配しています。毎日何十人もの兵士が小競り合いで死亡したり負傷したりしています。新聞については、原則として全体的にあなたに敵対的です。この日本の件は多くの人の関心を引くことはないでしょう。世論にはもっと重要な優先事項があります…」

「そうだが、国際レベルでは、これが我々に不利に働くリスクはないだろうか？」

「将軍、昨年十一月以来、すべての各国政府は、ニキータ・フルシチョフが西側諸国に対して六か月以内に西ベルリンから軍隊を撤退させるよう求めたソ連の最後通牒に悩まされています。この状況下で、松方コレクションという二次的な問題が波紋を呼ぶ可能性は低いでしょう」

「ありがとう、ボンヴァル。いつものように、君の物の見方は常識に裏打ちされている…」

十一時三十分であった。「ラ・ボワスリー」からマティニョン宮殿を隔てる二百六十三キロメートルが支障なく走破された。

ドゴールは会議が予定されていた執務室に直ちに向かった。控えの間では、数人の協力者が三十分間待機していた。通常の挨拶の後、議論を開始することができた。

「将軍」と、机上に広げられた製本された文書を指差しながらドブレが言った。「先週お渡ししたこの条文によって、我々は松方コレクションの厄介な問題を解決することができます。もちろん、我々の本質的な文化的利益は保護しつつ」

ドブレは法学者として教育を受けたが、政治家として天職を見出していた。一九四四年に差し押さえの際にこの厄介な案件を個人的に処理した経験のあるドゴールは、国家主権の問題に払う注意深さで政令案の条項を再び検討していた。

「司法大臣、我が国の者たちが日本人と交渉した合意の条件を思い出させてくれ。我々の立場を危うくする可能性のあるものは何も与えていないことを確信したい」

「将軍、我々が得た合意は我々の利益にかなうものです。最も重要な点は、松方家の相続人から我々が保持する作品を含む、コレクション全体に対する明確で取り消し不能な放棄を得たことです。合意は形式的な側面もすべて網羅しています。日本の権限ある当局によって批准され、適切な国際手続きに従って登録されます」

情報担当国務大臣アンドレ・マルローは注意深く聞いていた。そして、芸術に関するすべての演説を特徴づける誇張をもって発言した。彼においては、美的情熱が滑稽さに近い大げさな表現への過度な嗜好と共存していた。

「将軍、この合意は我々の取得の本質的部分を巧妙に保護しつつ、国際的寛大さの外観を我々に与えます。フランスは最も重要な十八点の作品を保持します。その代わりに、我々はコレクションの残りを日本に「贈与」します。つまり、東京に特別に建設される美術館で展示されるために、より重要性の低い約三百点の作品です。我々はこのように、強制された返還を和解の素晴らしい身振りに変えるのです」

「相続人によるこの取り決めの受諾について、もう少し詳しく聞かせてくれ」と、逆転を疑うことを学んだ政府首班の疑念をもってドゴールが求めた。

外務大臣で慎重な外交官モーリス・クーヴ・ド・ミュルヴィルは、皮革製ブリーフケースから儀礼的に、立体的な封印で飾られた数通の公文書を取り出した。

「将軍、我々は相続人から明確で攻撃不可能な放棄を得ました。彼らの代表者松方三郎が署名したこの厳粛な書簡があります。この文書において、彼は故父のコレクション全体に対する現在および将来のすべての権利を明示的かつ最終的に放棄しています」

彼は慎重に文書を展開した。

「我々はこの文書を得るために数か月間交渉しました。それは返還する作品だけでなく、特に我々が保持する作品もカバーしています。相続人は、いかなる裁判管轄権の前でも、あらゆる将来の異議申し立てを正式に禁じています」

ドゴールは文書を注意深く検査し、一語一語を精査した。彼の幻想的な偉大さが日常の卑小さにぶつかるこれらの駆け引きを嫌悪していた。

「この放棄は確実に最終的と思われるか？我々の訴訟部門はすべての側面を検証したか？」

「確実にです」と、当時将軍の官房長であったジョルジュ・ポンピドゥーが断言した。「我々はすべての形式的側面を精査しました。いかなる欠陥も援用することはできません」

高等師範学校出身で古典文学の教授資格を持つポンピドゥーは、マルセイユの高等学校で教師として始まった後、国務院に入り、その後ロスチャイルド銀行に入った。銀行での経験は彼に有利な取引の巧妙さを教えたが、同時に洗練された文学的嗜好と対照的な金銭への不穏な魅力も育てた。彼は交渉の財政的側面を個人的に監督していた。市場価

格を知っており、フランスがそこで有利な取引を行っていることを理解していた。

「さらに」と彼は付け加えた。「我々が保持する十八点の作品だけで、総価値の八十パーセント以上を占めています。我々は上質部分を保持し、乳清を返す、と申し上げてよろしければ」

マルローは情熱的に彼の取引観を説明した。

「将軍、この案件は永遠のフランスの偉大さと文化的寛大さを示しています！我々は俗悪な個人収集家のように、これらの傑作を倉庫に利己的に保管することに満足しません。我々は日本国民に西洋芸術を発見してもらうためにそれを贈与し、一方で最も代表的な作品は我が国の文化遺産を豊かにするために保持します」

彼は情熱的に身振りを交え、狂ったように瞬きした。興奮すると悪化する癖であった。

「これは最高レベルの文化外交です、将軍！フランスは文明化国家としての役割を十分に担い、紛争を影響力の手段に変えるのです！」

「マルロー」とドゴールが介入した。「君も私と同様、何も『贈与』などしていないことを知っている。道徳的にもはや保持できないものを返還することに満足し、一方で我々が最も興味を持つものは保持するのだ」

将軍の辛辣な指摘は一時的にマルローを黙らせ、彼は当惑した頷きで承認するに留まった。かすかな赤みが彼の困惑を裏切った。最も誠実な興奮の中でも、彼は自分の修辞の限界を測る十分な冷静さを保っていた。実用的側面に議論を再集中させることを懸念したドブレは、ドゴールの明晰さを承認しつつ、将軍のこの核心を突く能力を賞賛した。

「将軍、あなたは取引の真の課題を理解されました。しかし、国内外の広報にとって重要なのは、部分的返還が日本に対するフランスの真に寛大な身振りとして現れることです。それは我々がアジアで同盟国を必要とする時期に、両国の接近に大きく貢献するでしょう」

長期的影響を懸念するクーヴ・ド・ミュルヴィルは、すべての交渉の基盤となる課題を明確にした。

「この件は我々の新しいアジア政策のより広い枠組みに位置づけられます、将軍。日本はヨーロッパにとって第一級の経済パートナーとなりつつあります。中国の力の台頭に直面して、東京と優秀な関係を維持することは我々の主要な利益です。フランスの輸出業者は日本市場に本格的に進出し、我々の実業家は日本の同業者と重要な契約を結び、我々の銀行は東京に支店を開設しています。この文脈において、我々の二国間関係を毒する文化的紛争を引きずることは愚かでしょう。我々が倉庫から決して出さない数枚の絵画のために…私は密かに、国民議会外務委員会の委員であるロベール・シューマン氏に接触しました。彼は一九五一年のサンフランシスコ講和条約交渉でフランスを代表したため、この案件をよく知っています。彼の意見は明確です。我々の現在の利益に照らせば、コレクションの大部分を日本に返還すべきです。」

「よろしい」とドゴールが宣言した。「しかし、取引の憲法上の側面に戻ろう。なぜ通常の立法手続きではなく政令によって進めるのか？」

この直接的で困惑させる質問は、テーブル周りに明らかな不快感を引き起こした。ドブレはポンピドゥーと当惑した視線を交わした。彼の個人的野心はドゴールを満足させる

ことに向かわせたが、法学者としての背景は権威主義的逸脱の危険を示唆していた。

「将軍、通常の立法手続きは数か月、場合によっては数年の議会討論を必要としたでしょう。それに伴うすべての偶然性ととも。規制権限に属する政令により、我々をはるかに迅速に進み、政府にとって困惑するものとなり得る公開討論を避けることができます。共産党議員がこの案件を利用することを想像できますか？あるいはさらに悪いことに、『国家遺産の投げ売り』を我々に非難するであろう初期のゴーリストたちを？」

「困惑する？どのような具体的意味で、司法大臣？」と、何かを隠されていることを感じる時の無慈悲な好奇心をもってドゴールが主張した。彼には、嘘を見抜くという特別な才能があった。それは、嘘の発見が生存問題であったレジスタンス時代の名残であった。

ドブレは躊躇した。彼の中の弁護士が廷臣と格闘していた。

「まあ、将軍…野党の議員が詮索したがる可能性があります。そして恐らく我々自身の多数派の何人かも。彼らは一九四四年に我々がコレクションを接收した正確な条件について疑問を持つかもしれません。何にも導かないこれらの古い論争を蒸し返すことは避けた方がよいでしょう」

クーヴ・ド・ミュルヴィルは、忠誠心に対する彼の控え目さが一時的に優位を占めて、慎重に介入した。

「それに、議会討論は必然的に松方家相続人に講壇を与えることになります。そして我々の事実版に異議を唱えたいすべての者にも」

ドゴールは眉をひそめた。危険なほどに。彼を知る者はそれが何を意味するかを理解していた。彼の自我は自分の過

去の決定、特に解放の混乱の中で行われたものに疑問を呈されることを許さなかった。

「諸君、君たちが私に、私自身が決定し引き受けた一九四四年の接收が不安定だった、あるいは道徳的に批判すべきものだったと示唆しているのではないことを心から願う」

「いえ、もちろんです、将軍！」とドブレが答えた。「決してそうではありません！しかし、議会討論がどのようなものかご存じでしょう…しばしば二次的な考慮に逸れます。そして我々の敵対者はそれを愛しています」

マルローは雰囲気のを和らげる必要があると感じた。文化大臣は討論をより有利な領域に戻す技術を身につけており、彼の知的虚栄心が逆説的に集団の利益に奉仕していた。

「将軍、政令はまた相当な利点を提示します。それは日常的な行政措置ではなく、重要な政治的行為です。それは世界におけるフランスの偉大さと我が国の文化的影響力についてのあなたのビジョンに位置づけられます」

ドゴールは宥められたように見えた。巧妙に述べられた賛辞は常に彼にこの効果をもたらし、意見に対する彼の公然とした軽蔑と奇妙に共存する承認への欲求を満たしていた。

。

「よろしい、諸君。しかし、政令は我々の憲法の規定を尊重しているか？」

誰もが憲法上の危険な地盤を歩んでいることを理解していた。しかし、将軍の前でそれを公然と認める者は誰もいなかった。

ポンピドゥーは巧妙に水を向けた。銀行家としての経験が、妥協することなく法的な障害を回避する術を教えていた。

。

「将軍閣下、憲法とは生きた文書であります。政府の行動の具体的要求に適応しなければなりません。この政令は我が国の制度の精神に沿うものです」

「ポンピドゥー君」とドゴールは答えた。「憲法は状況に応じて伸縮するアコーディオンではない。公権力の行動を規制するために精密に起草されたものだ」

ドブレは情勢が危機的になったことを理解した。彼は腹を割って話すことにした。

「将軍閣下、私たちは皆、あなたに署名していただきたいと思っております。それが我々を悩ませている問題を解決してくれるからです。そして日本との関係に重くのしかかり始めている問題を。厳密な憲法の観点では…この政令は完全に正統とは言えないかもしれませんが、それは確実にフランスの高次の利益に資するものです」

この率直な告白は逆説的にドゴールを安心させた。彼は単刀直入に話されることを評価し、不快な外交的婉曲表現よりも生の真実を好んでいた。

「司法大臣、君の誠実さに感謝する。よろしい。しかし、この手続きが憲法上非の打ちどころがないなどと信じろとは決して言わないでもらいたい。それがそうではないことを我々は皆知っている」

ドブレはすぐにその機会を捉えた。

「将軍閣下、それは署名にご同意いただけるということでしょうか？」

ドゴールは決断の賛否を慎重に検討していた。試練の中で培われた現実主義が、ついに理想を上回ったのだった。

「そうだ、司法大臣、私は署名に同意する。しかし絶対的で交渉不可能な条件が一つある。政令は、フランスの名誉

と尊厳を完全に保持するように起草されなければならない。我々が下卑た略奪者や恣意的な没収者として映ってはならない」

マルローはこの重要な点についてドゴールを安心させることを急いだ。彼の愛国心は將軍のそれと共鳴していた。

「將軍閣下、政令の前文はフランスの伝統的偉大さと文明化の役割を強調しております。我々は部分的返還が『フランスと日本間の和解と文化協力の精神において』行われることを明確に強調しております。それは、かつての敵に対するフランスの寛大さを証明するものです」

「そして、我々が保持する十八点の主要作品については具体的にはどうなのか？」

「それらは『すべての人々の最大の利益のためにフランスの文化遺産を豊かにする』ことを目的とすることを厳粛に明記しております。そして『我が国民と世界各国からの訪問者の芸術教育のために、我が国の最も著名な国立美術館で展示される』ことになっています。誰も我々がけちくさい、あるいは利己的な精神で行動していると非難することはできないでしょう」

ドゴールはうなずいた。フランスのイメージを守るその文言に納得したのだった。彼は政治的利益とフランスの偉大さという自身の理念を調和させる手段を見つけたのだった。

「それで結構だ、諸君。松方事件は解決した」

彼は共和国の紋章が刻まれた金のペンを取り、確固とした決定的な仕草で政令に署名した。

しかし、マティニョンからわずか数百メートル離れたパレ・ロワイヤルの小さな別館では、雰囲気はまったく勝ち誇ったものではなかった。文化省顧問のアンドレ・ブジヴァ

ルは、政令の文面を十度目の読み返しをしていた。治安判事としての教育から受け継いだ細かい職業的良心が、最も露骨な違法性に目を閉じることを許さなかった。彼の向かいで、書類でぎっしりと詰まった本棚に覆われた壁の部屋で、美術館総監のピエール・モワノは公然と懸念を共有していた。彼は硬直に近い誠実さで評判を築いていたが、それがすべての同僚の尊敬を獲得していた。

「アンドレ」とモワノは言った。「この政令は倫理的な観点から非常に居心地が悪い。我々は客観的に見て、同様に疑わしかった不正取得を隠蔽するために憲法上疑問視される手続きを承認しようとしている」

ブジヴァルは苦々しく同意した。彼の顔は数週間の不眠によって刻み込まれていた。

「ピエール、それが私が数週間考えていることだ。憲法第九十二条は、この芸術寄贈作業の法的根拠として適切に使用することはできない。国会での適切な議論と修正の可能性を伴う、議会によって正式に採決された法律が必要だろう」

「そして、政令がいつの日かコンセイユ・デタで異議申し立てされた場合、我々は具体的に何を危険にさらすのか？ 相続人や独立した法学者によって？」

ブジヴァルは長い間考え込んだ。

「率直に言って、ピエール、何が起こるかわからない。そして、それこそが私を心配させている。コンセイユ・デタは外交政策において政府の特権を尊重する伝統がある。我々の外交の詳細に干渉することを避けている。しかし、一般的に憲法手続きの尊重に非常に執着している。そして権力の濫用を検閲することをためらわない。問題は、我々がグレーゾーンにることだ。この案件は財産法、憲法、国

際法の側面を混在させている…この種の混合状況については明確な判例がない」

「そして法的観点から、君の考えでは我々の最も弱い立場は何か？長期的に最も問題を引き起こす危険があるのは？」

ブジヴァルは一瞬もためらわなかった。

「間違いなく、日本への宣戦布告の根本的な問題だ。事実を注意深く研究すればするほど、日本に対する我々の公式な交戦状態が極めて脆弱な基盤に基づいていることに気づく。いや、存在しない基盤に」

モワノは目の前に、アーカイブ文書と黄ばんだ電報で詰まった厚いファイルを開いた。彼の詳細への感覚が彼を困惑させる発見に導いていた。

「私は調査を行わせました。それは宣戦布告の公式発表の欠如に関して特定された欠陥を確認しています」

彼は数枚の書類を取り出した。

「より深刻なことに、宣戦布告は適切な日本当局に公式に通告すらされていません。直接的手段でも第三国を通じてでも。厳格な国際法において、発表も通告もされない宣戦布告には何の価値也没有せん」

「それは我々が日本と法的に戦争状態になかったということの意味するのか？」ブジヴァルは驚愕の念を強めながら尋ねた。

「正確にその通りです、アンドレ。そして、もし我々が日本と公式に戦争状態になかったのなら、日本人を『敵国の国民』と規定した一九四四年の政令は完全に法的根拠を欠いている。没収の全構造が崩壊するのです」

ブジヴァルは立ち上がり、パレ・ロワイヤルの庭園を見下ろすテラスに向かった。

「ピエール、我々は一見堅固だが、ぐらつく基礎の上に建てられた足場の建設を目撃している」

「どういう意味ですか？」

ブジヴァルは戻って座り、机の上に書類を広げた。

「論理的な連鎖をよく考えてみてください。一九四四年の政令は、法的に決して存在しなかった日本との戦争状態に依拠している。一九五一年のサンフランシスコ条約は『敵国財産』に適用されますが、もし我々が日本と戦争状態になかったのなら、フランスに存在する日本の財産は国際法の意味での『敵国財産』ではない。政令は立法府の排他的権限に属すべき芸術作品の寄贈を承認している…」

「君は本気でこの全構造がいつの日かカードの城のように崩壊する可能性があると思うのか？」

「我々は不安定な構造を建設したと思います。いつの日か、十年、二十年、三十年後に、誰かが勇気と資金的手段と必要な支援を持って、この仕組みを適切な裁判所で真剣に争う時が来るでしょう。そしてすべてが崩壊するでしょう」

彼らの会話は、ベルナール・アントニオの到着によって突然中断された。将軍の姻族の甥で、文化問題担当のアンドレ・マルロー内閣の特命顧問である彼は、政府首脳からの最新指示を携えて現れた。彼は急いでいる様子で、議論する気分ではなさそうだった。

「諸君、松方事件は終結されなければならない。将軍はいかなる形の異議申し立てについても、もはや聞きたくない」

アントニオは反対を許さない者のように話していた。ブジヴァルは慎重に進む必要があると感じた。

「アントニオ殿、私たちはこの全仕組みの長期的な堅固さについて若干の…懸念があります」

「どのような懸念か？」

彼の声には苛立ちがにじんでいた。モワノは説明を始め、彼が発見した各欠陥、各矛盾を詳述した。アントニオは聞いていた。しかし、彼の顔は何も良いことを予感させなかった。

「諸君、これらの些細な事柄は確かに知的観点から興味深い。しかし、フランスの主要な課題と高次の利益を見失わないようにしましょう」

ああ、「高次の利益」か…ブジヴァルは騙されなかった。

「どのような課題ですか？」

「まず」とアントニオは政権内部の特権階級の尊大さで説明した。「松方コレクションは我々の遺産の相当な豊富化を表している。我々が保持する十八点の主要作品は数千万フランの価値がある。その独特な性格を考慮すれば、おそらくそれ以上だろう。次に、我々の美術館はこれらの傑作のおかげで相当数の外国人観光客を引きつけることになる。文化的輝き、国際的威信…」

「対外関係の側面では？」モワノが尋ねた。

「部分的返還は、かつての敵に対する我々の寛大さを示している。それは、ヨーロッパにとってますます重要な経済パートナーである日本との我々の和解を促進する」

アントニオは暗記した教訓のように論拠を述べ立てた。寛大さ…最も美しい作品を保持しながらその言葉は味わい深かった。

「確かに、アントニオ殿、しかし作業全体の基盤が脆弱であれば…」ブジヴァルは自分でも知らなかった勇気で主張した。

「ブジヴァル殿、現実を思い出さなければなりません。ドゴール將軍は今朝政令に署名されました。それゆえ、それはフランス全土において法的効力を有します。誰もそれに異議を申し立てることはできません」

アントニオの身振りは有無を言わせないものだった。しかし、モワノは威嚇されなかった。

「我々は共和国の憲法上の規則を無視することはできません！」

「モワノ殿、憲法はフランスの偉大さに奉仕すべきものであり、形式主義的な考慮によってそれを阻害すべきものではない。政令は国家の利益に奉仕する」

二人の男性は、彼らの懸念をはるかに超越する論理に直面していることを理解した。国家理性がすべての規則を超越するボナパルト主義的概念であった。

一九五八年十二月十八日、政令は官報に厳粛に公示された。日仏和解とフランスの文化的寛大さについての大仰な理由書とともに。プロパガンダは即座に動き出した。

ボヌヴァル大佐が予想したこととは反対に、政府機関によって大いに刺激されたフランスの報道機関は「寛大な大統領の主導」を称賛した。ロロールは全面的に見出しを打った：「ドゴール、寛大にも日本に傑作を提供」。ラ・クロワは半ページの社説で「この高貴な主導はフランスの普遍的使命とその文明化の役割を証明している」と説明した。フランス・ソワールは「芸術へのアクセスの民主化」について語って賛成した。エコー・ダルジェは「フランスの偉大さ」を第一面で強調するインタビューと共にカラー写真

付きの報告を掲載するまでに至った。いくつかの反対の声が、コレクションの最初の取得条件についてひそかに疑問を呈する勇気を見せた。しかし、これらの控えめな批判は、政府のコミュニケーションによって組織された合唱の中にすぐに溺れてしまった。

東京では、銀座地区の伝統的な茶室の雰囲気の中で、松方幸次郎の娘婿で主要な日本側交渉者である松本重治が、署名を余儀なくされた放棄の条件を読み返していた。鈍い怒りが彼を蝕んでいた。洗練に慣れた彼は、力の関係の残酷性の前での礼儀の限界を発見していた。法曹界で最も尊敬される弁護士の一人である山本武志氏が彼を安心させようとしていた。彼もこの強制された取引の有効性に疑念を抱いていたが、彼の知恵は現実主義に向かわせていた。

「松本さん、あなたはこの交渉において客観的に他の選択肢はありませんでした。フランスがすべての切り札を持ち、我々は絶対的弱者の立場にありました」

山本はゆっくりと緑茶を飲んでいた。

「山本先生、私は義父の文化的遺産を安売りしてしまったのではないかと恐れています。彼らが保持するこの十八点の作品、それはコレクション全体の心臓部です」

彼は鞆から詳細なリストを取り出した。

「ご自分でご覧ください：ヴァン・ゴッホ、ゴーギャン、セザンヌ、ロダン…コレクションに国際的重要性を与えるすべてのものがフランスに残る。我々は三百点の作品を回収しますが、確かに、それらは小品、予備習作、それほど評価されていない芸術家の作品です…」

「あなたの悲しみは理解できます」と山本は同情した。「しかし、現実を見ましょう。この協定なしに、たとえ不完全であっても、あなたは厳密に何も回収できませんでした

。少なくとも、残りは日本に戻り、東京の将来の西洋美術館で展示されることができます」

「なんと屈辱的な条件で！我々は自分たちでこれらの作品のために特別に美術館を建設し、フランスが保持する作品への我々の権利を放棄し、この部分的返還がフランス当局の寛大な身振りとして提示されることを受け入れなければならない…」

彼は乱暴に茶碗を置いた。怒りが洗練された教育を上回っていた。

「これは侮辱です、山本先生！我々は略奪者に、盗まれたものの一部を返してくれたことに感謝することを強制されているのです！」

山本は首を振った。不正義を認識していたのだ。長年の法律経験が、武力の前では国際制度の限界があることを教えていた。

「松本さん、我々はフランスの決定に効果的に異議を申し立てることができない状況にあります。サンフランシスコ条約は、フランス領土内の日本の財産に関して、彼らにあらゆる権利を与えているようです」

「しかし、この条約は本当に我々の状況に適用されるのでしょうか？」松本が突然希望を込めて尋ねた。

この質問に弁護士は驚き、興味深く顔を上げた。

「どういう意味ですか？」

「実は、最も有能な部下に極秘の調査をさせました。フランスは日本と正式に戦争状態になったことがないようなのです。そうであれば、サンフランシスコ条約第十四条は私の義父の私有財産には適用されないはずです」

山本は身を乗り出した。彼が一度も探求したことのない手がかりだった。

「あなたの分析を詳しく説明していただけますか？どのような文書に基づいているのですか？」

松本は鞆からファイルを取り出した。彼の手は軽く震えていた——緊張ではなく、興奮のためだった。

「これをご覧ください、先生。我々は何か月もかけて日本の公文書とアメリカの機密解除文書を調べ上げました」

松本は、フランス当局がうまく隠蔽したと思っていた欠陥について詳細な説明を始めた。山本は聞き入った。フランスの機構に対する異議申し立ての可能性——わずかな——を心の中で計算した。

「松本さん、そのような対決は何年も続くでしょう。そして何より、フランス国家機構全体が我々に対して結束するでしょう。本当にそのような冒険に乗り出すおつもりですか？」

松本は彼の目をまっすぐ見つめた。声が硬くなり、普段の丁寧な物腰が隠していた決意を露わにした。

「義父の名誉のために、はい。彼のコレクションの記憶のためにも。そして…真実のために、山本先生。私は最後まで戦い抜く覚悟です。たとえそれが私を破滅させることになっても」

この考えが松方の相続人たちの心にゆっくりと芽生えていた。彼らはついに、巧妙に偽装された略奪が、人々に信じ込ませようとしているよりもはるかに不安定な基盤の上に成り立っていることを理解し始めていた。

ただし、一九五八年には、彼らには資金も、支援も、必要な人脈もなかった。ドゴールが権力の座にあり、本土が勝

利に酔い、フランスの偉大さが絶頂期にあった時代だった
...

ルーヴル美術館の地下室や他のフランス芸術の殿堂で、フランスが保管している十八点の傑作は静寂の中でその生命を続けていた。

一九五八年十二月十七日のオルドナンスが松方コレクションの運命を正式に封印した。

しかし、このオルドナンス自体が、その見直しの種を内包していた。いくつかの小品の「返還」を公式化しながら最も美しい作品を保持することで、フランスがコレクション全体に対して絶対的な権利を持っていない可能性があることを認めていた。美しいフランスの建造物における小さな裂け目。この亀裂は何年も後に、より粘り強く、より武装した他の者たちによって利用されることになるだろう。

フランスの「寛大さ」を宣言することで、オルドナンスはパリが歴史の忘却の彼方に消し去りたいと望んでいた事件に注意を向けさせていた。当局が埋葬したと期待していた紛争に対する意図しない宣伝だった。

最後に、憲法上極めて疑わしい手続きに依拠することで、脆弱な前例を作り出していた。わずかな判例の変更で崩壊する可能性のあるみかど遊びのようなものだった。

これらすべての弱点の要素は、フランスの責任者たちには全く理解されていなかった。

松方事件は終結にはほど遠かった。新たな段階に入ったに過ぎなかった。消化と成熟の段階。長い、非常に長い段階だった。一九五八年の当事者たちは一人ずつ消えていくだろう——死がその仕事をなし遂げながら——しかし彼らの決定は後継者たちの存在を毒し続けるのだった。

この案件は時代や体制を大きく超越する問題を提起していた。国家理由の名の下に他者の文化財を自分のものにする
ことができるのか？文化政策に関しては目的が手段を正当
化するのか？民主的であると自称する国家は、自らの利益
が危機に瀕した途端に自国の原則を踏みにじる権利がある
のか？

もちろん厄介な問題だった。しかし一九五八年に誰がそれ
を気にかけただろうか？

「返還の喜劇」は見事に機能していた。

松方事件が再燃するためには、二十世紀末の激変——ベル
リンの壁の崩壊、グローバル化、文化財に関する新たな国
際規範の出現——を待たなければならなかった。

しかし、それは別の叙事詩である。一九五八年とは大きく
異なる世界で展開される叙事詩。神聖なる利益を口実にし
て、国家がもはやそれほど容易には隣国の財宝を自分のも
のにできない世界での叙事詩なのだった。

第6章：忘却の年月

パリ、一九七五年

削岩機の轟音が旧オルセー駅の巨大なホールに響いていた。石膏の粉塵が宙に舞っていた。そこは建築の戦場のような様相を呈していた。ねじ曲がった金属梁、破られた壁、陥没した床。この混沌の中に、フランス芸術の未来の神殿が生まれることになっていた。

主任学芸員でオルセー美術館の将来の館長となるフランソワーズ・カシャンは、慎重に瓦礫を乗り越えながら進んでいた。ひび割れたコンクリートにヒールの音を響かせていた。彼女は重要な会議の時に着る、いつもの黒いスーツを身に着け、「松方コレクション」と記された黄色いファイルを抱きしめていた。その隣で、フランス美術館総局長のミシェル・ラクロットがゆっくりと歩いていた。彼の完璧な服装は、二人を取り囲む終末的な光景と対照をなしていた。

カシャンは不安の入り交じった魅力で工事を観察していた。高名な外科医の娘で、著名な共産主義活動家マルセル・カシャンの孫娘である彼女は、美術・考古学研究所で学び、早くから芸術への貪欲な情熱を育んでいた。

「ミシェル、これをご覧ください」フランソワーズ・カシャンは巨大な中央身廊を大きく手で指しながら言った。「ここに印象派のコレクション全部を設置できますね。モネをルノワールの向かいに、ドガを奥のアルコーブに…そしてこの光！この自然光が差し込む様子、これはパステル画にまさに必要なものです」

ラクロットは上の空で頷き、手に持つ設計図に視線を走らせていた。彼は悩んでいた。典型的な官僚である彼は、真

の能力と堂々たる機会主義の巧妙な組み合わせによって文化行政の全ての段階を上り詰めていた。彼は妥協の芸術、相容れないものを調和させるこの知的体操に長けていた。

「フランソワーズ、松方作品の展示について真剣に話し合わなければなりません。昨夜、大臣官房から電話がありました。彼らは…なんと言いますか…この出所について与えられる可視性を懸念しています」

「懸念？」カシャンは皮肉を込めて繰り返した。「何を懸念しているのですか？我々のコレクションに世界で最も美しいヴァン・ゴッホとゴーガンがあることを？」

一人の作業員が瓦礫を満載した手押し車を押しながら彼らの近くを通り過ぎた。ラクロットは彼が遠ざかるのを待ってから、本能的に声を低めて再開した。

「何を言っているか、よくお分かりでしょう、フランソワーズ。このコレクションは時限爆弾です。もしジャーナリストたちがその取得条件を調べ始めたら…」

「その取得？没収と言いたいのでしょうか、ミシェル。物事をその名で呼びましょう」

ラクロットは顔をしかめた。カシャンがこれほど直接的になる時を嫌っていた。彼らの界限では、婉曲語法や迂言、あまりに露骨に物事を名指ししないですむもの全てが好まれた。同僚のこの言葉の反逆的傾向は彼を不快にさせた。

「まさに」彼は神経質に周りを見回しながら再開した。「それは避けるべき種類の言葉です。聞いてください、私は業務通達を準備しました。読み上げましょう」

彼はブリーフケースからタイプした文書を取り出し、単調な声で読み始めた。

「旧松方コレクション由来の作品の展示に関する指示。文化省の指示に従い、これらの作品の出所に関して中立的な命名法を採用することが推奨される。以下の表記が優先されるべきである。『国家コレクション』、『フランス国家取得』、『匿名寄贈』。松方コレクションへの明示的な言及は、フランス美術館総局による事前承認の対象とする」カシヤンは緊張した笑いで彼を遮った。

「匿名寄贈？冗談でしょう、私は願います？数百点の主要作品のコレクションについて話しているのです、老いた叔母からもらった一枚の絵ではないのですよ！」

「分かっています」ラクロットは文書をしまいながらため息をついた。「もし全てを語り始めたら - 戦時中の差し押さえ、戦後のでたらめな交渉、一九五八年の茶番劇 - 途方もない論争を抱え込むことになるでしょう。そして、新しい美術館には本当にそれは必要ありません」

二人は歩き、作業員たちがアーチを補強しているのを忙しくする足場を迂回した。音は耳をつんざくほどだったが、逆説的に彼らの会話に親密さを提供していた。カシヤンは自分の職業の妥協に直面する時に襲ってくるこの怒りが高まるのを感じていた。彼女が最終的に屈服することを知っているが故の自分自身への嫌悪が混じった怒りだった。

「この全てで私を最も困らせることが何か、お分かりですか？」カシヤンはついに言った。「我々はナチの略奪でドイツ人に非難していることを正確に行っているのです。隠蔽し、軽視し、何事もなかったかのように振る舞う」

「その比較は過度です、フランソワーズ。状況は全く関係ありません」

「そうですか？外国人収集家がフランスでコレクションを構成する。戦争が勃発する。国家がその財産を差し押さえ

る。戦争が終わる。国家が財産を保持する。根本的な違いを説明してください、お聞きします」

ラクロットは急に立ち止まり、彼女の方を向いた。この会話は彼が埋もれたままにしておきたい疑念を呼び覚ました。彼の全経歴は、その矛盾がどのようなものであれ、国家に忠実に仕えるこの能力にかかっていた。この忠誠を疑問視することは、彼が認めたくないほど彼を恐れさせた。

「違いは、松方が日本人で、日本が敵国で、正式な国際条約があったということです。サンフランシスコ条約、何かお聞きになったことはありますか？全て合法です」

「合法かもしれませんが」

「いつから道徳が政治を導いているのですか？」ラクロットは反駁した。

二人は印象派の大ギャラリーとなる場所に到着した。空間は巨大で、フィルターされた金色の光に浸されていた。カシャンは部屋の中央で立ち止まり、空間全体の容積を視線で包み込むためにゆっくりと自分自身の周りを回った。このような瞬間に、芸術への情熱が再び表面に現れた。

「ここに『アルルの寝室』を置きたいのです」彼女は宣言した。「真ん中に、天窓照明で。これがコレクションの目玉になるでしょう」

「素晴らしいアイデアです」ラクロットは賛同した。「このヴァン・ゴッホは格別です。黄色の振動、部屋の歪んだ遠近法…これは絶対的傑作です。見物客がそれを見るために押し寄せるでしょう」

「そしてそれが松方コレクション出身だということはどこにも言及しない？」

「言及すべきことを言及します『油彩、一八八八年、オルセー美術館蔵』。それだけです」

鈍い音が二人を遮った。一人の作業員が数メートル離れた所で壁に穴を開けており、白い粉塵の雲を舞い上げていた。二人は咳をしながら遠ざかった。ラクロットは自分が永続化に貢献しているこれらの国家の嘘の重さを感じていた。彼の熱心な官僚の仮面が知覚しがたいほどにひび割れるこれらの身振り、沈黙、瞬間に透けて見える道徳的疲労だった。

「先週、絵画部門の学芸員コロンジュに会いました」カシヤンは彼らが安全な場所についてから再開した。「彼は興味深い逸話を話してくれました。どうやら一九六〇年代に、松方の相続人の一人がルーヴルにコレクションの作品を見に来たようです」

「それで？」

「彼は泣きました。文字通り祖父が所有していたセザンヌの前で泣いたのです。当時の副学芸員だったコロンジュは、どうすればよいか分からなくなりました。彼はハンカチを差し出し、作品がよく手入れされることを約束して出口まで送りました」

「感動的ですね」ラクロットはコメントした。「しかしそれは状況を何も変えません。これらの作品は今やフランスのものです」

そこから何千キロメートルも離れた東京の代官山住宅地で、松方三郎は伝統的な家屋の縁側から禅庭園を眺めていた。彼は手に褪せた写真を持っていた。一九二〇年代のパリのコレクションの前でポーズをとる父、幸次郎松方。その後ろの壁に掛けられているのは、今フランスの美術館を飾っている絵画のいくつかが見えた。三郎は敗北に刻印され

た日本人の一人で、先祖の誇りと国民的屈辱の間で引き裂かれていた。伝統的規範に従った名誉ある男である彼は、それでも現実に直面して妥協の技術を学ばなければならなかった。この二重性が彼を蝕んでいた。無力を受け入れながら家族の尊厳を保つこと。父のコレクションの失失は、彼にとって彼の時代のあらゆる降伏を象徴していた。妻の道子が静かに近づき、熱い酒の湯呑みを彼の隣に置いた。彼女の苦痛な諦めは、夫たちの自尊心の傷を決して裁くことなく手当てすることに慣れた日本の妻たちのものだった。しかし時折、三郎の記憶の幽霊に直面して、彼女の視線に落胆が透けて見えた。

「また、あの写真を見ているのですね」彼女は優しくつぶやいた。「それは痛みを呼び覚ますだけです」

「どうやって忘れられましょうか、道子？」彼は写真から目を離さずに答えた。「父はこのコレクションに人生を捧げました。日本に美術館を創り、我が国民を西洋美術に教育したかったのです」

「三郎、ページをめくらなければなりません」

彼はゆっくりと頭を振った。この反芻への固執は、彼における喪失の受け入れ不能を示していた。

「ページをめくる？毎年何百万人もの観光客が我々の絵画がパリで盗まれたものだということさえ知らずに賞賛している間に？いいえ、道子。私はページをめくることはできません。正義がなされるまでは」

彼は写真を置き、しわの寄った手の間に酒の湯呑みを取り、手のひらに広がる暖かさを味わった。

「昨日、ロダン美術館の学芸員から手紙を受け取りました」彼は再開した。「彼らは十九世紀フランス彫刻の展覧会を企画しています。一九五八年に彼らが我々に『寛大に返

還』した作品のいくつかを借りたいと言っています。彼らは傑作を保持し、我々に喜んで返してくれたくずを貸してくれと求めているのです」

「何と返答するつもりですか？」

「何も。何も答えません。彼らに良心で何とかしてもらいましょう、もし彼らに良心があるならば」

沈黙が二人の間に訪れ、庭の小さな竹の泉のさざめきだけがそれを破った。道子は結局夫の隣に座り、そっと手を彼の手に置いた。この身振りは、年月を重ねて千回繰り返され、彼女の揺るがぬ愛と三郎の反芻に対する疲労の両方を裏切っていた。

「健二が大きくなっています」彼女は観察した。「曾祖父についてますます多くの質問をしています。この間、幸次郎が大収集家だったのに、なぜ家に西洋絵画が一枚もないのかと私に尋ねました」

「何と答えたのですか？」

「真実を。それらがフランスにあると。しかし、どのようにしてそこに到着したかを説明する勇氣はありませんでした。それはあなたがすべきことです、それはあなたの家族の遺産ですから」

この伝達の責任が彼を押し潰していた。無邪気さを汚染することなく記憶をどのように保つか？憎悪を接種することなくどのように真実を伝えるか？

「十歳の子供に、世界が強者の法則に支配されていることをどう説明したらよいのでしょうか？学校で教えられる美しい概念 - 正義、公正、尊重 - が、国家間の関係においては空虚な言葉でしかないことを？」

「彼は理解するでしょう。子供たちは思っているより多くのことを理解します」

「そうかもしれません。しかし私は可能な限り長く、この苦痛から彼を守りたいのです。もう少し世界が正しいと感じさせておきましょう」

パリ、フランス美術館総局、一九七六年

ヴァロワ通りのフランス美術館総局の会議室は、まさに軍事会議の様相を呈していた。十名ほどの高級官僚と美術館学芸員たちが、レオン・テュイリエ局長が事務次官と共に練り上げた計画の説明に耳を傾けていた。

テュイリエは、国家を宗教とした高級官僚という種族に属していた。高等師範学校出身で教授資格保持者である彼は、信者の熱情をもって制度を崇拝していた。この絶対的な献身が彼を頂点へと押し上げたのである。松方事件において、彼は解決すべきコミュニケーション問題としか捉えておらず、倫理的側面を意図的に無視していた。

「紳士淑女の皆様」と彼は重々しく落ち着いた声で始めた。「我々は棘のある難題に直面しています。我が国のコレクションには、我々の美術館の誇りとなる作品群があります。しかし、その取得の複雑な遺産を管理しなければなりません。大臣官房から、明確で一貫した行動方針を策定するよう要請されています」

彼は立ち上がり、歩き回り始めた。この歩き回る習慣は、隠そうとしている緊張の現れだった。

「松方コレクションは重要な作品群を代表しています」と彼は続けた。「我々は商業的価値の高い一群について語っています。しかし、金銭的側面を超えて、問題となっているのは我々の国際的評判です」

美術館総監のジャック・コニウムは、介入すべきだと判断した。彼は数々の危機を乗り越え、道徳的争点を相対化することを可能にする哲学を身につけていた。

「お許しいただければ、我々は不必要に状況を深刻化していると思います。官房の勧告は何でしょうか？」

デュイリエは席に戻り、重要な発表のために取っておいた厳粛な姿勢を取った。

「事務次官は明確なアプローチを提案しています：段階的消去です。我々は十年間にわたって、公文書から松方コレクションへの言及をすべて消去します。作品は当然展示されたままですが、その来歴は段階的に…そう…中性化されるのです」

「つまり？」とルーヴル美術館の学芸員が尋ねた。

「つまり、我々はそれらを完全に統合するということです。特別な言及もなく、区別もなく。それらは『ルーヴル美術館の作品』あるいは『オルセー美術館の作品』となるのです。まるで常にそこにあったかのように」

「しかし、アーカイブは？既存のカタログは？」とコニウムが異議を唱えた。

「アーカイブは専門研究者にとって利用可能なままです、もちろんです。我々はソビエト連邦ではありません。カタログについては、新しい版で…浄化されたもので置き換えられます」

顧問として招かれたルーヴル美術館元部長のルイ・バザンが初めて発言した。八十歳代の彼は、高齢が与える言論の自由を若い同僚たちは許さなかった。

「私是一九五一年の条約交渉の際にその場にいました。当時は若かったのですが、いくつかの会議に出席しました。

我々が行ったことは…なんと言うべきか…法的観点から創造的でした。我々は敗戦国日本の弱さにつけ込んで、正直に言えば純然たる直接的没収であったものを合法化したのです」

「バザンさん」テュイリエが遮った。「我々はこの歴史をやり直すためにいるのではなく、現在を管理するためにいるのです」

「まさに」バザンは年齢が与える無遠慮さをもって反駁した。「現在を管理することは過去を理解することを含意します。そして過去は我々が濁った水域を航行していることを教えています。日本人は経済的に立ち直っています。彼らは永遠に沈黙したままではいらないでしょう」

「まだ沈黙している間に行動すべき理由が増えたということですね」と局長は結論づけた。

会議は続いた。実践的な方法について議論された。作品の解説プレートをどのように変更するか、美術館職員にどのようにブリーフィングするか、ジャーナリストや研究者からの質問にどう答えるか。テュイリエは自らの疑問を隠しきれない権威をもって議論を指導していた。彼は孤独な時間に、自分が組織することに貢献している欺瞞を明確に意識し続けていた。

オルセー美術館、一九七八年

美術館はまだ工事中だったが、いくつかの展示室はすでに形を成し始めていた。将来のポスト印象派ギャラリーでは、技術者チームが巨大な木箱の周りで作業に追われていた。その中には、ルーヴル美術館の収蔵庫から運ばれてきたヴァン・ゴッホの『アルルの寝室』が入っていた。

最近任命されたばかりの学芸員ジャン＝ピエール・モワザンは、明らかに緊張しながら作業を監督していた。これほど重要な作品を扱うのは初めてのことだった。小商人の息子である彼は、才能と決意によってすべての階級を駆け上がり、その過程で成り上がり者特有の神経質さを身に付けていた。

「そっと！」と彼は引越し業者たちに叫んだ。「これはヴァン・ゴッホなんだ、イケアの食器棚じゃないぞ！」

学芸員たちの気まぐれに慣れた作業員たちは、専門家らしい冷静さで作業を続けた。ゆっくりと、慎重に、絵画は木箱から取り出され、特別に設計されたイーゼルに置かれた。

モワザンは魅了されながら近づいた。黄色の激しさ、遠近法の奇妙さ、この空虚な部屋から漂う感じ取れる引きこもり感…すべてがそこにあり、無傷で、心を揺さぶるものだった。

「モワザン様？」

彼は振り返った。白衣を着た若い女性が彼の後ろに立っていた。

「はい？」

「資料室のシャルロット・シュニエです。この作品の説明プレートの情報を確認させていただきたいのですが。」

彼女はファイルを開き、初心者のアーキビストらしい熱心さで読み始めた。

「では…ヴィンセント・ヴァン・ゴッホ、『アルルの寝室』、一八八八年十月、カンヴァスに油彩、五十七・三×七十三・五センチメートル。来歴については、「松方コレクション、パリ、一九二一年頃取得；フランス国家により没

収、一九四四年；ルーヴル美術館、一九五一年；オルセー美術館に寄託、一九七八年」とあります。これで正しいでしょうか？」

明らかに困惑したモワザンは、わずかに頬を赤らめた。若い理想主義者であるシャルロット・シュニエは、美術館界の掟を学ぶ前の彼自身の姿そのものだった。

「実は、来歴に関して新しい指示を受けているんです。この作品については、「オルセー美術館コレクション」と表示してください。」

資料担当者は驚いて彼を見つめた。

「でも…それは嘘です。この作品には来歴があります、記録された年代順があるんです。それを消すことはできません！」

「これは私の命令ではないんです、シュニエさん。上からの指示です。かなり上からの。」

「でも、ばかげています！」と彼女は抗議した。「美術を学ぶ学生なら誰でも、この絵が松方コレクションから来たものだと知っています。それについて言及した出版物が何十冊もあるんです！」

モワザンは彼女に近づき、声を落とした。

「聞いてください、あなたの苛立ちは理解します。私も困っています。しかし、非常に明確な指示を受けているんです。松方コレクションは、公式には、もう存在しないことになっています。これらの作品は常にフランスの美術館に属していたということです。これが新しい真実なんです。」

「新しい真実？」と彼女は信じられないように繰り返した。「ここはオーウェルの『一九八四年』の世界なんですか？」

「シュニエさん、もしあなたが職を大切に思うなら、疑問を持たずに指示に従うことをお勧めします。これは友人としての助言です。」

若い女性はファイルを閉じ、制度的偽善との初めての対峙によって、彼女の理想主義に亀裂が入った。

「分かりました。「オルセー美術館コレクション」ですね。でも、この嘘を誇りに思えとは言わないでください。」

彼女は踵を返し、怒りに満ちた足取りで立ち去った。モワザンは彼女が去るのを見送った。これらの作品について真実を知ったときの自分の憤りを思い出した。しかし時間が経てば、人は慣れるものだ。この道徳的適応能力こそが、彼が自分自身について最も恐れていることかもしれない。

これが、美術館界の真の教訓なのだ。

東京、一九八一年

健二は今や十六歳になっていた。日本人としては背が高く、丸い眼鏡をかけた彼は学者らしい風貌を持ち、自由時間の大部分を渋谷の市立図書館で過ごしていた。その日、彼は印象派に関する本をめくっていたとき、『アルルの寝室』の複製画に出くわした。説明文には「オルセー美術館、パリ」とあった。

何かしら定義できないものに興味をそそられ、彼はその著作を読み続けた。さらに進んで、二十世紀初頭の収集家に関する章で、白黒の写真を見つけた。彼の心臓は止まった

。それは彼の曾祖父、松方幸次郎が絵画コレクションの前でポーズを取っている写真だった。そしてそれらの絵画の中に、はっきりと見えるのは『アルルの寝室』だった。

彼は再び複製画の説明文を見た。「オルセー美術館、パリ」。松方の言及はなし。何もなし。まるで彼の曾祖父が存在しなかったかのようにだった。

その晩、彼は祖父と対峙した。健二は家族の秘密に対する若者特有の性急さを持っていたが、同時に大人の嘘を見抜く特別な直感力も持っていた。彼は曾祖父の頑固さを受け継いでいたが、まだその内なる動機は知らずにいた。

「おじいさん、図書館で奇妙なものを見つけました」

松方三郎は新聞から目を上げた。彼は何年もの間この瞬間を恐れており、孫の無邪気さを守りたい気持ちと家族の記憶を伝える義務の間で揺れ動いていた。

「ああ、そうか？ 一体何を？」

健二は開いた本を彼の前に置いた。

「この写真の人は曾祖父ですよ？ これらすべての絵画と一緒に？」

彼は少し青ざめたが、冷静さを保った。

「そうだ、彼だ」

「そしてこの絵、そこにあるのは、オルセー美術館にあるファン・ゴッホですよ？」

「そうだ」

「では、なぜ美術館は、それが私たちのものだったと言及していないのですか？」

三郎はゆっくりと新聞をたたんだ。彼が恐れていた瞬間が到来していた。孫に真実を話さなければならなかった。こ

の苦痛な伝承は、彼の重荷であると同時に責任でもあった。

「座りなさい、健二。これは長い話だ。苦痛な出来事なのだ」

二時間の間、彼はすべてを語った。彼の声は震え、頭の中で何千回も反芻してきたこの物語の感情的重さを明かしていた。

健二は拳を握りしめて聞いていた。この十代の少年は、世界が正義ではなく力によって支配されていることを残酷に発見していた。この啓示は彼の無邪気さの終わりを示していたが、同時に彼の生涯を支えることになる意志の誕生でもあった。

「でも…でも、それは盗みです！」祖父が話し終えたとき、彼は叫んだ。

「そうだ。しかし国際条約によって合法化された盗みだ。それが攻撃できないものになっている」

「攻撃できない？ 攻撃できないものなどありません！ 弁護士を雇い、国際的な報道機関に警告し、スキャンダルを起こすことができます！」

三郎は悲しそうに首を振った。何年もの失敗が彼を宿命論者に、おそらく若者のエネルギーに対してあまりに宿命論的にしていた。

「試したんだ、健二。何年間も。しかしフランス人は痕跡を消し、出来事を書き換えた。彼らにとって、これらの作品は常にフランスのものだったのだ」

「それでは諦めるのですか？ 彼らを勝たせるのですか？」

三郎は孫の目を見つめた。そこに彼は自分の父を思い出させる情熱を見た。この炎は彼の希望であると同時に恐れで

もあった：ついに正義が果たされるのを見る希望、健二が既に自分の存在を毒していた探求の中で燃え尽きるのを見る恐れ。

「いや、諦めない。待つのだ。準備する。いつか、機会が現れる。そしてその日、準備ができていなければならない。だから君は勉強しなければならないのだ、健二。法律を学び、外国語を学び、世界がどのように機能するかを発見するのだ。私たちから盗まれたものを取り戻すには、力だけでは十分ではない。知性、忍耐、そして何よりも、敵が自分自身を知っている以上に敵を知ることが必要なのだ」

パリ、グラン・パレ、一九八五年

グラン・パレでの展覧会「フランス美術の一世紀：一八八五年―一九八五年」は、その年の文化的大イベントであった。フランソワ・ミッテラン大統領自らが開会式を行う予定であった。舞台裏では、大騒ぎであった。現在オルセー美術館館長を務めるフランソワーズ・カシャンが、スタッフと共に最終準備を監督していた。

カシャンはキャリアの頂点に達していた。職業上の成功を収めるたびに、そのために受け入れざるを得なかった諦めを思い出させられた。松方事件は彼女の内的矛盾を結晶化させていた。芸術愛好家対出世主義者、知識人対官僚。

「どういうことですか、ゴーガンの作品ラベルが準備できていないって？」と彼女は助手を厳しく見つめながら叫んだ。

「つまり…ちょっとした問題がございまして、館長。一九七九年のカatalogでは、このゴーガンは松方コレクション由来として記録されています。しかし新しい資料では、こ

の由来について一切言及がありません。記者たちが質問してくる可能性が…」

この松方の件は重荷になっていた。展覧会のたび、貸し出しのたびに、告発する亡霊のように蘇ってくるのだった。彼女は作品そのものの視線を感じた、まるでそれらが正義を求めているかのように。

「聞いてください、これは明白です。一九七九年のカatalogに誤りがあったのです。それだけのことです。もし質問されたら、より深い調査によって作品の真の由来が確立されたと答えてください。」

「しかし館長、専門記者たちはこの事件を知っています。例えばフィガロ紙のポール・ジュルダン、一九七〇年代に松方コレクションについて何本も記事を書いています…」

「それなら彼は、古い論争を蒸し返すことが自分の利益にならないことを理解するでしょう」と彼女は答えた。「オルセー美術館はフィガロ紙と素晴らしい関係を築いています。彼らのイベントのために定期的に作品を貸し出しています。それが変わるとしたら残念なことですね、そう思いませんか？」

メッセージは明確だった：飴と鞭。ゲームに参加する者は報われる。その他の者は…この権力の行使方法は、カシャンの中に彼女が常に持っていたわけではない冷酷さを示していた。システムが知らず知らずのうちに彼女を変えてしまったのだった。

開会式の夜、パリの文化界の著名人たちが出席していた。大臣、大使、コレクター、美術批評家…演説の中で、フランソワ・ミッテランは「フランスの天才」と「芸術の世界

的首都パリ」を称賛した。展覧会のかんりの部分を占める没収された外国作品については一言も触れなかった。

群衆の中で、一人の男が苦い笑いを浮かべながらその光景を観察していた。パリ駐在朝日新聞特派員の田中幸雄が、メモを取っていた。彼はフランス語を使いこなし、松方コレクション事件を細部まで知り尽くしていた。彼の母方の叔父は一九三〇年代に松方幸次郎の下で働いていた。田中は、フランス文化への敬意と被った不正義に対する恨みの両方に育まれた日本人ジャーナリストの一人であった。この二面性は彼の仕事に反映されていた：西洋芸術への賞賛、略奪に対する憤慨。彼は松方に関する真実を個人的な十字軍として取り組んでいた。

演説後、カクテルパーティーでフランソワーズ・カシャンに近づいた。

「館長、田中幸雄と申します、朝日新聞です。素晴らしい展覧会ですね。特にポスト印象派のセクションに感銘を受けました。」

「ありがとうございます、田中さん。オルセー美術館は世界で最も美しいコレクションの一つを所有していることを誇りに思います。」

「確かに。これらの作品のいくつかには魅力的な経緯があります。例えばこのゴーガンは、私の同胞である松方幸次郎によって構成されたコレクションの一部ではありませんでしたか？」

カシャンの笑顔がわずかに固まった。彼女はこのジャーナリストの手法を見抜いていた。致命的な一撃の前の穏やかなアプローチ。

「間違いだと思います、田中さん。このゴーガンは常にフランス国立コレクションの一部でした。」

「本当ですか？しかし、ここに一九二七年のジョルジュ・プティ画廊での展覧会カタログの複製がありますが、この作品は明らかに松方の所有として特定されています…」

彼はポケットからコピーを取り出し、館長に手渡した。彼女はそれをほとんど一瞥しただけで、厄介者に向ける傲慢な表情を浮かべた。

「当時のカタログにはしばしば誤りがありました、田中さん。現在の我々の調査ははるかに信頼性があります。」

「なるほど」と記者は不吉な予感のしない笑みを浮かべて答えた。「誤り。何と便利なことでしょう。教えてください、館長、松方コレクションの作品は現在あなた方の美術館の壁にいくつ飾られているのですか？」

カシャンは身を硬くした。この記者は本格的に彼女をいらだたせ始めていた。彼女の権威に対する異議申し立てに直面すると湧き上がるあの怒りを感じた。

「田中さん、あなたが何を暗示しようとしているのか分かりませんが…」

「何も暗示していません、館長。明確なジャーナリスティックな質問をしているのです。あなたがお答えになりたくない質問に。それはあなたの権利です。しかし、組織的な略奪にひどく似ているものについて調査することも私の権利です。」

「田中さん、あなたの書くものには十分注意することをお勧めします。名誉毀損はフランス法で処罰されます。」

「では窃盗は？窃盗はフランス法で処罰されるのですか、館長？」

この言葉と共に、彼は丁寧にお辞儀をして立ち去り、フランソワーズ・カシャンを怒りに沸き立たせたまま残した。

彼女はイタリア大使と会話中のミシェル・ラクロットに合図を送った。

「ミシェル、問題があります。あそこの日本人記者です。松方事件について嗅ぎ回っています。」

ラクロットは額にしわを寄せた。退職の接近が論争に対してより戦闘的でなくさせていた。彼は平静のうちにキャリアを終えることを望んでいた。

「田中？ああ、評判は知っている。一流の厄介者だ。何を望んでいるんだ？」

「どうやらスキャンダルを起こしたいようです。彼は当時の資料を持っており、質問をしています…」

「私が対処しよう。パリの日本大使館に良いコネがある。彼らはこの事件が再び浮上することに何の利益もない。現在フランス日本関係は非常に良好だ、数枚の絵画のためにそれを悪化させることはないだろう。」

数日後、田中幸雄は東京の編集長から電話を受けた。メッセージは明確だった：松方コレクションに関する記事は書くな。「二国間関係」が調査報道より優先される。田中は自分が敏感な琴線に触れたことを理解した。この検閲は彼の決意をかえって強めたが、より好ましい時期まで暴露を延期せざるを得なかった。

鎌倉、一九九〇年

健二は今や二十五歳になっていた。東京大学の法学部を卒業し、ハーバード大学への入学が決まったばかりだった。しかし、アメリカに発つ前に、健康状態が悪化している祖父と最後の会話を交わしたいと思った。

祖父は寝室で床に就いていた。その眼差しは相変わらず鋭く、意志に満ちていた。三郎は自分の力が衰えていくのを感じていたが、この肉体的な衰弱は心理的な解放を伴っていた。死を間近にして、彼はもはや、どんなに苦い真実であろうとも、それを伝えることを恐れなくなっていた。

「健二、こちらへ来なさい」と彼は弱々しい声でささやいた。

若い男は布団のそばにひざまずいた。健二は、すべてを、すぐにでも手に入れたいという年若い者特有の焦りを心に抱いていた。しかし、死にゆく祖父を前にして、彼は忍耐を学んでいた。この節制の教えは、これから迎える戦いにとって貴重なものとなるであろう。

「はい、おじいさん？」

「向こうの金庫に……黒い漆の箱がある。それを持って来てくれ」

健二は言われた通りにした。その箱は重く、飛翔する鶴を表現した金の文様で飾られていた。三郎は困難な様子でそれを開け、書類の束を明らかにした。

「これが、私がコレクションについて救い出すことができたすべてだ。元々の目録、パリの商人たちとの文通、写真……そして何よりも、これだ」

彼はフランス政府の印章が押された公式書類を取り出した。

「一九四四年の管理下に置く行為の書類だ。ポール・デュモンという臨時管理者によって署名されている。この書類は、フランスがコレクションを確実に没収したことを証明している。彼らが何を語ろうとも、この証拠は反駁できないものだ」

「おじいさん、これがあれば、私たちは……」

「待ちなさい。これだけではない」

彼は別の書類の束を取り出した。

「一九五一年と一九五八年の交渉の機密議事録だ。同情的な日本の外交官が六〇年代に私に渡してくれたものだ。これを見れば、フランス人がいかに交渉を操作し、いかに私たちの戦後の弱さにつけ込んで自分たちの盗みを合法化したかがはっきりと分かる」

健二は書類に目を通しながら、呆然としていた。この資料は家族の遺産以上のものを表していた。それは真実の戦いを遂行するための完全な法的武器庫であった。しかし同時に、二十五歳の青年にとっては恐ろしい重荷でもあった。

「これはすごいことです！ 国際的なスキャンダルを起こすことができます！」

「そうかもしれない。しかし効果的でなければならない。フランス人は強力で、この種の論争には慣れている。適切な時機を選ばなければならない。そして何よりも、味方が必要だ。私たちだけでは何もできない」

彼は孫の手を取った。この単純な仕草は、世代間の伝承の重み全てを担っていた。希望、後悔、責任を。

「健二、私はおそらくこの件の終わりを見ることはないだろう。しかし君には時間がある。君には知性がある。君には決意がある。決して諦めないで約束してくれ。幸次郎の記憶に正義をもたらすと約束してくれ」

「お約束します、おじいさん。私は私たちのコレクションを取り戻します。あるいは少なくとも、真実を明るみに出します」

三郎松方は三週間後に死去した。彼の葬儀は、彼の遺志に従って質素に行われた。しかし健二の心には不滅の炎が燃えていた……

パリ、オルセー美術館、一九九三年

ソフィー・マルティネは美術を専攻する若い博士課程の学生で、フランスの美術館コレクションを専門としていた。博士論文のため、ポスト印象派作品の来歴について研究していた。ある日、オルセー美術館のアーカイブを調べていた際、困惑するような異常事態に遭遇した。

ソフィーは中産階級の家庭出身で、先輩たちを動機づける社会的計算とは無縁の、純粋な情熱をもって芸術に取り組んでいた。

「すみません」と彼女は厳格な髪型をした六十代のアーキビストに尋ねた。「この作品群の取得記録を探しているのですが、一九六〇年以降の書類しか見つかりません。原本はどこにありますか？」

アーキビストはリストに目を通した。彼女はこの機関で三十年を過ごし、研究の要求と行政上の制約の間を行き来してきた。この経験が彼女を慎重にしていた。

「ああ、それらの作品ですね…原本の記録は特別保管されています」

「特別保管？なぜですか？」

「機密書類なのです。閲覧には理事会の許可が必要です」

「機密？五十年前の取得記録がなぜ機密なのですか？」

アーキビストは躊躇し、それから身を乗り出して声を潜めた。彼女は長年の慣習主義にもかかわらず、誇るべき職業

意識を保っていた。機関の利益と真実の利益を区別することを知っていた。

「お聞きなさい、お嬢さん、忠告をします。それらの作品については追求しないでください。論文は別のテーマに集中してください。それで面倒を避けることができます」

「面倒？何のことをおっしゃっているのですか？」

アーキビストは周囲を見回し、二人だけであることを確認した。

「これらの記録を調べようとした最後の博士課程の学生は、論文を拒否されました。表向きには『方法論が不十分』という理由で。非公式には…余計なところに首を突っ込んだということです」

「この美術館では特定の主題について積極的な検閲があるとおっしゃっているのですか？」

「私は何も言っていません。友人として忠告しているだけです。それでもそれらの書類を閲覧したいなら、理事会に書面で申請してください。でも拒否されても驚かないでください」

ソフィーは動揺してアーカイブを後にした。知識と文化の神殿で働いていると信じていた彼女は、はるかに暗い現実を発見した。その晩、彼女は指導教官のベルナール・ドリュエスヌ教授に相談した。

ドリュエスヌは一九六八年五月の動乱を理想を保ったまま乗り越えた大学人の一人だった。誠実で、苦い懐疑主義といつか真実が勝利するという残された希望の間で揺れ動いていた。

「ああ、ソフィー、君はフランスの美術館界で最も秘匿された謎の一つに触れてしまった：松方コレクションだ」

「ご存じなのですか？」

「もちろん知っている。専門家は皆知っている。しかしそれはタブーな主題だ。我々はそれについて語らない」

「でもそれは醜聞です！あらゆる学術倫理に反しています！」

教授は疲労の表情で彼女を見た。優秀な学生たちが大学制度の現実に挫折するのを見続けた長年月…

「ソフィー、君は若く、理想主義者だ。それは良いことだ。しかし我々の小さな世界がどう機能するか説明させてもらおう。フランスの美術館は強力な構造体だ。政治的、経済的、メディア的権力と密接な関係を持っている。その慣行に疑問を呈する者は、すぐに疎外される。奨学金なし、職なし、出版なし。要するに、学術的死だ」

「では黙るのですか？嘘を受け入れるのですか？」

「妥協するのだ。回避するのだ。別のことを研究するのだ。あるいは、勇気があるなら、待つのだ。証拠を蓄積し、いつか状況が有利になった時に、攻撃する。しかしその日はまだ来ていない、信じてくれ」

「その日はいつ来るのでしょうか？」

ドリュエスヌは悲しげに微笑んだ。この質問を、彼は長い間自分自身に問いかけていた。

「日本人が圧力をかけるほど経済的に強力になった時だ。国際世論がこれらの問題に敏感になった時だ。この嘘の上にキャリアを築いた古い保守派が死んだ時だ。忍耐だよ、ソフィー。真実は常に最終的に勝利する。しかし時には、時間がかかるのだ」

ボストン、ハーバード・ロー・スクール、一九九五年

健二は博士課程最終学年にいた。彼の論文テーマは「国際法における美術品返還：事例研究」であった。公式には、これは中立的な学術的テーマであった。非公式には、これはフランスに対する戦争兵器であった。

ハーバード大学は健二を変貌させた。内気な学生は、西欧の権力の規範を完璧に習得した熟練の戦略家となっていた。しかしこの変貌には、痛ましい純真さの喪失が伴っていた。彼は感情を隠し、効果を計算し、人間関係を道具化することを学んだ。

彼の指導教授で国際法の権威である専門家のロバート・クロフォード教授は、彼に警告していた。教授はアメリカの大学エリートの一員で、優秀だが臆病で、正義を擁護することよりも自分の評判を保つことを重視していた。

「健二君、君の研究は適切だ。しかし君は薄氷を踏んでいる。フランスはこれらの問題について非常に敏感だ。論文を発表したいなら、表現において非常に慎重でなければならない」

「教授、失礼を承知で申し上げますが、控えめな態度は五十年間、私の家族を何処にも導きませんでした」

「どうするつもりかね？」

「間接的なアプローチです。松方コレクションについてフランスを正面から攻撃する代わりに、判例を確立します。他の国々が戦争中に没収された作品をどのように返還したかを示すのです」

クロフォードは微笑み、学生の巧妙さに感心した。

「それは良い。しかし時間がかかるだろう」

「時間はあります。そして何より、祖父にはなかったものを私は持っています。国際的なネットワークへのアクセスです。ハーバードは、世界全体への通行証です。ここの卒業生はどこにでもあります：法律事務所にも、メディアにも……」

「ネットワークを作りたいということかね？」

「はい。同情者、潜在的な同盟者のネットワークです。時が来たとき、我々の大義を伝えてくれる人々です」

続く数ヶ月間、健二は決意を持って自分の戦略を実行した。彼は文化遺産法に関するあらゆる学会に参加し、人脈を築き、将来のキャンペーンの種を慎重に蒔いた。彼はジャーナリスト、弁護士、学者と出会った。それぞれに、彼は松方コレクションの件について語り、強要することなく、彼らの好奇心を喚起するのに十分なだけ話した。

ある夜、ニューヨークでの講演会で、彼はホロコースト中に略奪された作品の返還を専門とする弁護士サラ・フィールドマンと知り合った。

サラは生存者特有の罪悪感を抱えており、それが修復的正義への闘志的エネルギーに変換されていた。彼女は健二の中に、同じ継承された傷、自分を駆り立てる同じ償いへの渴きを即座に認識した。

「あなたは私たちの闘いを思い出させてくれます」と、健二が松方事件について説明した後、彼女は言った。「違いは、私たちには世論の同情があることです。ホロコーストについては、誰もが不正義を認識します。しかし没収された日本のコレクションは……ご存知でしょう、私にはアメリカのメディアに人脈があります。お望みなら、この話を流し始めることができます。今のところは慎重に。ただ地ならしをするためにです」

「ありがとうございます、あなたの助けをお受けします」
この同盟は、松方の戦いにおける新たな段階の始まりを示していた。

パリ、フランス美術館管理局、千九百九十七年

フランス美術館管理局の木材張りの局長室で、新任局長ルイ・モニエは顧問たちの報告に注意深く耳を傾けていた。彼は近代化の野心を抱いてテュイリエの後任となったが、前任者と同じジレンマに直面していた。彼の傍らでは、省次官補のフランソワーズ・アルマンが熱心にメモを取っていた。

モニエは現代の経営管理手法で鍛えられた高級官僚の一人だったが、過去から受け継いだ重い慣性に立ち向かわねばならなかった。彼は透明性への意志と同業者組合的な反射的行動の間で、表向きの現代性と自覚した保守主義の間で揺れ動いていた。

「我々には潜在的な問題があります。我々のメディア監視サービスが、英語圏の報道における『松方コレクション』という話題の勢力拡大を察知しました。この数ヶ月間、アメリカとイギリスの専門誌に複数の記事が掲載されています」

「それは何のことですか？」と、このポストに就任したばかりのフランソワーズ・アルマンが尋ねた。

モニエが発言した。

「これは古い案件です、事務次官。戦争中に没収され、我が国の国立コレクションに統合された日本のコレクションです。法的には、すべて規則に従っています。千九百五十

一年のサンフランシスコ条約が我々にすべての権利を与えています。しかし…」

「しかし？」

「しかし倫理的・メディア的観点から言えば、より複雑です。この件が拡大すれば、ナチスの金を巡るスイスの美術館と同じ状況に陥る危険があります。我々のイメージにとって破滅的です。大臣官房が懸念しています」

中央行政から最近やって来たフランソワーズ・アルマンは、国立行政学院では教えられなかったこうしたグレーゾーンを発見していた。権力の現実へのこの入門は、彼女が認めたがるよりも彼女を動揺させていた。

「我々の選択肢は何ですか？」

「第一の選択肢。何もせずに事態が収束することを望む。危険ですが、可能です。第二の選択肢。先手を打つ。この件について広報し、引き受け、文脈を説明する。第三の選択肢。日本人と慎重に交渉する。残りについての彼らの沈黙と引き換えに、象徴的な作品をいくつか返還する」

「あなたの提言は何ですか？」

モニエは躊躇した。

「個人的には、第三の選択肢に傾きます。しかしこれは我々のレベルを超える決定です。官房の承認が必要でしょう」

「現在の相続人は誰ですか？彼らは訴訟好きですか？」

「主要な相続人は松方健二という名前で、松方幸次郎の曾孫です。ハーバード大学で学んだ弁護士で、現在東京の大手法律事務所のパートナーです。我々の情報によると、彼が静かなメディア・キャンペーンを画策しようとしているのは彼です」

「彼と会うことはできますか？」

「試すことはできます。しかし彼について我々が知っていることから言えば、彼は屑では満足しないでしょう。すべてを取り戻したいのです。あるいは少なくとも損害の公的な認定を」

「まずこのコレクションで我々が所有しているものを評価することから始めましょう。作品数、それらの価値、我々の美術館にとっての重要性。その後、慎重な会合が可能かどうか確認してください。しかし何よりも、守勢の広報計画を準備してください。この件が爆発したら、我々は反撃する準備ができていなければなりません。私は官房に報告します」

「承知しました。しかしこの案件はより大きな問題を明らかにしています。我々の美術館は出所の疑わしい作品で溢れています。もし松方の件で譲歩すれば、我々は誰もが突入してくる裂け目を自ら作ることになります」

「分かっています。しかし我々は千九百九十七年にいるのであって、千九百五十一年ではありません。世界は変わりました。我々は適応するか、甘受するかです。大臣はそれを自覚しています」

東京、山本・アソシエイツ法律事務所、一九九八年

日本で最も名高い法律事務所の一つでパートナーとなった松方健二は、会議を招集していた。テーブルを囲んで、二人の若い日本人弁護士、美術専門家、そしてニューヨークから特別に來たサラ・フィールドマンで構成された彼のチームが座っていた。

健二の変貌は目を見張るものがあつた。情熱的な青年が、熟練した法律家になっていたのである。

「現状はどうなっている？」と健二が尋ねた。

美術専門家の山田教授が口を開いた。

「あなたの祖父の資料に基づいて、コレクションの完全な目録を完成させました」

「推定価格は？」

「現在の市場価格で、フランスにまだある作品は八億ドルから十二億ドルの価値があります。『アルルの寝室』だけで一億ドル以上と推定されます」

サラ・フィールドマンが割って入った。

「これは単にお金の問題ではありません。略奪された先見の明を持つ人物の文化的遺産なのです」

「その通りです」と健二は同意した。「前面に押し出すべきはその観点です。金銭的な側面ではなく、道徳的、文化的、人間的な側面を」

若い弁護士の一人、田中が、経験不足が与える大胆さで質問した。

「先生、サンフランシスコ条約を研究しました。第十四条はフランス側に理があるように思えます。この法的障害をどう回避するのでしょうか？」

健二は微笑んだ。この問題について、彼はハーバード大学で何年もかけて取り組み、絶えず論証を洗練させてきたのだ。

「よく考えてきました。条約そのものを攻撃することはできません、それは確かです。しかし、フランスが条約の許可していた範囲を超えたと論証することはできます。条約は『戦争賠償』について述べていました。ところが、松方コレクションは戦争物資ではありませんでした。紛争のずっと以前に、正当な購入によって形成された私的なコレク

ションでした。フランスにはそれを『賠償』とみなす権利は一切なかったのです」

「素晴らしい！」とサラが叫んだ。「条約に異議を申し立てるのではなく、その濫用的な適用に異議を申し立てるのですね」

「そして他にもあります。この文書を見てください」

彼は一九四六年付けの公式書簡をスクリーンに映し出した。

「これは私の祖父に宛てたフランス政府からの手紙で、コレクションが『一時的保護下』に置かれていることを認めています。この手紙は、フランスでさえ当初はコレクションが返還されるべきだと認識していたことを証明しています」

「では、なぜ返還されなかったのですか？」と田中が尋ねた。

「機会主義です。一九四六年から一九五一年の間に、フランスは自分たちが保有しているものの価値に気づき、立場を変えたのです。これは悪意に満ちた背信行為です」

山田教授が付け加えた。

「ケ・ドルセーのアーカイブでも興味深いものを発見しました。フランスの外交官たちが松方コレクションの押収は『法的には脆弱』だが『政治的には好都合』だと認める内部メモです。彼らは盗んでいることを知っていたのに、それでも実行したのです」

「素晴らしい」と健二は結論づけた。「我々には証拠があります。あとは攻撃する適切な時機を待つのみです。サラ、今後についてはどう思いますか？」

サラはしばらく考えた。

「メディアによる圧力を構築し続ける必要があります。『ニューヨーク・タイムズ』に大きな記事に非常に興味を持つであろう連絡先があります。しかし、きっかけとなる出来事も必要です。フランス側に反応を強いる何か」

パリ、オルセー美術館、二〇〇〇年

十一月のある朝のことだった。美術館が開館したばかりで、最初の来館者たちが流れ込み始めていた。その中に、黒いオーバーコートを着た上品な来館者が、決然とした足取りで進んでいた。

松方健二は『アルルの寝室』の前で立ち止まった。生涯で初めて、曾祖父が所有していた絵画を自分の目で見たのだった。感動が彼を圧倒した。鮮やかな黄色、歪んだ遠近法、この空っぽの部屋から漂う孤独感…これらすべては東京の美術館にあるべきで、日本国民がアクセスできるところにあるべきだった。

彼はそこに、長い間じっと立っていた。

「感動的ですね、そうではありませんか？」

健二は振り返った。一人の上品な女性が、微かな笑みを浮かべて彼を見ていた。彼は即座にフランソワーズ・カシャン、美術館の元館長であることを認識した。

「カシャン館長でいらっしゃいますね？」

「私をご存知なのですか？」

「あなたが誰であるかは存じ上げています。あなたも私が誰であるかご存知でしょうが」

カシャンの笑みが消えた。年齢と退職が彼女をそれほど闘争的でなくしていた。

「松方さん。いつかあなたがいらっしやると思っておりました」

「そして夫人は、私の家族から盗まれたこの絵画の前に立つ私を見て、何をお感じになりますか？」

カシャンは身を固くしたが、新たな脆弱性が彼女の眼差しに透けて見えた。

「『盗まれた』というのは過剰な表現です。この作品は合法的に…」

「公式の弁明は結構です」健二が遮った。「私たちは二人とも何が起こったかを知っています。私の質問は：あなたはそれとどう向き合っているのですか？」

カシャンはしばらく沈黙を保ち、それからより柔らかい声で答えた。死の接近が彼女の道徳的良心を研ぎ澄ましていた。

「松方さん、私は人生を芸術に捧げてまいりました。それを保存し、展示し、愛されるようにすることに。これらの作品は、その出所がどうであれ、フランス文化遺産の不可欠な部分です。何百万人もの人々がそれらを見て、研究し、愛してきました。それもまた一つの正義の形ではないでしょうか？」

「不正義の上に築かれた正義は不正義のままです、夫人。私の曾祖父は日本に美術館を創設したかったのです。あなたはその夢を破壊したのです」

「私は何も破壊していません。私のずっと前に作られた状況を受け継いだだけです」

「真の所有者への言及をすべて消去することによって？」
カシャンは当惑したように見える誠実さを示した。

「それは…指令でした。私は同意していませんでしたが…」

「しかしあなたはそれを実行した。他の皆と同じように。臆病さからか、利益のためか、どちらでもかまいません。あなたたちは皆共犯者です」

彼は再び絵画の方を向いた。

「いつの日か、夫人、このファン・ゴッホは日本に戻るでしょう。私が生きている間ではないかもしれませんが、いつか必ず」

「おそらくそうでしょう、松方さん。しかしその間、ここにいます。個人の金庫にあるよりも良いではありませんか？」

「偽りのジレンマです、夫人。それは東京の美術館にあることもでき、パリに来る手段を決して持たないであろう日本人たちがアクセスできる場所にあることもできました。しかし、あなたのヨーロッパ中心主義的な視点では、それを考えることができないのですね？」

これらの言葉とともに、彼は踵を返し立ち去った。フランソワーズ・カシャンを絵画の前に一人残して。何年かぶりに初めて、彼女は罪悪感に近い何かを感じた。被害者の一人とのこの直接的な対峙が彼女の道徳的防御を亀裂させていた。

その夜、彼女はミシェル・ラクロットに電話をかけた。

「ミシェル、今朝美術館で松方健二に会いました」

「それで？」

「彼は諦めないでしょう、ミシェル。それは彼にとって名誉の問題です。正義の問題なのです。彼は最後まで行くでしょう」

「何を提案するのですか？」

「おそらく…私たちの立場を再考する時が来たのかもしれませんが。何らかの行動を起こす。スキャンダルが爆発する前に」

「あなたは年齢とともに感傷的になっています、フランソワーズ。私たちは何も返しません。これらの作品はフランスのものです。議論の余地はありません」

カシャンは電話を切った、動揺して。彼女は疑っていた。この長年にわたって、彼らは正しい選択をしたのだろうか？それとも合法的な取得に偽装された犯罪の守護者にすぎなかったのだろうか？

時は過ぎた。何も動かなかった。慎重だが効果的な圧力が松方事件を蓋の下に保っていた。少しずつ、しかし松方健二の激しい決意は容赦なく鈍っていった。何年間もの闘争の後、松方健二は、心の中で死を抱えながら、ついに断念するだろう、その作業の巨大さに疲れ果てて。彼は祖父に誓った誓約を果たすことができなかった：コレクションがついに日本に戻るよう全精力を捧げるという誓約を。時代はまだ略奪の問題が主要な社会問題となるほど成熟していなかった…二〇二〇年代まで待つ必要があるだろう、この件が再び動き出すために…ついに。

第7章：闘いの復活

セレ、NGO「帰還と返還」事務所、2024年8月

「帰還と返還」の事務所内では、地中海の甘美な香りが漂っていた。ピエール・ベルティエは、盗まれたものを取り戻すという一行で表現できる目的を掲げて、二〇一九年にこのNGOを設立した。

時の経過とともに、彼のチームは手法を洗練させていった。科学委員会は充実していた。美術専門家、弁護士、作品来歴の専門家たち……

ピエール・ベルティエは、改宗者の情熱をもってこの小さな世界を支配していた。定年退職したばかりの大学教授である彼は、授業を自分の個人的な聖戦と交換し、それが初めて完全に存在している実感を与えてくれた。

彼は生きた逆説だった。一方では、彼の知的厳密さと労働能力は尊敬を集めていた。彼は飽くことのない好奇心に突き動かされて夜通し資料を精査することができ、その好奇心が彼を自分の専門分野で輝かせていた。彼の驚異的な記憶力と複雑な情報の塊を総合する才能は、彼を手強い敵にしていた。しかし、この同じ激しさが欠陥を隠していた。強迫観念に転じる完璧主義、自分の見解を受け入れない者に対する本能的な不信、そして何よりも自分だけが真実の持ち主だと考える傾向。

ベルティエは人間関係に表れる一種の知的傲慢さを培っていた。彼は人の話をよく聞かず、しばしば話を遮り、誰かが即座に自分の推論についてこられないと目に見える苛立ちを示した。彼の協力者たちは彼の能力は評価していたが、何か細部を見落とすと彼の癪癢を恐れていた。彼は自分

の優越性の証拠を収集するかのよう、悪意を隠そうともせず、他者の誤りを訂正した。逆説的に、日常的に彼を厄介にするこの同じ要求の高さが、また彼の力でもあった。何も彼の目を逃れることはなく、いかなる公式の嘘も彼の体系的な分析に抵抗することはできなかった。

彼のオフィスは最終攻撃を準備する軍人のそれに似ていた。壁には色とりどりのピンが刺された世界地図。まだ解決されていないナチの略奪品については赤、植民地主義者が荷物に入れて持ち去ったものについては青、国家による没収については緑、大博物館の「疑わしい取得」については黄色。めまいを起こさせる世界的略奪の地理学。

机の上には、丁寧にラベルが貼られた書類の山。国際法の条約が彼の手で注釈が書き込まれた展覧会カタログと隣り合っていた。世界中の研究者との彼の通信は、彼が辛抱強く自分の網を張り巡らせていたことを証明していた。壁には『アルルの寝室』の複製が彼の研究を見守っているようだった。各書類の背後には男性、女性、そして荒らされた美があることを日々思い起こさせるもの。ベルティエはしばしばこの絵を眺め、そこから彼の個人的な孤独を補償する一種の慰めを汲み取っていた。なぜなら彼の闘いは少しずつ彼を正常な社会生活から切り離していたからである。

秘書がノックした時、ベルティエは顔を上げた。創設当初から採用された彼女は、報われない大義への情熱を共有していた。彼は彼女の揺るぎない忠誠心を評価していた。

「ベルティエさん、東京の萩生田太郎さんがお電話です。松方事件についてです」

この電話を、彼は一週間待っていた。焦りと不安の入り混じった感情が彼を襲った。

「素晴らしい、つないでくれ」

ベルティエは受話器を取った。歴史学博士で現代日本文化の著名な専門家である萩生田は、忘れることを拒む研究者たちのネットワークの一員だった。問題は通常の相談を大きく超えていた。

「萩生田博士、こんにちは。お電話をいただき、ありがとうございます」

返ってきた声には彼の挫折の重みが込められていた。衛星通信のわずかな遅れも何も和らげなかった。

「ベルティエさん、お礼を申し上げるのは私の方です。略奪に関するあなたの研究を、私たちはここでよく知っております。あなたの闘いを非常な関心と……希望をもって、と申し上げなければなりません、注視しております」

萩生田の語調はトラウマの大きさを裏切っていた。松方は単にカタログの中の名前ではなかった。それは閉じることを拒む国民的な傷だった。

「コレクションについて、私は真実を申し上げなければなりません。それは私たちの開いた傷です。八十年経った今でも、それは私たちを苦しめています。松方幸次郎は天才であり、私たちの文化を近づけたいと願った先見の明ある人でした。フランス人が彼にしたことは……」

彼の声がわずかに震えた。

「……私たちはそれを背中への短刀の一撃として体験しました」

法的側面の背後には破綻した運命が隠れていた。松方は橋を架けたかったのに、彼の石は盗まれた。

「感情的な側面は理解します。しかし具体的な要素が必要です。そうでなければ、法廷で空論を弄するだけになります」

ベルティエは痛い経験から、憤慨だけでは博物館に対しては不十分だということを学んでいた。堅実で、検証可能で、議論の余地のないものが必要だった。失敗した闘いの年月によって研ぎ澄まされた彼の自然な不信が、この厳密さを課していた。

「あなたの国立公文書館には正確に何が含まれているのでしょうか？未発表の原文書でしょうか？そして何より一重要な質問ですが一相続人を見つけることはできましたか？」

東京からため息が聞こえてきた。不正が明白であっても、その修復は時の経過という現実につづかっていた。

「そこが悲劇なのです、ベルティエさん。松方家は……雲散霧消してしまいました。二十世紀の災害によって四方八方に散らされてしまったのです」

続いた説明は運命のあらゆる残酷さを明らかにした。太平洋戦争、一九四五年の敗戦、七年間続いたアメリカ占領、社会的激変。すべてが日本の家族を風に舞う枯葉のように散らすことに貢献した。

「何人かの子孫はまだ日本に住んでいますが、異なる県にです。妻たちは姓を変えており、それがすべてを複雑にしています。他の者たちは一九五〇年代から六〇年代にかけて、国がまだ膝をついていた頃にアメリカに逃れました。ヨーロッパ、フランスやドイツにもいます。しかし最悪な

のは、ベルティエさん、多くの者が自分たちに何かの権利があることすら知らないということです」

状況は、現代日本のトラウマによって生まれた非自発的離散のそれだった。家族は必要に迫られて散らばり、自分たちの世界の瓦礫の中でできる限り生き残っていた。

「自然な無知ですか、それとも意図的な健忘症ですか？」とベルティエは尋ねた。彼の好奇心が彼の同情心を上回っていた。

「残念ながら両方です。戦争が家族の絆を断ち切った、これは事実です。アメリカでは、何人かの子孫がよく特定されており、一九九〇年代末頃に動員されました。特に現在日本に住む松方健二という人物がいますが、この件ではもはや活動していないようです。しかし彼はメディアに訴え、講演を行い、記事を書き、天地をひっくり返すほどの活動をしていました……しかし十五年間、何もありません。他の多くの者も忘れることを選びました。ページをめくり、未来に集中し、背負うには重すぎる過去を埋めてしまったのです。ご存知のように、一九四五年以降、生き残ることが要求することよりも重要だったのです」

ベルティエはこのメカニズムを知っていた。他の略奪事件で観察していた。被害者は痛すぎる記憶との対峙よりも健忘症を好んだ。略奪者にとって都合の良い否認。この現実には彼を苛立たせ、同時に悲しませた—最小の不正も忘れることができなかった彼にとって。

「具体的に、これはすべてを阻害しますか？」

「必ずしもそうではありませんが、物事を複雑にします。自分の権利を知らない人々の名前で、どうやって要求する

のでしょうか？自分に遺産があることすら知らない相続人を、どうやって動員するのでしょうか？フランス当局は『誰も何も要求していない、だからすべて順調だ』と言うことができます」

「私には手がかりがあるかもしれませんが。フランス法において、そして失礼ながら専門用語になりますが、『事務管理』という概念があります。民法第一三〇一条以下です」

ローマ法から受け継がれ、二世紀の判例によって洗練されたこの概念は、誰かが他人のために、その人の知らないうちであっても、有益に行動することを可能にする。相続人の離散という障害を巧みに回避できるメカニズム。要するに、委任なしに行動することは可能だが、代表される者の利益のためでなければならない。松方の子孫の利益になることを証明できれば、たとえ彼らがそれを知らなくても……これは理論的に私のNGOが相続人の名前で法的に行動することを可能にするかもしれません。彼らの明示的な同意なしでも、その行動が彼らにとって有用性の性格を示す限り、とベルティエは説明した。

この提案は思慮深い沈黙で迎えられた。萩生田はついに、声に明らかな好奇心を込めて再開した。

「そのアプローチは興味深い、それは認めます。しかし個人的に私を悩ませている質問をさせていただきたいのですが……」

「お聞きします」

「相続人たちが本当にこれほど痛ましい事件を公に蘇らせることを望んでいるかどうか、確信をお持ちでしょうか？八十年が経ったのです、ベルティエさん。多くの者が人生

をやり直し、他の計画を立てました。なぜこのようなことをすべて蒸し返すのでしょうか？」

ベルティエは数瞬の考慮の時間を取り、自分の言葉の重みを測った。この質問は彼自身の動機に立ち返らせた。彼は被害者のために行動しているのか、それとも個人的な正義への欲求を満たすためなのか？境界線はしばしば曖昧なままだった。

「あなたの質問は被害者への敬意を示しています。それは非常に名誉なことです。しかしご覧ください……相続人の個人的利益を超えて、この件は松方家の個別ケースを大きく超える問題を提起しているのです。古いものであっても、国家による略奪行為を道徳的に処罰されずに放置できるのでしょうか？組織的忘却と時の経過が最も露骨な文化的犯罪を消去することを受け入れられるのでしょうか？記憶の義務、真実を回復する義務はないのでしょうか？被害者の記憶を讃え、そのような不正の再発を防ぐためだけでも……問題は松方家の枠組みを無限に超えています。それは国際文化正義の未来を左右するのです」

萩生田はゆっくりと頷いた。

「あなたの観点は私を感動させます。不正は日本で私たちを悩ませ続けている、ご存知のように。それは決して閉じることのない集合的な傷の一部なのです。私たちの知識人、研究者たちは今でも定期的にそれについて語っています」

ベルティエは心臓が高鳴るのを感じた。この日本のトラウマの次元の認識が、彼のアプローチにおいて彼を安心させた。

「しかし具体的に」と萩生田は続けた「どのように進められるおつもりでしょうか？フランス政府はこれほど重要な作品を簡単には手放さないでしょう。これらの絵画は貴国の国立博物館の宝石の一部であり、多くの来館者を引きつけています。経済的・文化的な問題は相当なものです、そうではありませんか？」

この異議は常識的なものだった。そして恐ろしく正当だった。

「私はまず、管轄のフランスの法廷に直接訴えることを真剣に検討しました。それは最も自然な道であり、古典的学説が推奨するものでした」

「そしてこのアプローチを断念されたのですか？」

「残念ながら、そうです。具体的で……何と言いましょるか……落胆させる理由のためです」

ベルティエは、フランスの司法が国家的略奪を争う行動に対して体系的な敵意を実践していることを発見していた。

「フランス国務院での私の最近の経験は、この道が袋小路であるだけでなく、抑制的な金銭的制裁にさえ私をさらすであろうことを確信させました。裁判所は国家遺産に関するこの種の事件において、私の組織の行動する利益を認めることを拒否している、と彼は説明した」

「具体的な例を挙げていただけますか？」

ベルティエは研究者が自分の主張を文書化することに慣れている精度で書類を開いた。しかし、また門前払いを食わされた者の抑えた怒りもあった。これらの失敗は法学者としての彼のプライドを傷つけていた。

「私は最近、比較可能な二つの事件でフランス国務院に訴えました。一つ目は、一八六〇年のフランス・イギリス軍による北京園明園の略奪に関するもので、二〇二二年十一月二十三日の判決で私の申し立ては受理されませんでした」

「どのような理由でですか？」

「ああ、理由です！」とベルティエは乾いた笑いで答えた。「戦争作戦の枠内で取得された財産の国立博物館目録への登録に異議を申し立てるためには『正当な所有者であると考えた人々』のみが行動する利益を持つという断固とした理由によってです。ニュアンスをお分かりいただけますか？被害者が個人的に現れることを要求しながら、大多数が自分の権利を知らないことを十分承知で、フランスの法廷は略奪の免責を静かに組織しているのです」

この定式化は、厄介な要求から身を守るためのフランス制度のあらゆる人為性を明らかにしていた。

「第二の事件について」ベルティエは続けた。「一五一九年のフランソワ一世によるモナ・リザの肖像画の取得に関して、国務院は二〇二四年五月一四日のさらに厳しい判決により、その判例を確認しました」

「どういう意味でより厳しいのですか？」

憤慨が彼の意志に反して爆発した。

「裁判所は立場を再確認しただけでなく、私の組織は『事務管理の資格でこれらの人々を代表する使命があると主張することはできない』と明確にしました。そして驚くべきことに…濫用的訴訟として三千ユーロの罰金を科したのです！」

「罰金ですって！」萩生田は叫んだ。「それは示唆的ですね！」

「罰金は公然とした思想的敵意の証です。国務院は、フランスによる略奪に異議を申し立てることは権利の濫用に当たると考えているのです」

表向きの公正さとは程遠く、裁判所は関係する利益に応じて二重基準の司法を実践していた。

「それでは、どのような代替案をお考えですか？」

ベルティエは「国際戦略」と記された書類入れを開いた。

「国内救済手段の完全な閉鎖に直面して、我々は紛争を直接、管轄権を有する国際機関に持ち込む決定を下しました。より具体的には、ジュネーブの国連人権理事会にです」

このアプローチにはいくつかの決定的な利点があり、ベルティエはそれを理解していた。まず、議論をフランスの国益の領域ではなく、基本的人権の領域に置くことができる。次に、フランス司法の行き詰まりを回避できる。最後に、この案件に国際的な注目を集めることができる。

「具体的にはどのような根拠に依拠するおつもりですか？」萩生田は尋ねた。

ベルティエは、夜間の研究で豊富な注釈を付けた世界人権宣言の自分の写しを開いた。彼は主題の細部まで習得しているこの感覚を愛していた。

「論証は基本的人権の二つの相互補完的な侵害に基づきます。まず、『すべて人は、財産を所有する権利を有する』そして『何人も、恣意的に財産を奪われることはない』と定める世界人権宣言第十七条の侵害です」

「第二の侵害は？」

「公正な裁判を受ける権利を神聖なものとする世界人権宣言第十条と市民的及び政治的権利に関する国際規約第十四条の侵害です。フランス国務院がこの種の事件を十分な理由付けなしに実質的に審理することを拒否し、抑止的制裁を科すことは、この基本的権利への明白な侵害を構成します」

「論証は確固たるもののようですね」萩生田は承認した。

「文化的略奪の被害者への効果的な司法へのアクセスを拒否することで」ベルティエは結論した。「フランスは国際的義務を怠り、自らの共和制の原則を裏切っているのです。それほど単純なことです」

「事実そのものについて、略奪に関するあなたの分析はいかがですか？」

この質問により、ベルティエは自分の調査の成果を展開することができた。数か月間の必死の研究、アーカイブで過ごした白夜。

「略奪は三つの連続した行為に基づいており、すべてが重大な違法性に汚染されています。しかし巧妙に隠蔽されている、もちろん」

「これら三つの行為を詳しく説明していただけますか？」ベルティエは松方コレクションの略奪に至った全過程を正確に説明した。

会話は続いた。萩生田は松方幸次郎の人柄とそのコレクション構成の事情について詳細を提供し、一方ベルティエは自分のアプローチを詳細に展開した。すべてが二人を分けていたが、同じ正義への渴望が彼らを結び付けていた。

「萩生田博士」ベルティエは結論した。「長期にわたり、費用がかかり、困難に満ちているが…絶対に必要な事業において、あなたの道徳的・学術的支援は非常に重要です」

「ベルティエさん、あなたは私の完全な支援、そして私の日本の同僚たちの支援を頼りにすることができます。この大義は我々の心に深く響き、美術作品の返還以上のものを象徴しています。我々の尊厳がかかっているのです」

彼らが電話を切ったとき、フランスの教授は国際機関に事案を持ち込む決定について確信を得ていた。この日本からの支援は彼にかけがえのない追加の正当性を与えた。そして何よりも、フランス行政という風車との闘いで、もはや一人ではないと感じた。この国際連帯は、彼が認めたがる以上に彼を感動させた。

その日の午後、ベルティエはベアトリス・クライン弁護士を迎えた。国際私法問題を専門とする弁護士であった。彼は彼女の中で、専門的知識と実用主義のこの組み合わせを評価していた-彼女の率直さが彼を動揺させることがあったとしても。

「ベルティエさん」彼女は言った。「あなたの秘書が、文化的略奪の訴訟について私の意見をお求めになりたいと説明してくれました」

彼女は鞆からノートを取り出した。専門家の機械的な動作である。

「その主題は興味深いです。私は最近、ヨーロッパの機関でいくつかの類似した事件を扱いました。文化的権利への侵害、それが流行になっています」

ベルティエは一抹の不安を抱きながら、彼女に書類を手渡した。彼は自分の仕事に対する専門家の判断を恐れていた。

「クライン弁護士、お時間を作っていただき、ありがとうございます。人権理事会に持ち込みたい事件は簡単ではありません」

彼は困難を列挙した。

「フランス憲法、国際公法、行政法、財産権の民法があります…」

クライン弁護士は最初の書類に目を通した。それから、ベテラン弁護士が問題を嗅ぎ取ったときに見せる表情で目を上げた。

「書類は十分に組み立てられているようです。しかし詳細に入る前に、厄介な質問があります」

「どのような？」

「フランスですべての救済手段を尽くされましたか？国際機関を申し立てるための第一のルールですから」

彼女の口調は教育的になっていた。少し焦り過ぎた若い同僚たちに対してとるであろう口調だった。

「弁護士、それがまさに問題なのです。公式には、松方の件で国務院に申し立てを行っていません。しかし、そのような救済が罰金で高くつく以外は何の役にも立たないと考えられる十分な理由があります。判例は今や明確です」

ベルティエは自分の費用で、フランス司法が敏感な遺産に関して口を閉ざすという慣行を発見していた。不正義を修正するためであっても。この現実を彼をなお憤慨させた。

「もう少し詳しく説明していただけますか？国内救済手段の尽きは、フランス政府があなたに対する意見書で最初に出してくる論点ですから」クライン弁護士は尋ねた。

ベルティエはフランス最高行政機関との紛争についていつもの説明を繰り返した。彼は二つの判決の最も興味深い部分を読み返した。

クライン弁護士は今読まれた判決の部分を分析した。彼女は国際基準に照らしてこれらの決定の異常性をすぐに測った。

「判例は厳しい、それは控えめな表現です。罰金は正当化されないように思われます。国務院は、フランス法で十分に確立された慣行である事務管理の資格であっても、あなたの当事者適格を断固として認めることを拒否しています。これらの条件下では、松方の件で新たな救済が失敗に終わり、おそらくさらに重い新たな制裁にさらされたであろうと考えることは合理的です」

国際訴訟専門家による確認がベルティエを安心させた。彼は執拗に訴訟を続ける頑固な原告ではなく、フランス司法の組織的敵意から論理的結論を導き出す実用主義者だった。この認識は彼の選択について安心させた。

「それが私の考えです。国際人権判例は、国内救済手段の尽きの義務は、これらの救済が明らかに効果的でない場合や、申立人を不相応なリスクにさらす場合には適用されないと認めています」

「よろしい。前提問題は解決されたようです」クライン弁護士は同意した。「実質に移りましょう。国際文書のどの条項に基づいて通報を根拠付けるおつもりですか？」

彼女は興味深く身を乗り出した。根拠の選択は理事会での成功の機会を大きく左右した。クラインはこの種の知的挑戦を評価していた。

ベルティエは萩生田博士に説明したことを繰り返した。司法拒否を援用することで、ベルティエは自分の立場の見か

け上の弱点-松方事件での直接的救済の欠如-をフランス司法制度そのものに対する実質的論点に変換した。

「あなたの論証は十分に構築されているようです。あなたが援用する侵害は特徴付けられ、文書化されています。しかし、フランス政府が確実に提起するであろう実際の困難を強調したいと思います。松方の相続人の名において行動するあなたの資格をどのように正当化するおつもりですか？理事会は被害者の効果的代理に非常に注意を払います」この質問は全事業のアキレス腱に触れた。被害者の明確な代理なしには、最も優秀な論証でさえ崩壊する危険があった。

「そこで事務管理が中心的に介入します」ベルティエは答えた。

「続けてください」

ベルティエはこの具体的点について萩生田博士に説明したのと同じ論点を展開した。

「この問題であなたの論証が成り立つための条件は何ですか？」

ベルティエは自分の推論を詳細に展開した。

「第一に、自分のためではなく他人のために行動する意図。第二に、受益者のための行動の客観的有用性。第三に、相続人の既知の反対の不存在」

「そしてこれら三つの条件が満たされていると考えますか？」

「完全に」ベルティエは断言した。「私の通報において、すべての法的条件が満たされていることを証明します。第一に、他人のために行動する意図は、博物館コレクションの適法性を監視し、略奪された財産の返還に努めるという

私のNGOの定款上の目的から明らかに生じます。第二に、行動の有用性は、重大な不正義を修正することであるため明白です」

「第三の条件は？」

「第三に、相続人の既知の反対は存在せず、彼らは今日まで全員が正式に特定されているわけでもありません」

反対の不在は暗黙の合意からではなく、歴史によって組織された分散の犠牲者でもある権利者の無知から生じていた。ベルティエが強みに変えた逆説である。

クライン弁護士は納得したようであったが、実際の成功の機会について懐疑的な部分が残っていた。

「このアプローチは独創的で、フランス民法の広範な知識を証明しています。しかもこの種の行動に正確に対応するあなたのNGOの明示的な定款上の目的を援用することができます。事務管理は理事会によってあなたの当事者適格の有効な根拠として認められる可能性があります。しかし具体的に、通報をどのように構成し、起草するおつもりですか？」

弁護士は、最良の大義でも起草の欠陥や不器用さで失敗する可能性があることを知っていた。

ベルティエは準備し始めた結論書を彼女に見せた。異なる部分に組織され、相互参照システムを持つその文書は、綿密な準備を証明していた。

「約六十ページの完全な通報草案を起草しました。論証は国際法律家を説得するために構想された論理的計画に従っています」

「構造を要約していただけますか？」

「もちろんです。まず必要なすべてのアーカイブ参照とともに、略奪とその仕組みの詳細で時系列の事実説明。次に関連する国際判例の引用とともに、特徴付けられた侵害の分析。最後に修復要求の詳細な提示」

各要素は他の要素と論理的に結合して、一貫した説得力のある全体を形成していた。

「あなたの具体的な要求は何ですか？」

ベルティエは書類の最後の部分を開いた。

「理事会が松方相続人の権利侵害を公式に確認し、フランス共和国に対して略奪された作品の即座かつ完全な返還を明確に勧告することを求めます」

「これらの勧告に拘束力がありますか？」 「いいえ、国連の勧告は厳密な意味では拘束力はありませんが、特に国連から発せられるものには相当な道徳的力があります。」 法的拘束力でフランスを強制することができないベルティエは、国際的圧力により勝利を得ることに賭けていた。この間接的アプローチは彼の人格に対応していた。正面から立ち向かうより回避する方を選ぶのだ。

クライン弁護士は、この方法の実際の効果に留保を抱きながらも、承認して領いた。

「国連による公式な非難は強い道徳的制約を生み出すでしょう。」 「フランス政府が信頼性を失うことなく国連の非難を公然と無視することは困難でしょう。」 「それがあなたの賭けですね。フランスは世界中の世論とメディアの前で、公式に非難された略奪の維持を正当化することはできないでしょう。」

二人の法律家の間に知的な共謀関係が築かれた。クライン弁護士はマツカタ・コレクションの事例を大きく超えるこ

の事業の論理を理解していた。彼女はそれを純真だと判断しながらも、この決意を賞賛していた。

彼らの議論はさらに続いた。弁護士は人権理事会での手続きについて詳細を提供し、いくつかの編集上の改善を提案し、避けるべき罣について警告した。彼女の経験は国連の官僚制度の迷宮を航行するのに貴重であることが分かった。

。

「ベルティエさん」と彼女は結論づけた。「これらすべてが驚くほどよく準備されているように思われます。しかし、フランス政府があなたの通報に対抗するために最高の法律家とあらゆる手段を動員することを決して忘れてはいけません。フランスはこれほど重大な告発を反応せずに見過ごすことはないでしょう。」

闘いは厳しく不平等なものになることが予想された。彼女が十八時頃に別れを告げた時、ベルティエは通報を最終化するための明確な行程表を手にしていました。クライン弁護士の分析により最後の詳細を洗練し、フランス側の異議を予想することができた。

その晩、夜間労働の習慣に忠実に、ベルティエは友人のジャン＝ミシェル・デュランに電話をかけた。

国際公法の教授であるデュランは、フランス国境をはるかに超えた名声を享受していた。彼らの友情は大学時代に遡り、同じ正義の理想を共有していた頃だった。

「ジャン＝ミシェル、こんばんは。遅すぎて邪魔していないかい？君が夜更かしの癖を保っているのは知っているけれど。」

ジャン＝ミシェル・デュランの声が受話器から雑音とともに聞こえてきた。法学部の学生時代から使っている善意の

ユーモアに彩られていた。彼らはお互いをよく知りすぎているため、通常の礼儀は必要なかった。

「全然だよ、ピエール。君も知っているように、僕は夜の蝶だからね！それに君の複雑な事件では、退屈する暇なんてめったにない。今度は何が君を悩ませているんだい？」ベルティエは微笑んだ。デュランには適切な三つの言葉で彼の確信を萎ませる才能があった。彼は友人を尊敬していたが、優しい夢想家だと思っていた。

「国連に持ち込む予定の事件に目を通してもらいたいんだ。戦争時代からのフランスの文化略奪で、今日まで派生問題が続いているものなんだ…」

「ああ！君は変わらないね。いつも死者を起こそうとしている。聞かせてくれ、君が大物に立ち向かう時はいつも大好きなんだよ。」

デュランの関心は偽りではなかった。何年もの間、彼は強迫観念に近い情熱で盗まれた遺産の事件を解剖していた。ベルティエはそれから延々と語り始めた。十五分間の独白で彼は計画を展開した。デュランは聞き、時々うなり声を上げ、専門家の質問をした。

「ピエール、すべてがしっかりしているようだ。かなり見事だよ。彼らは何でもやった、組織的な盗みだ。」

この承認は心地よかった。デュランは喜ばせるために良い点数を配る類ではなかった-むしろその逆だった。彼の検証はベルティエに自分の仕事の堅実性について安心を与えた。

「しかし…タイミングに少し問題があるとは思わないかい？八十年、それは始まっている。裁判所はたとえ正当な理由でもメトシェラを蘇らせることをあまり好まない。」

ベルティエは異議を待っていた。彼はこの明白な弱点を意識して、ずっと前から反論を準備していた。

「ジャン＝ミシェル、人権への重大な侵害は決して時効にならない。」

「理論的にはそうかもしれないが、実際には…」

「一九四四年以来毎日略奪は続いている、フランスが自分のものでないものを保持し続けているのだから。」

この論証は的中した。デュランは弱点を強さに変えるこの種の知的な妙技を評価した。

「とても良いよ、ピエール。君は祖父の犯罪を日常的な現行犯に変えている。しかし何を期待しているんだい？彼らが君に感謝すると思うのかい？」

「明らかに、そんなことはない！フランスは決して自発的に手放すことはないだろう。ほぼ一世紀の間掃除をする時間があつたのに、やらなかった。今度は手伝ってやるんだ。」

デュランは論理を理解し始めた。ベルティエは白馬の騎士を演じているのではなく、冷徹に計算していた。圧力の手段としての国際的な困惑。あまりロマンチックではないが、効果的だった。

「ピエール、最初は君の事件は少し狂気に見えた。しかし結局は…はい、うまくいく可能性がある。リスクはあるが、少なくとも議論をあるべき場所に置いている。」

友人の最終的な賛同がベルティエを完全に安心させた。この検証が彼の直感を確認した。

その後数週間、ベルティエは事件に可視性を与えることを決めた。彼は署名入りで専門インターネットサイトにいくつかの記事を発表した：アカデミア、ライプニッツ研究所

、司法村…これらの記事は数千人の読者を得た。すぐに電話とメールが増加した。アメリカの教授、イギリスの歴史家、ドイツの専門家、市民団体の活動家。小さな国際ネットワークが自発的に織り成された。それぞれの新しい接触がベルティエに、彼が一人で戦っているのではないことを確認させた。マツカタ事件は象徴になった-過去の誤りを正す国際法の能力の実物大テストだった。

この国際的認知は彼の自我を満足させた、たとえ彼がそれを否定していても。長年の学術的無名状態の後、自分の仕事で世界中で引用され議論されるのを見ることは、彼が認めることを敢えてしない喜びを与えた。

二〇二五年三月二十六日、ベルティエは最終文書の下に署名を記した。国家による略奪に対してこれまでに組み立てられた最も完全な告発書類だった。ジュネーヴ宛ての写しを眺めながら、彼は一線を越えたばかりであることを理解した。事件は国際司法の歯車に入ることによって彼の手を離れた。その伝説的な遅さ、偶然の出来事、しかしまた-誰が知っているだろうか?-修復の展望もあった。

彼の人生全体がこの種の戦いを中心に構築されていた。今、その中で最も重要なものを開始したばかりで、彼はそれを最後まで導く力があるかどうか自問していた。

「松方幸次郎さん」と彼は壁に掛けられた『アルルの寝室』の複製を見ながらつぶやいた。「あなたの戦いは始まったばかりです。私はこの戦いをあなたに捧げます。」

第8章：国際的な闘い

ジュネーブ、国連本部、2025年6月

レマン湖はその朝、黄金の輝きを放っていた。まるで国連人権高等弁務官事務所の各部屋に重くのしかかる勉強会の雰囲気忘れさせようとしているかのようだった。会議室では、作業部会が月例報告を検討していた。最も心を痛める人間のドラマに直面してさえも、国際官僚機構が課す決まりきった手順に従って。

この作業はスイスの時計のような規則正しさと繰り返されていた。十名ほどの専門家たちが、国家によって損害を受けたと考える個人や組織からの苦情を検討していた。目立たないが、基本的人権保護システムの重要な歯車であった。

カルメン・バスケスは、自分の機関の実際の効果に対する疑念をどうにか隠しながら、権威をもって会議を主宰していた。彼女はすべてを見てきた。果たされなかった約束、葬り去られた報告書、無視された勧告を。スペイン最高裁判所の元判事である彼女は、フランコ体制後に養成された法律家たちの代表的存在であり、国境を越えた正義の理想に育まれていた。

しかし、最も複雑な事件を解決するために費やした二十三年間は、国家が自発的に改善する能力について彼女を懐疑的にさせていた。彼女は、政府が決して善意で譲歩することはなく、世論の圧力や経済的利害の下でのみ譲歩することを学んでいた。この段階的な幻滅は彼女を頑固にしたが、同時に自分が持つわずかな権力を使うことにより決意を固めさせた。

白髪混じりの髪が、決して感情を表さない細い輪郭の顔を縁取っていた。弱さを見せることが信頼性の完全な失墜に等しい環境で生き残るために築いた外観であった。

彼女の同僚たちは、彼女を愛することなく尊敬していた。効率性の祭壇に女性らしさを犠牲にしなければならなかった女性として彼女を認識していた。

議事日程を眺めながら、不正の蓄積に直面して襲ってくる慣れ親しんだ倦怠感を覚えていた。各案件は破綻した人生、失望した希望、裏切られた約束を表していた。

「我々の議事日程には十二件の新しい申立ての予備審査が含まれています」

わずかにカスティーリャ訛りが混じった彼女の発音は、会議室の空間に自然に響いた。彼女は聴衆の注意を引きつけながら決して無理をしているように見せない声の調節の仕方を知っていた。説得が威嚇よりも価値があることを学んだ長年の審理で身につけた才能だった。しかし今日は、いつものトーンに疲労の色が透けて見えた。

「その最初のもの、番号四二一／二〇二五として記録されているものは、フランスの非政府組織からのもので、戦争直後にフランスが取得した美術品コレクションに関するものです。私は、この案件が最初から注目に値する特別な特徴を示していると言わなければなりません」

バスケスは大きな問題に対する自分の無力感を補うため、各会議を丁寧に準備する習慣があった。

「申立人たちは司法拒否と財産権の侵害を主張しており、それらが実証されれば、フランスの国際的約束に対する重大な違反を構成することになるでしょう。しかし、何も予断を持たず、我々の報告者に事実を説明してもらいましょう」

テーブルの周りで、出席している六名の法律家たちが礼儀正しい関心を示した。彼らは皆、すでに何百もの申立てを審査し、論証の妥当性を迅速に評価する特別な能力を身につけていた。

この国際色豊かな会議は国連システムの多様性を反映していた。異なる伝統で養成された法律家、転身した外交官、国際的な認知を求める大学関係者。すべてが法による世界の変革という野望を共有していた。

報告者に指名されたクラウス・ウェーバーは、目の前にある案件を開いた。彼はドイツ的厳密さを体現していた。ポツダム大学の准教授で、国際紛争に関する数冊の基準的著作の著者である彼は、学界において厳密性の評判を享受していた。彼のアプローチは一般的考察よりも事実分析を優先していた。ナチスによる略奪、次に植民地による専有に関する彼の研究は新しい基準を確立していた。しかし彼は、憤慨することを妨げる観察者の距離を保っていた。ウェーバーにとって、不正は何よりもまず解決すべき概念的問題であり、癒すべき人間の苦痛ではなかった。

松方案件の資料をめくりながら、彼は申立人たちによって展開された知的構築に対して好意的な先入観を持っていた。この事件は彼が好む種類の複雑さ、すなわち精密な分析を要求する憲法問題、国際法、行政手続きの絡み合いを正確に示していた。

「議長、」ウェーバーは始めた。「私はこの申立ての完全な研究に最近数日を費やしましたが、我々の継続的な注意に値する特徴を示していることを認めなければなりません」

ウェーバーは捕らえられた聴衆の前で自分の百科事典的知識を展開できるこれらの瞬間を愛していた。

「我々は一九五〇年に亡くなったコレクターである松方幸次郎という人物に属していた日本美術コレクションのフランスによる取得の合法性に異議を申し立てる要求を受理しています。これらの作品の消失の状況は…控えめに言っても疑わしいものです」

冒頭説明の精確さは、会議に最も一貫性のある事例の審査に先立つ集中の雰囲気を作り出した。作業部会のメンバーたちは、価値のある申立てと時折議題を煩わせる空想的な請願を迅速に区別することを学んでいた。後者は通常、斜め読みの後にごみ箱に行き着いた。

イザベラ・ペレイラが発言するために手を挙げた。ポルトガル文化省の元副局長である彼女は、模範的だが挫折的な経歴の重みを肩に背負っていた。彼女の経歴は古典的だった。おそらく秘かにより型破りな冒険を切望していた人にとってはあまりに古典的だったのかもしれない。コインブラ大学の卒業生である彼女は、最初民事訴訟を専門とする弁護士として働き、その後公務に入った。この転身は誠実な使命感の産物であったが、同時に、金銭がしばしば正義に優先することを発見した民間部門での幻滅に対する諦念でもあった。ポルトガルの旧植民地が関与する複数の繊細な案件の処理で獲得した返還紛争の専門知識は、審議会内で認められた権威を彼女に与えていた。ペレイラは妨げられた理想主義者であり、不完全と知るシステムに奉仕する挫折に失望していた。

「ウェーバーさん、フランスのNGOは、明示的に代表していない日本の相続人の名において行動する資格を持っているのでしょうか？一般的にこの種の申立ての大部分がつまづくのはそのような障害においてです。私は根拠において堅実な多くの案件が代表の問題で崩れ去るのを見てきました…」

彼女は自分の悲観主義を透かしていることに気づいて中断した。

ウェーバーは手書きのノートを参照した。彼は頑なにデジタル化への移行を拒否し、手書きが思考を促進すると主張していたが、実際は彼を追い越す現代性への恐怖を隠していた。彼の小さな詰まった文字で覆われた紙片は、厳密な作業を証明していた。

「ペレイラさん、あなたの質問はこの申立てが提起する困難の核心に触れています。しかし申立人は異議を先回りしました」

ウェーバーは一時停止し、彼が研究した論証を明かそうとするこの瞬間を味わった。

「NGO『帰還と返還』は、フランス民法第千三百一条に規定された『事務管理』を援用し、明示的委任を持たずに他人のために有効に行動することを可能にしています。これは巧妙だと認めなければなりません」

ウェーバーは推論の洗練さを賞賛せずにはいられなかった。

「彼らは、日本の相続人たちがフランス国家に対して自分たち自身で行動することが實際上不可能な状況にあるという事実を根拠にしています」

彼は同僚を苛立たせるが各詳細を掌握することを可能にする、その遅さでノートをめくった。

「NGOは受理可能性のこの問題だけで三十七ページの覚書を作成し、百十二の判例参照を含んでいます。本当に専門家の仕事です。彼らは類似の状況において協会の当事者適格を認めた欧州人権裁判所の複数の判決を引用しています」

作業部会のメンバーたちは、少数の申立人が申立てを準備する厳密さを評価した。これは彼らがあまりにしばしば受け取る、堅実な基礎のない個人的欲求不満の単なるはけ口である粗雑な請願とは違っていた。

トーマス・ハリソンは説明を聞いて軽く眉をひそめた。彼は概念的優雅さよりも現実主義を優先するアングロサクソンの伝統を象徴していた。ビザンチン的と判断する大陸の微妙さに対する自分の苛立ちを隠す方法であった。サヴィル・ロウの優秀な仕立て屋で作られた彼のプリンス・オブ・ウェールズのスーツは、シティの影響を裏切り、イギリスの大学エスタブリッシュメントの控えめだが確実なシックを強調していた。コモン・ローとローマ・ゲルマン法系との相違に関する彼の著作は英語圏の大学において権威とされていたが、分析すると主張する大陸法の特殊性に対する無知も裏切っていた。

「興味深い分析です」と彼は譲歩した。「通常の国際基準から見て脆弱に思えます。フランス人は自分たちの大陸法がどこでも適用されると信じる傾向があります。これは彼らの精神性の反復的特徴であり、他のシステムがより効率的であり得ることを考える無能力です。私は類似の論証が我々の機関の前で崩壊するのをすでに見ましたが、これが真の創意を示していることは認めなければなりません。しかし創意は概念的堅固さに取って代わることはできません。あなたの説明の始まりから私を困惑させている質問を提起することを許してください。組織はどのようにして、決して会ったことがなく、いかなる委任も委託されたことのない日本の相続人の真の利益を知り、擁護すると主張できるのでしょうか？そのような代表の推定は私には…かなり大胆に思えます。コモン・ロー・システムでは、我々はこれらの委任と代表の問題についてはるかに厳格です。明示

的同意なしに他人のために行動すると主張することはできません」

異議は的を射ており、ハリソンはそれを知っていた。というのも、国際法は多くの点で柔軟であるかもしれないが、一つの詳細については妥協しないからである。推定される被害者は明確に特定され代表されなければならない。権利承継者が地球の四隅に消散してしまったとき、弁護士の最も美しい弁論を失敗させることが多い詳細である。

カルメン・バスケスは自分のメモ帳に観察を記録し、ついでにイギリス式突きの洗練さを評価した。

「ハリソンさん、あなたの異議は確かに我々が立ち止まるに値します」と彼女は抑制された声で介入した。「しかし我々は詳細な評価の際に受理可能性の点を最も慎重に検討しなければならないでしょう。しかし、あなたが完全な事実説明さえ聞く前にこの問題を提起していることに注目します。形式的側面について決定する前に、まず申し立ての実質を検討する方が賢明ではないでしょうか？」

叱責は丁寧だったが、断固としていた。バスケスは、厄介な根本問題を避けることを可能にする手続き上の考察に議論が逸脱するのを見るのにうんざりしていた。

「形式的側面に取り組む前に、申立人が根拠とする実際の、観察可能で客観的な状況を我々の報告者が説明することが有用かもしれません。ウェーバーさん、発言をお願いします」

ドイツの法律家は頷きで賛成した。

「申立人の論証は、連続する三つの公的行為の異議申立てを中心として顕著に構造化された方法で組み立てられています」と彼は最も重要な個所を探しながら始めた。「それ

それがフランスによる専有の有効性に疑問を投げかける実質的不正に汚されているとされています」

ウェーバーは赤いしおりで印をつけたページで案件を開いた。

「最初に異議申立てされた行為。一九四四年十月、ド・ゴール将軍の法令が松方コレクションを『敵性財産』として管理下に置きました。ところが、申立人はこの資格に異議を唱え、フランスが日本に対して正式に宣戦布告を行ったことは決してないと主張しています。もしこの分析が正確であれば、フランスの建造物全体がその起源から動揺するでしょう。NGOは主張を支持するために真正と思われる公文書の複写を提出しています。外交通信、暗号電報、政府会議の議事録…」

それまで心ここにあらずといった様子で手帳に落書きをしていたラファエル・モラレスが、突然頭を上げた。このチリ外務省の元顧問は、南米の軍事独裁政権に関連する略奪事件の処理において名声を獲得していた。その過去は今でも彼を悩ませ、民主的な政府であっても、あらゆる国家に対する猜疑心を育んでいた。真実和解委員会は彼の得意分野であったが、組織的な不処罰を前にした最大の失望の舞台でもあった。モラレスは、証拠が消失し、証人が証言を撤回し、責任者が訴追を逃れるのをあまりにも多く見てきたため、美辞麗句をもはや信用できなくなっていた。

「ヴェーバーさん」と彼は口を挟んだ。「同盟国である二国間の戦争状態に関するこれほど重大な主張を、我々の部門で独立して検証することは可能でしょうか？なぜなら、申立人が提出した書類だけに満足することはできません。一見すると魅力的に見えるかもしれませんが。私は職歴に

おいて偽の証拠をあまりにも多く見てきたため、疑い深くならざるを得ないのです」

モラレスは自分が何について話しているかを知っていた。ピノチェト時代、あまりにも多くの偽造文書が彼の机を通り過ぎていったのだ。この種の争訟では、文書証拠の認証が最終的な結果を決定することが多く、彼はあまりにも美しすぎる証拠を疑うことを学んでいた。

「あなたのご指摘は適切であるばかりでなく、不可欠です」とヴェーバーは答え、自分の慎重さを共有してもらえて安堵していた。「独立した認証がいかなる真剣な評価の不可欠な前提条件を構成することを強調されるのは千回正しいことです。私は勝手ながら、ドイツ連邦公文書館の元同僚ホフマンに連絡を取りました。彼は非常に信頼性の高い文書鑑定手法を確立しています。検証は、自由フランスと臨時政府のすべての文書を保管しているフランス国立公文書館で行うことができるでしょう。通常の機関間協力チャンネルに従った我々の評議会からの公式要請だけで、提示された主張の決定的な確認または否認を得ることができるはずです」

この提案は巧妙であり、誰もがすぐにそれを理解した。ヴェーバーは立証責任をフランス当局自身に転嫁したのだ。パリが要求された文書の提供に同意すれば、その内容によって争点となっている問題を解決することができるだろう。当局がそのような提供を拒否すれば、その拒否は彼らの立場の脆弱性の間接的な自白として解釈される可能性があった。

イザベラ・ペレイラが手で合図を送り、発言したいことを示した。

「申立人は、フランスがこの宣戦布告の問題についてあいまいさを維持するよう駆り立てた動機に関する要素を提示しているのでしょうか？」

「素晴らしい指摘です、ペレイラさん。NGOは意図的な戦略であったとされることについて詳細な分析を展開しています」

ヴェーバーは適切な箇所を探して数ページをめくった。

「自由フランス政府は、レジスタンス運動としての地位と主権国家としての地位の間の混乱を意図的に維持していたとされます。このあいまいさにより、国際法の制約を回避しながら、正統政府の特権を主張することができたのです」

カルメン・バスケスはうなずいてその提案に同意した。

「我々は確かに予備的結論において文書検証の必要性を記録します。しかし説明を続けてください、ヴェーバーさん。申立人が異議を申し立てている他の行為はどのようなものですか？」

「NGOの論証によって問題視されている第二の行為。一九五一年のサンフランシスコ条約の適用です。この条約は、フランスが公式に戦争状態になかった国の財産に関係すべきではありませんでした。申立人はここで根本的な矛盾を提起しています。この条約は定義上、国際公法の厳密な意味における『敵性財産』にのみ適用されます。ところが、論証の第一部が示唆するように、フランスが日本と公式に戦争状態になかったのであれば、フランス領土内にある日本の財産はそうに分類することはできません。したがって、サンフランシスコ条約はフランスの状況には適用不可能になります」

トーマス・ハリソンは椅子に座り直し、隠そうとしていた関心を表した。

「この分析は、サンフランシスコ条約の起草者がこの可能なあいまいさを考慮していなかったことを前提としています。当時の外交官の知性を過小評価することになるのではないのでしょうか？」

「興味深い異議です。しかし、NGOは条約の準備討議の抜粋を提示しており、それによると日本に対するフランスの正確な地位の問題は決して解決されていないことが示されています」

ヴェーバーは正確な参照を探してメモをめくった。

「彼らの研究によると、アメリカの交渉者は連合国陣営の結束を損なわないために、この問題を提起することを意図的に避けたとされます。いわば沈黙による合意の形です」

イザベラ・ペレイラは文書に身を乗り出して、論証に対する好奇心を示した。

「この分析は内的一貫性によって困惑させるものです。事実前提が正確であれば、申立人によって特定された矛盾は純粹論理の観点から異議を申し立てることが困難に思えます。しかし教えてください、論証によって糾弾されている第三の行為は何ですか？なぜなら、論証がサンフランシスコ条約に関する矛盾で終わるわけではないと想像するからです」

「間違っていない、ペレイラさん。異議を申し立てられている第三番目で最後の行為は、憲法規則に違反して取られたとされる一九五八年の政令であり、争点となっているコレクションの最終的な取得を承認したものです。この政令は一九五八年のフランス憲法に明白に違反して取られたとされ、同憲法は政府政令の使用を緊急時のみに許可して

おり、通常は議会の管轄に属する芸術作品の国際的寄贈には認めていませんでした」

この論点は集会において興味深いざわめきを引き起こした。最初の取得の正当性に関する実質的問題を超えて、この案件はフランスの公権力組織の基盤そのものに触れる憲法形式の問題を提起していた。

ラファエル・モラレスが発言した。

「私が間違っていなければ、我々は三つのレベルで非正当な取得に直面していることになります。法的根拠のない一九四四年の最初の行為、一九五一年の国際条約の濫用的適用、そして一九五八年の憲法上不適切な正則化ということですね？」

「まさにその通りです。NGOは『連鎖的仕組み』について語っています。そこでは各行為が前の行為を正当化しようとしませんが、最初の脆弱性が全体を汚染するのです」

トーマス・ハリソンは、通常発言を特徴づける節度をもって発言したが、フランスが困難な立場に置かれる展望を前にした興奮を隠しきれなかった。彼は公の場では決して熱くなることはなく、すべて英国的な冷静さで発言を小出しにすることを好んだ。

「ヴェーバーさん、申立人の論証に対するあなたの分析が忠実であれば—そしてそれを疑う理由はありません—我々は財産権の典型的な侵害に、フランスの司法当局による司法拒否が重なった状況に直面していることになります。この状況はあなたの見解では我々による検討に値するのでしょうか？なぜなら、我々は西側民主主義における法治国家の基盤そのものに触れているように思えるからです」

英国代表の質問は作業部会の使命の核心に触れるものであったが、大陸のライバルが困窮するのを見る隠された満足

も透けて見えた。提示された論点の詳細な分析を超えて、専門家たちはこの申立書がフランス国家との対審手続きの開始を正当化するのに十分深刻な要素を含んでいるかどうかを決定しなければならなかった。

「それが私の予備的評価です」とヴェーバーは確認した。

「この申立書は我々が受け取る通常の嘆願書の枠を大きく超える事実問題を提起しています」

ヴェーバーは長い間感じていなかった興奮が心の中に高まるのを感じていた。この事件は彼が好むすべての要素を組み合わせていた。法的複雑性、歴史的争点、国際的側面。

「文書の質と申し立てられた侵害の重大性は、対審による検討を正当化するように思えます。特にNGOが利用可能な国内救済手段を尽くしていることを考えると」

ヴェーバーは調子を決めたところであり、これまで知られていなかった決意を明かしていた。松方事件は数ある嘆願書の一つではなかった。フランス人は説明を迫られることになるだろう。

「さらに、申立人はフランス法における救済手段の無効性を主張しています。NGOは、フランスの司法当局がいかに司法拒否を実践しているかを示すフランス国務院の二つの最近の判決を援用しています」

この詳細は適切な時に出された。集会はフランスに対して風向きが変わり始めていることを感じ始めていた。しばらく口を開いていなかったラファエル・モラレスが椅子に座り直した。

「ヴェーバーさん、その有名な司法拒否について少し詳しく説明していただけないですか？この告発は、自らを人権の発祥地として位置づける国に関することであれば極めて重大に思えます」

彼の声には、不処罰と闘うことに人生を捧げた者の憤りが込められていた。

ヴェーバーは証拠がドミノのように並ぶこの種の瞬間が大好きだった。

「申立人は我々に特に明らかな国務院の二つの判決を提示しています。最初のものは二〇二二年十一月二十三日付け、二番目は二〇二四年五月十四日付けです。両方の場合において一そして状況は松方事件と厳密に同一ですーフランスの最高行政機関は申立てを不受理と宣言しました。案件の実質さえ検討することなく。二つの案件のうちの一つでは、国務院は明確な正当化なしに申立人に三千ユーロの罰金を課しました。国家による取得に敢えて異議を申し立てる者を威嚇する方法です」

フランスの最高行政機関の二つの判決にはその効果があった。司法拒否の告発を悪魔的に具体的なものにしたのだ。グループのメンバーは皆一つの強迫観念を共有していた。司法への実効的なアクセスである。それは彼らの共通の宗教であり、民主主義的結末点であった。

イザベラ・ペレイラは憤りの身振りを抑えることができなかった。

「正義を求める勇気を持ったために三千ユーロの罰金ですって？しかしそれは純粹で單純な威嚇です！フランスはどのようにしてそのような方法を正当化できるのでしょうか？」

ペレイラは正義に見捨てられた被害者をあまりにも多く見てきたため、そのような慣行に心を動かされずにはいなかった。

「まさに、ペレイラさん」とヴェーバーは同意した。「NGOはその意見書において、この種の抑制的慣行を非難する欧州人権裁判所の一貫した判例法を引用しています」カルメン・バスケスは時計をそっと見た。効率性の義務と抑制しようとしている知的好奇心の間で揺れていた。すでに一つの申立書に一時間半も費やし、十二の案件が待っているのだ！松方事件は確実に注目を独占していた。

彼女は市民社会組織の一つがこれほど堅固な案件を構築することに成功したことに一種の共感を覚えていた。長いキャリアにおいて、市民社会組織からこれほど詳細な論証を見ることは稀だった。

「時間が経っていることを考慮して、私は事件の表面的受理可能性についてすぐに投票することを提案します。残りの案件は次のセッションに延期します、仕方ありません」

彼女の提案は松方事件に与える重要性について多くを物語っており、通常抑制しようと努めている情熱を明かしていた。なぜならカルメン・バスケスは通常、たとえよく準備された一つの案件のために議事日程を乱すことはないからだ。

「私に関して言えば」と彼女は自然な権威で集会を見回しながら付け加えた。「この申立書はフランスへの公式通知を正当化するのに十分堅固で文書化されているように思えます。結局のところ、それが手続きです。フランス国家は受理可能性と実質について防御を提示するための規定期限を持つことになります」

彼女は注意深く言葉を選んで、間を置いた。

「組織的略奪を合法的行為に偽装したものによく似ているものをパリがどのように正当化するかを見ることに、私は

好奇心を抱いていることを認めます。なぜなら結局のところ、フランスが日本と戦争状態にあったことを認めるとしても—これは証明されるべきことですが—それは個人収集家に属する文化財の没収を正当化するのでしょうか？」

それに続いたうなずきは、討議を通じて確立された満場一致を裏切るものだった。最初は懐疑的だったトーマス・ハリソンでさえ、最終的には証拠に屈服していた。

「最初は疑念を抱いていたことを認めなければならない」とハリソンは認めた。「形式面での私の懸念については、ご存知の通りです。しかし、この申請書は対審手続きに値するほど重大な問題を提起していることは否定できません」

イザベラ・ペレイラは頷いた。

「文書の質は高く、論証も筋が通っている。この事案は真剣に検討する価値があることは疑いありません。そして、フランスの事案を超えた象徴的な側面もあります。このような慣行を見ごせば、他の諸国に悲惨な合図を送ることになります」

ラファエル・モラレスも一般的な意見に賛同した。

「私たちに提示された違反の範囲は、真の対審手続きを開始することを十分に正当化します。特にフランス国務院の態度は、応答なしには済まされない私たちの原則に対する一種の軽蔑を示しています」

ウェーバーは力強い頷きで同意した。

「親愛なる同僚の皆さん、私たちは教科書的な事例に直面していると思います。この事件は判例となり、文化的返還に関する新しい基準を確立する可能性があります。ここに、個人の権利が、たとえ最も強力であっても国家の利益に優先できることを示す機会があります」

投票は通常の手順に従って行われた。明確な結果。申立ての一応の受理可能性について全会一致。反対ゼロ、棄権ゼロ。

これほどの合意は、ピエール・ベルティエの説得力のある影響を証明するものであったが、また、ついに頑固な国家を問題視することを可能にする案件を見つけた各人の隠れた喜びをも示すものであった。

カルメン・バスケスは結果を宣言する際に満足を隠すことができなかった。

「申立て四二一号／二〇二五年は全会一致で受理可能と宣言されます。ウェーバー氏、フランス国家への正式通告の準備をお任せします。彼らには意見書を提出するために六ヶ月の期間を与えます。これは通常の期限ですが、理由のある申請により延長可能です。親愛なる同僚の皆さん、ご発言の質の高さに感謝いたします。この会議は知的に最も刺激的なもののひとつとして私の記憶に残るでしょう」

もちろん、これは原則的な受理可能性であり、この段階では暫定的なものであった。何も決まっていなかった。必ず到来するであろうフランスの反撃の妥当性次第で、すべてがまだ覆る可能性があった。

しかし、長い間で初めて、評議会のメンバーたちは何か有用なことに奉仕していると感じた。彼らは国家の論理に対する国際法の主張において重要な段階を踏み越えたばかりであることを知っていた。会議室を出る際、ウェーバーは微笑まずにはいられなかった。松方事件は今後数ヶ月間、彼を魅力的に忙しくさせるだろう。一度だけでも、ドイツ人の精密さが単なる官僚的効率性ではなく正義に奉仕できることを実証する機会があるのだ。

数日のうちに、情報は電光石火の速さでフランス行政の階層を駆け上がった。

第9章：フランスの反応

ジュネーブ、国際連合におけるフランス常駐代表部、2025年4月

NGOからの通達は、二〇二五年四月、公式ルートを通じてフランス当局に到着した。外交の廊下では、あらゆる文書が太古の昔から定められた回路に従って流れており、一見したところ、それはまたしても行政上の書類に過ぎないように見えた。しかし、その見かけ上の平凡さの背後には、国家が確実に獲得したものと考えていた慣行への根本的な疑問が隠されていた。

フランス常設使節団は、外交地区にある十九世紀の建物「レ・オルモー」邸を占めていた。灰色の石で建てられた威風堂々とした建造物で、共和国の紋章がよく見える位置に掲げられており、何事も偶然に任せないフランスの代表の伝統を体現していた。応接間は、慎重に選ばれた時代物の家具や芸術作品で溢れ、共和国が保存し展示しようとしていた遺産の証となっていた。

ローラン・メリュールは六年間、人権保護機関との関係を担当する部署を指揮していた。国立行政学院出身で、パリ政治学院を経て、控えめながら高価な服装を身に着けていた。外務省の国際法担当局を経て、二人の連続する大臣の官房を経験した後、彼は自分が支持することを任されているフランスの立場の堅実性に疑念を抱いていた。彼の役割は、個人的な心境がどうであれ、フランスを擁護することだったが、年月が彼を、擁護可能な案件と擁護不可能な案件を見分ける専門家にしていた。

その朝、メリューは高等弁務官事務所からの通知を注意深く読んでいた。彼は手続きに慣れており、この件も一見したところ、彼の楽観主義を揺るがすようなものには見えなかった。結局のところ、フランスに対する個人通報は毎年数十件に上るが、その大部分は申立人にとって派手な失敗に終わるのが常だった。

読み進めるにつれ、彼の眉がわずかに曇った。メリューは、案件が政府の行動の裏側を暴露する恐れがあるたびに彼を襲う、あの馴染みのある不安感がうずき始めるのを感じた。

彼は電話を取り上げ、秘書の番号を押した。

「ペラン夫人、直ちに限定チームを会議室に召集していただけますか？それから省庁に連絡して、午前中のうちにクレール・フォンテーヌ副局長と話をする必要があります」

「承知いたします、参事官。この会議を絶対緊急に分類すべきでしょうか？」

「そうですね…通常の緊急扱いですが、他のすべての案件より優先で。同僚たちには、遅くまでかかる可能性があることを伝えてください」

電話を切った後、彼は窓を打つ雨をしばらく眺めた。数分後、彼はチームに新たな嵐が地平線上に現れつつあることを告知しなければならなかった。そして今回は、彼が扱った他の案件とは異なり、すべてのカードを手に行っているという確信がなかった。

会議室が満員になった。最初の評価のために呼ばれたのは、最も経験豊富な協力者だけだった。部屋自体が贅沢の追求を反映していた：無垢のオーク材の寄木細工の床、マホガニーのテーブル、ボルドー色の革の肘掛け椅子。壁は国立博物館に保管されている傑作の複製で飾られていた -

運命の皮肉で、これらの作品のいくつかは、その正統性が争われているものの一部かもしれなかった。

エリーズ・レニエルが最初に到着し、書類を脇に抱えていた。ソルボンヌ大学とロンドン・キングスカレッジを卒業し、大陸法系とアングロサクソン系の両システムを等しく巧みに操っていた。パリの事務所で華々しいスタートを切った後、国家に加わることで元同僚を驚かせた。これは確かに共和主義的な熱情に動機づけられた決断だったが、高級公務員が提供する権力の味わいによるものでもあった。優秀さと個人的成功の崇拜の中で育てられた彼女は、それでも公共の利益に奉仕することを熱望していた。彼女の経験年数は、この二つが常に一致するわけではないことを教えていた。

ニコラ・ブランシャールが続いた。四年間文化担当官を務め、法律家にしばしば欠けている博物館学の問題に関する実践的知識を議論にもたらした。ブランシャールは典型的な良心的な公務員で、芸術への愛に突き動かされており、そのために文化外交のより汚い側面に直面すると不安になった。彼は作品と芸術的交流への情熱からこの職業を選んだが、文化もまた権力の道具として機能することを徐々に発見していた。

最後に入ったのは、使節団内でアジア問題の専門家であるジャン＝マルク・ルーセルだった。中国学を専門とし、一九九〇年代に東京で十年間勤務し、日仏関係の機微を熟知していた。彼の存在は偶然ではなかった。メリューは、この案件が純粋に法的な論争を超えた波及効果を持つ可能性があるかと疑っていた。ルーセルは現場外交官の特質を持っており、最も晦渋な案件の背後にある文化的・人間的な問題を見抜いていた。日本での年月が彼に刻印を残していた；彼はその国とその住民に対する真の愛情を保持しており

、それが日本文化において重要な名誉と面子の問題に敏感にさせていた。

「我々は、人権理事会に対してフランスに提出された新しい通報の通知を受け取りました。この数週間で風の便りに聞いていた松方事件が、公式な側面を帯びることになりました」

語調は意図的に中立的で、まるでその通知がまた一つの行政的形式に過ぎないかのようだった。

「詳細に入る前に」とメリューは続けた、「皆さんそれぞれに最初の印象をお聞きしたい。ルーセルさん、日仏の文脈をご存じのあなたは、これについてどのような感想をお持ちですか？」

「参事官、申し上げなければならないのは、タイミングが気になることです。日本は現在、民族主義的復活の段階を通過しています。その政府は、世界に散らばった日本文化遺産の回収を優先事項の一つにしています。最近前例がありました。北斎の版画についての大英博物館との交渉、一九四五年以降に押収された美術品についてのアメリカ人との議論…」

ルーセルは控えめに話していた。彼は、礼儀正しい二国間関係の虚飾の背後に、粘り強い恨みが隠されていることを知っていた。

「通報の背後に政治的な側面があると思われますか？」メリューが遮った。

「その可能性は十分にあります。我々を攻撃しているNGOはフランス系と名乗っていますが、日本の利益と連携して行動していないとは言い切れません。私のキャリアの中で、見かけ上独立した組織が、より広範な国家的意図のスクリーンとして機能するのを何度も見てきました」

エリーズ・レニエルが手を挙げた。彼女の性格は、地政学的推測よりも客観的分析を優先する傾向にあった。

「一つ意見を述べさせていただいてもよろしいでしょうか？たとえ通報が東京に操られていたとしても - それはまだ証明すべきことですが - 論証の堅実性には何も変わりません。週末をかけてファイルを詳しく調べましたが、非常によく文書化されていることを認めなければなりません」

「詳しく説明してください」メリューが求めた。

「彼らは明らかに、我々が機密と考えていた文書庫にアクセスしています。一九四四年の内部通信、当時の専門報告書、そして…驚かれるでしょうが…我々自身が公文書館に寄託したことのない一九五一年の電報まで」

会議室に重苦しい沈黙が落ちた。レニエルは、相手が見事に準備した案件を発見するたびに彼女を襲う不安を感じていた。彼女は、たとえ彼らが自分の利益に反していても、有能な敵を尊重することを知っていた。

ニコラ・ブランシャールが最初に沈黙を破った。

「どうしてそんなことが可能なのですか？これらの文書は機密扱いのはずです」

「それが私が自問していることです」エリーズ・レニエルが答えた。「我々のサービス内部に漏洩がある - それは極めて深刻なことでしょう - か、これらの文書が他のルートで入手されたかです。家族文書庫、私的基金、おそらくは外国の文書庫まで…」

メリューは急いでメモを取った。内部漏洩の仮説が彼を心配させた。信頼がチームワークの基盤である環境において、疑念は関係を持続的に毒することができた。

「この問題を掘り下げる必要があります。レニエル夫人、その間、彼らの論証の実質を我々に説明していただけますか？」

「喜んで」彼女は何が問題になっているかを詳細に説明した。

ジャン＝マルク・ルーセルは、これほど系統的な攻撃の含意を本能的に測っていた。

「彼らは手加減しませんでしたね。もし彼らの論証が根拠のあるものなら、我々は重大な問題を抱えることになりかねません」

「それが私を心配させることです」メリューが同意した。
「ブランシャールさん、博物館学の観点から、どのような問題がありますか？」

ニコラ・ブランシャールが自分のファイルを開いた。

「問題は相当なものです。我々のコレクションの象徴的な作品に関わっています。それらの消失は、我々の展示コースに大きな空白を生じさせるでしょう。そして象徴的に、それは真の災害となるでしょう。これらの作品は我々の観光パンフレット、絵葉書、国際カタログに掲載されています…」

メリューは額を揉んだ。彼は緊張の瞬間に襲ってくる片頭痛の一つがうずき始めるのを感じた。

「他の西洋博物館への含意は言うまでもありません。もし我々が屈服すれば、我々のイギリス、ドイツ、アメリカの同僚が決して許さない前例を作ることになります」

「まさに」ジャン＝マルク・ルーセルが介入した、「ロンドンとベルリンの私の接触先から非公式の反響を得ています。彼らはこの案件を非常に注意深く追っています。大英

博物館はパルテノン神殿の大理石とベナンの青銅器で苦しい思いをしています。もし我々が松方で崩れれば、彼らは連鎖的な伝播を恐れています」

ルーセルはそこで、彼を個人的に悩ませる心配を表現していた。国際文化交流にキャリアを捧げてきて、彼は協力に代わって不信が取って代わる世界が姿を現すのを見ていた。

「何を提案されますか？」メリューが尋ねた。

「我々は圧力に屈したように見えることを避けなければなりません。しかし同時に、敗北を許すこともできません。第三の道を見つけなければなりません」

エリーズ・レニエルが懐疑的に眉を上げた。

「どのような？我々の選択肢は限られています。理事会の前で徹底抗戦するか、事前に和解合意を交渉するかです。しかし、彼らの要求の有効性を暗黙のうちに認めることなしに、どうやって交渉できるのか理解に苦しみます」

「おそらく別の解決策があります」ニコラ・ブランシャールが提案した。「我々は日本との文化パートナーシップを提案できるでしょう。所有権については譲歩せずに、彼らの要求の精神を尊重する方法です」

ブランシャールはこのアイデアにしがみつ、国際文化協力の理想が崩壊するのを見ることを拒否していた。

メリューはそのアイデアを書き留めた。

「興味深い。しかし、それは根本的な問題を解決しません。もし彼らの論証が堅実なら、人権理事会は中途半端な措置では満足しないでしょう」

「だからこそ詳細な分析が重要なのです」エリーズ・レニエルが主張した。「我々は最高の専門家を動員して、彼ら

の主張を一つ一つ解剖しなければなりません。そして特に、彼らがどのようにしてこれらの機密文書にアクセスしたのかを発見しなければなりません」

ジャン＝マルク・ルーセルが同意した。

「そして事前に地盤を整備することも必要です。パリの日本大使館と慎重に接触することを提案します。事件の背後に政治的側面があるなら、公式チャンネルで扱う方が良いでしょう」

メリューは時計を見た。彼は行動によって状況の制御を取り戻す必要を感じた。

「よろしい。以下のように進めます。レニエル夫人、省庁のサービスとの我々の回答の調整をお任せします。十五日以内に詳細な分析が欲しい」

「ブランシャールさん、ルーヴル美術館とオルセー美術館の責任者に連絡を取ってください。我々には完全な博物館学的評価と、これらの取得に関する利用可能なすべての要素が必要です」

「ルーセルさん、我々のヨーロッパのパートナーと日本の接触先を慎重に探ってください。彼らがこの事件の風の便りを聞いているか、そして彼らの立場はどうなのかを知りたい」

彼は立ち上がり、会議の終了を示した。

「明日は同じ時刻に再び集まって、第一段階の進捗確認を行う。はっきりと言っておくが、この件は今や我々の最優先事項である。他のことは全て二の次だ。」

翌朝、エリーズ・レニエルは七時から執務室にいた。彼女は一晩中、文化的返還に関する国際判例を精査し続け、その結論は決して安心できるものではなかった。彼女の机の

上には、欧州人権裁判所の判決、国際司法裁判所の勧告的意見、そして国際仲裁廷の決定の膨大なコレクションが積み重なっていた。これらすべてが、フランスの従来の論理にとって芳しくない状況を示していた。

レニエルの電話が鳴った。省の副局長であるクレール・フォンテーヌからだった。

「エリーズ？今朝、あなたの報告書を受け取りました。状況を簡潔に要約していただけますか？」

「おはようございます、クレール。要約すると、我々は大きな問題を抱えています。我々を攻撃しているNGOは、当初我々が評価していたよりもはるかに強固な論拠を持っています。」

「そこまでですか？」

「残念ながら。彼らは誰も指摘していなかった弱点を特定しています。そして何より、我々が人目に触れないよう保護していると思っていた文書を手に入れています。」

フォンテーヌは、これまでも他の危機を経験してきた者の諦めをもって衝撃を受けていた。HEC出身の彼女は、最も深刻な問題は往々にして最も遅く発見されるものだという経験を持っていた。

「早急にお会いしましょう。今日の午後、パリに来ていただけますか？」

「もちろんです。何か準備すべきものはありますか？」

「お持ちのものすべてをお持ちください。今朝から大臣がこの案件に個人的に関心を示しています。そして信じてください、これは良い兆候ではありません。」

エリーズ・レニエルは困惑して電話を切った。大臣がこれほど早く案件に関心を示すということは、他のルートから

情報を得たか、エリゼ宮がこの案件を追跡しているかのどちらかを意味していた。いずれにしても、圧力は一段階上がることになるだろう。彼女は国家機構を十分に知っており、大臣の注意が最も些細な案件をも重要な問題に変容させることを理解していた。

彼女のコンピューターに音が鳴った。ニコラ・ブランシャールからのメッセージだった。「エリーズ、今朝オルセーの主任学芸員クロード・ヴァトランと電話で話しました。明日我々を受け入れてくれることになりましたが、松方事件について話した時、非常に困惑した様子でした。彼は『繊細な案件』とまで言いました。彼らが我々に話していないことがあるような気がします。NB」

彼女は即座に返信した。「今日の午後、クレール・フォンテーヌに会うためにパリに上ります。明日の朝、ヴァトランとの会議を手配していただけますか？そして取得条件について我々を啓発してくれる他の人物がいるかどうか調べてみてください。ÉL」

ルーヴル美術館では、アジア美術部門の主任学芸員フランチェスカ・ボニーニの執務室で電話による会話が行われていた。

「クロード？フランチェスカです。ジュネーヴの常設代表部から電話を受けました。松方作品について我々と会いたがっています。」

「ああ」と電話の向こうでクロード・ヴァトランが答えた。「先週『ル・モンド』の記事を読んでから、この電話を待っていました。一九五八年の取得について覚えていますか？」

「うっすらと。我々の時代より前のことでした。しかし記事を読んだ後、昨夜我々の文書館を調べました。問題のある、というか、困った要素があります。」

ボニーニは、自分が仕えている機関の過ちを発見するたびに襲ってくるこの不快感を感じ取っていた。大学人の娘として、真実と高潔さへの崇拜の中で育てられた彼女は、事実との妥協を我慢できなかった。

「どのような？」

「数点について権利を主張していたフランスの個人コレクターからの抗議の手紙。異議を唱えられた鑑定。そして何より、これらの作品の国家遺産への編入における『不正』に言及した一九五九年の内部報告書。」

クロード・ヴァトランはため息をついた。

「この事件の某側面を隠し通せることを期待していました。しかしNGOが本格的な案件を組み立てているなら、我々に選択の余地はありません。」

「問題は、我々はどこまで透明性を追求する用意があるかということです。これらの作品は我々のコレクションの主要作品です。それらの離脱は相当な空白を生み出すでしょう。」

「分かっています。しかし我々は監督当局に嘘をつくことはできません。もし尋問を受けるなら、真実を語らなければなりません。」

「真実のすべてを？」

ヴァトランは自分の返答の含意を測っていた。

「フランチェスカ、我々は学芸員であって、政治家ではありません。我々の役割は作品を保存し、公衆に提示することであって、過去の過ちを隠蔽することではありません。」

もしこれらの取得に不正があるなら、十年後に国際法廷の前に出るよりも、今それが明るみに出る方が良いでしょう。」

「あなたの言う通りです。しかし我々は不満を抱く人々を作ることになるでしょう。」

「おそらく。しかし我々の良心は救われるでしょう。」

その日の午後、エリーズ・レニエルはパリ行きのTGVに乗った。旅路の間、彼女はNGOの案件の最も問題のある論拠を最後にもう一度読み返した。

彼女が到着した時、ヨーロッパ・外務省は大いに活気づいていた。廊下は小声での会話でざわめき、彼女がすれ違った数名の同僚は彼女の視線を避けた。松方事件は多くの憶測の対象となっていた。レニエルは行政危機の前兆を認識していた。繊細な案件が波紋を広げ始める時に廊下を走るあの特別な電気のようなものを。

クレール・フォンテーヌが、多国間文化問題部長のオリヴィエ・ルコントと共に彼女を待っていた。

「エリーズ、これほど早く来てくださってありがとうございます。オリヴィエは一日中我々の内部文書館を精査し、その結論は…憂慮すべきものです。」

オリヴィエ・ルコントは疲労困憊した様子だった。彼は決してしたくなかった暴露の重みを肩に背負っていた。

「利用可能なすべての案件を調べました、国立公文書館に移されなかったものも含めて。そして状況は我々が思っていたよりもさらにひどいとお伝えしなければなりません。」

「どういうことですか？」とエリーズ・レニエルは腰を下ろしながら尋ねた。

「まず第一に、我々の金庫から決して出るべきではなかった文書が存在し、それがNGOの手に渡っています。電報、日本側との通信…」

クレール・フォンテーヌが遮った。

「彼らがそれらをどのように入手できたか、何か考えはありますか？」

「いくつかの仮説があります。内部の誰かがそれらを伝えたか—これは劇的なことでしょう—、または私的文書館から来たかです。」

「そして内容は？これらの文書は何を語っていますか？」

「それらは当時のフランス当局が取得の疑問視すべき性格を認識していたことを明らかにしています。一九五一年の東京駐在大使からの電報があります。彼は書いています。

『松方の相続人たちはコレクションに対する我々の所有権を形式的に争っており、彼らの論拠は根拠がないわけではない』」

エリーズ・レニエルは胃がねじれるのを感じた。この情報はフランスの立場の弱さを確認していた。

「そしてパリは何と返答したのですか？」

「ケ・ドルセーは『状況を複雑にするだけの詳細な議論には入らずに、我々の立場を断固として維持する』よう指示を出しました。」

「つまり我々は善意を主張することはできないということです。これらの文書が疑わしくないなら、それらはフランスが自分が間違っていることを知っていたことを証明しています。」

「それだけではありません」とオリヴィエ・ルコントは続けた。「一九五八年の内部覚書を見つけました。我々の部

署によって起草されたもので、『後の異議を避けるために、立法的手段によってこれらの作品の状況を可能な限り早急に正規化する』ことを推奨していました。規制の性質であった一九五八年の条例は、したがって日常的な行政行為ではなく、疑わしい取得を性急に隠蔽する試みだったのです。」

エリーズ・レニエルは数秒間目を閉じた。彼女は自分が構築しなければならない弁護の崩壊を測っていた。

「我々の立場を正当化するのは非常に困難でしょう。」

「控えめな表現ですね」とクレール・フォンテーヌが同意した。「問題は、我々は何をやるかということです。」

「いくつかの選択肢があります」とエリーズ・レニエルは声に出して考えた。「第一の可能性は、評議会が通知に続かないことを期待して、必死に自分たちを弁護することです。しかしNGOが持っている資料を見ると、それは可能性が低いでしょう。」

「第二の可能性は？」とオリヴィエ・ルコントが尋ねた。

「事前取引合意を交渉することです。我々は相続人の権利を暗に認めますが、面目を保つことができる解決策を見つけます。長期貸与、巡回展示、文化的パートナーシップ…」

「そして第三は？」とクレール・フォンテーヌが尋ねた。

「最も根本的なもので、我々は自分たちの過ちを認め、作品を返還します。当面は我々にとって痛いでしょうが、さらに有害となるであろう国際的な非難から我々を救うかもしれません。」

フォンテーヌは断固として首を振った。彼女の直感、某選択肢は単純に考慮に値しないと囁いていた。

「大臣に報告しなければなりません。決定は明らかに我々の権限レベルを超えています。エリーズ、明日の朝までに総合報告書を準備していただけますか？すべての要素を、何も隠さずに。」

「もちろんです。しかし警告しておかなければなりません。もし我々が対決を選ぶなら、負ける危険があります。そして負けたら、結果はフランスの事例をはるかに超えるでしょう。」

オリヴィエ・ルコントが同意した。

「エリーズは正しい。我々のヨーロッパとアメリカのパートナーはこの案件を非常に注意深く見守っています。フランスの敗北は、彼らが何よりも恐れている前例を作るでしょう。」

「だからこそ我々の戦略をよく準備することが重要なのです」とクレール・フォンテーヌが結論した。「我々はすべての面で非の打ちどころがない必要があります：法的、外交的、そして広報的に。」

翌日、クロード・ヴァトランはオルセー美術館でニコラ・ブランシャールとエリーズ・レニエルを迎えた。彼は神経質で、隠そうと努めている動揺を手が裏切っていた。ヴァトランは芸術に奉仕することに人生を捧げ、この高貴な使命が、彼が無視することを好む死角と折り合いをつけていることを遅れて発見していた。

「ヴァトラン氏」とニコラ・ブランシャールが始めた。「我々はあなたのコレクションに保管されている松方作品の正確な取得状況についてのあなたの専門知識が必要です。」

「聞いてください、あなた方に率直に申し上げます。この事件は何年もの間、私を不安にさせています。二〇一

八年に職に就いた時、戦後のすべての我々の取得について確認したいと思い、松方の事例が直ちに問題のあるものとして現れました。」

「どのような意味で問題があるのですか？」

「まず、取得条件そのものです。一九四四年、戦争の開始以来そこに保管されていたロダン美術館の地下からこれらの作品を回収しました。」

「つまり、勝手に持って行ったということですか？」とニコラ・ブランシャールは驚いた。

「それは少し戯画的ですが、完全に間違いではありません。国有財産管理庁がリストを作成しましたが、真剣な鑑定も来歴の確認ありませんでした。当時は行政の細密さを重視する時代ではなかったと言わなければなりません。」クロード・ヴァトランは金庫に向かい、埃をかぶったファイルを取り出した。

「そして一九四六年から異議申し立てがありました。某作品について権利があると主張していたパリの美術商からの手紙を見つけました。彼らは戦前に松方から正式な契約でそれらを購入したと主張していました。」

「何が起こったのですか？」とエリーズ・レニエルが尋ねた。

「当時の当局はこれらの要求を一蹴しました。公式には、松方のすべての財産は『敵性財産』と見なされ、したがって差し押さえ可能でした。」

彼はファイルを開き、黄ばんだ数通の手紙を取り出した。

「ほら、当時の我々の館長と文化省の間の一九四七年の通信を見てください。我々の館長は書いています。『相続人

が確実な証拠を持って名乗り出れば、これらの取得は後に異議申し立ての対象となる可能性がある』」

ニコラ・ブランシャールは青ざめた。彼は自分が献身的に仕えている機関が、彼が想像していたよりも高貴でない基盤の上に立っていることを発見していた。

「そして省は何と返答したのですか？」

「できるだけ早く状況を正常化して、あらゆる面倒を避ける必要があった」と。

エリーズ・レニエルは、これらの暴露が手続きの今後にとってどれほど重要かを理解していた。

「ヴァトラン氏、もし私たちが国際機関で弁護することになった場合、これらの要素について証言していただけるでしょうか？」

彼は躊躇し、慎重に言葉を選んだ。

「聞いてください、私の役割はフランス国家の立場を何があっても擁護することではありません。私が指揮する部門の科学的・倫理的誠実性を保持することです。もし公式に質問されれば、良心に従って答えます」

「それはどういう意味でしょうか？」

「それは、たとえその真実がフランスの利益に役立たなくても、これらの作品の取得条件について真実を語るということです。確認された事実について嘘をつくことはできません」

ニコラ・ブランシャールとエリーズ・レニエルは意味深な視線を交わした。彼らは保存担当者の無条件の連帯を当てにできないことを理解した。ヴァトランの誠実性は彼らの任務を著しく複雑にしていた。

「他にもあります」とヴァトランは躊躇した後に続けた。
「ルーヴルのフランチェスカ・ボニーニが昨日、自分のアーカイブでさらに困惑させる要素を発見しました」
「どのような要素でしょうか？」とエリーズ・レニエルが尋ねた。

「一九五九年の専門鑑定で、一部の帰属の真正性に疑問を投げかけるものです。どうやら一九四四年の慌ただしさの中で、私たちの前任者は実際には複製品や工房作品だった作品を著名な巨匠のものに帰属させてしまったようです」
ニコラ・ブランシャールは急に身を起こした。彼は自分の確信が徐々に崩壊していくことに一種のめまいを感じていた。

「つまり、私たちは偽物を保持するために戦っていたということですか？」

「偽物ではありませんが、芸術的・市場価値が大幅に過大評価されていた作品です。特に、おそらくポン＝タヴェン派の作品である『ファン・ゴッホ』とされるものや、二十世紀初頭の模作の可能性がある『セザンヌ』があります」
エリーズ・レニエルは激しくメモを取り、これらの暴露の含意を測っていた。

「これらの専門鑑定は当時、監督当局に送られましたか？」

「そこが本当に困った点です。私たちが再構成したところによると、これらの報告書はスキャンダルを避けるために葬られました。フランス国家が疑わしい出所の作品にしがみついていることを世論が知ったら、どんな論争が起こったか想像してみてください！」

「そして今は？これらの報告書はまだ存在しますか？」

「フランチェスカが部門のアーカイブで見つけました。それらは国立文書館に移管されることはありませんでした」ニコラ・ブランシャールは頭を抱えた。

「法的に負ける危険があるだけでなく、その上、何年もの間二流の作品にしがみついていた愚か者として見られることになります」

「一部の作品についてはそうかもしれないと推測しています」とクロード・ヴァトランが確認した。「幸い、三点のモネ、ファン・ゴッホの『アルルの寝室』、二点のルノワールは本物です。少なくともそれは確かです。しかし、これは根本的な問題を何も変えません」

エリーズ・レニエルは手帳をしまった。

「ヴァトラン氏、これらすべての文書のコピーを送っていただけますか？ 私たちの弁護を準備するのに必要です」

「もちろんです。しかし警告します。もし事件が公になれば、戦後のコレクションの完全な再評価を避けることはできません。そしてそれは他の多くの問題を明らかにする恐れがあります」

その夜ジュネーブに戻ったエリーズ・レニエルは、直ちに緊急会議を招集した。ローラン・メリューx、ニコラ・ブランシャール、ジャン＝マルク・ルセルが会議室に集まったが、雰囲気は前日とは大きく異なっていた。パリでの暴露がチーム全体に冷水を浴びせていた。

「この四十八時間の協議の後に現れた状況について整理する必要がありますと思います。レニエル夫人、現在の状況をまとめいただけますか？」

「状況は当初恐れていたよりもさらに悪いです。NGOが私たちが機密だと思っていた妥協的な文書を持っているだけ

でなく、私たちの保存担当者も無条件に私たちを支持する用意がありません。そして、それだけでは足りないかのように、彼らは私たちの立場を著しく弱める要素を発見しました」

彼女は困難な案件に慣れた法律家の正確さでファイルを開いた。

「まず、当時のフランス当局は取得が疑わしいものだと知っていました。アーカイブがそれを白日の下に証明しています。次に、一九四六年から異議申し立てがあったのに、私たちは意図的に無視しました。最後に、私たちが必死に守っている作品が本物ですらないのです」

ジャン＝マルク・ルセルは介入せずにはいられなかった。彼はこれらの暴露の含意を恐れていた。

「なんということだ！私たちの前任者はどうしてこんな混乱を作り出すことができたのでしょうか？」

「物事を文脈に置く必要があります」とメリューが和らげた。「私たちは戦争から抜け出たばかりで、行政は混乱し、優先事項は他にありました。しかし、当時下された決定が今日、私たちに解決不可能な問題を突きつけています」

メリューは立ち上がり、動きの中に自分のいらだちのはけ口を求めている。

「私たちは先を見据える必要があります。松方作品の特定のケースを超えて、私たちの文化外交モデル全体が問われています。それを見直す準備ができていますか？」

「ちょうど」とエリーズ・レニエルが介入した。「今朝、イギリスの同僚から電話を受けました。外務省がこの事件を非常に注意深く見守っています。不利な先例が他の要求を再燃させることを恐れています」

「彼らは何を提案していますか？」

「私たちの弁護のヨーロッパ協調です。すべての関係国間で調和された論拠を持って、人権理事会の前で統一戦線を示すという考えです」

「それは効果的かもしれませんが。しかし、旧植民地国に対する旧植民地諸国の陰謀のように見える危険があります」

「それが危険です」とメリューが同意した。「私たちは西欧の連帯と正当な要求の尊重との間でバランスを見つけないければなりません」

「私に考えがあります」とニコラ・ブランシャールが提案した。「国際文化返還基金の創設を提案してはどうでしょうか？西欧諸国が、略奪された国々に補償を与えながら、作品を現在のコレクションに保持することを可能にする仕組みに財政的に貢献するのです」

エリーズ・レニエルは首を振った。彼女のリアリズムが、問題の本質を避ける解決策を拒否させていた。

「理論的には興味深いですが、根本的な問題は解決しません。もし私たちの敵が法的に正しければ、彼らは財政的な補償では満足しないでしょう」

「特に日本の場合、お金が問題ではありません」とジャン＝マルク・ルセルが付け加えた。「日本は商業取引であれば、これらの作品を市場価格で簡単に買い戻すことができます。いいえ、彼らの要求には明らかに象徴的・政治的側面があります」

ルセルはそこで、同僚たちが受け入れるのに苦労している真実を表現していた。

メリューは時計を見た。彼は計画によって統制を取り戻す必要を感じていた。

「決定を下さなければなりません。仮定的な解決策にこだわっている時間はありません。私が提案するのは次のことです：私たちは三つの選択肢を同時に準備します。最大限の弁護、取引的交渉、そして返還を伴う誤りの認識です。並行して、私はパリと私たちのヨーロッパのパートナーの反応を探ります」

「そして最終決定は誰が下すのですか？」とニコラ・ブランシャールが尋ねた。

「それは少なくとも私たちではありません。これほど重要なケースは必然的に大臣レベル、さらにはエリゼ宮まで上がります。私たちの役割は要素を準備し、選択肢を客観的に提示することです」

エリーズ・レニエルはファイルを開じた。

「それなら、仕事にかかりましょう。私には非の打ちどころのない弁護を組み立てるのに十五日間あります。たとえそれを本当に信じていなくても」

「そして私は、取引的交渉の要素を準備します」とニコラ・ブランシャールが付け加えた。「NGOが私たちの論拠に敏感かもしれません。分かりませんから」

「私としては」とジャン＝マルク・ルセルが結論付けた。

「日本の気分を慎重に探ってみます。もし私たちが伝統的なチャンネルで紛争を解決できれば、不確実な結果の対立よりもはるかに良いでしょう」

ジュネーブのチームが弁護を準備している間、他の関係者も活動していた。パリでは、クレール・フォンテーヌが国家の最高当局と慎重な協議を重ね、すべての統制を逸脱したファイルでの方針を求めている。

エリゼ宮顧問の執務室は、四月中旬の水曜日の夜、彼女が受け入れられたとき、薄暗闇に包まれていた。元大使で大

統領の親しい協力者の一人となったアルノー・プリジャンが、状況にふさわしい重々しさと彼女を迎えた。

「クレール、こんなに遅くに来ていただいてありがとうございます。松方事件がここまで波紋を呼び始めています。大統領は昨日の朝、日本の首相から電話を受けて以来、個人的に関心を持っています」

クレール・フォンテーヌは脈拍が速くなるのを感じた。彼女はファイルが取る次元を測っていた。

「首相が直接エリゼ宮に連絡したのですか？」

「公式には、六月のG7サミットを準備するための礼儀的な電話でした。しかし首相は『相互協力の精神で解決されるべきある種の争議』について言及を滑り込ませました。メッセージは五つ星で受信されました」

「つまり、東京は恐喝をしているということですか？」

「それよりも微妙です。彼らは交渉による解決が公の対立よりも好ましいだろうということを私たちに認めさせています。そして彼らはおそらく正しいのです」

アルノー・プリジャンは「機密防衛」と書かれたファイルを開いた。彼の視線は、自分の到着よりもはるか前に犯された誤りの結果を管理しなければならない人の疲労を表していた。

「NGO『帰還と返還』について、私たちの情報機関に評価をさせました。結論は…啓発的です」

「どういう意味でしょうか？」

「組織はフランス的で、その指導者たちは名誉ある人々です。しかし、東京政府と関連のある日本の文化財団から重要な資金を受けています。違法ではありませんが、示唆的です」

クレール・フォンテーヌは情報を心に留めた。彼女は事件が単純な協会の要求の枠を超えていることを推測していた。

「私たちが疑っていたことが確認されます。これらすべての背後にはおそらく政治的側面があります」

「それは事態を完全に変えます。私たちはもはやNGOの要求に直面しているのではなく、おそらく日本の策動に直面しているのです。これはまた、機会にもなり得ます」

「どのようにですか？」

「もし東京が交渉を望むなら、私たちは松方の特定のケースを超えて議論を拡大することができます。商業関係、技術協力、文化プロジェクト…この危機が接近の機会となる方法はきっとあります」

プリジャンはそこで、各困難を国家の偉大さの道具とするエリゼ宮的なビジョンを表現していた。

「それは私たちが文化的ファイルで実質的な譲歩をする用意があることを前提としています」

「それが大統領が私に研究を依頼した問題です。日本との関係を保持するためにどこまで行く用意があるのでしょうか？そして私たちの他のパートナーとの関係にどのような結果をもたらすのでしょうか？」

「私たちのヨーロッパの同盟国は、彼らに相談せずに私たちが手を引くことを許さないでしょう」

「だからこそロンドンとベルリンとあなたが準備している協調が重要なのです。もし私たちが動くなら、それは一緒でなければなりません」

「クレール、率直に申し上げます。大統領は作品の返還には反対です。しかし我が国のコレクションは、日本との危

機に値するものではないでしょう。そこであなたの役割が重要になります。危険な先例を作ることなく日本人を満足させる表現を見つけなければなりません。超長期貸与、博物館協力の強化、権利の象徴的承認…創造的な解決策があるはずです。」

フォンテーヌは自分の使命の複雑さを理解していた。彼女は限られた手段で矛盾する要求を調整しなければならなかった。

「私たちが設定する限界を知る必要があります。他に解決策が見つからない場合、純粋な返還を検討する準備はありますか？」

「いえ、返還は完全に除外されます」

プリジャンの断言は断頭台のように響き、エリゼ宮が決して越えない一線を明らかにした。

その間、ジャン＝マルク・ルーセルは独自の慎重な相談を行っていた。東京に駐在した元外交官として、彼は日本の政府および文化界に多くの人脈を保持していた。彼の人脈帳は、この事件の真の問題を把握するのに貴重であることが証明されるだろう。彼は7区の控えめな日本料理店で、在パリ日本大使館文化担当官である山形恭孝と待ち合わせをしていた。二人は10年前にプティ・パレでの日本美術展で知り合い、友好的な関係を保っていた。この個人的な関係により、通常の公式ルートが許可するよりもより率直な交流が可能になっていた。

「恭孝さん、このような…特別な状況でお会いいただき、ありがとうございます」

「ジャン＝マルクさん、私たちの個人的関係は偶然の事情を超えることをご存知でしょう。しかし時期が微妙です」

彼らは日本語で注文した一ジャン＝マルクが東京時代から保っていた習慣である一そして彼らを占めている主題に慎重に取り組んだ。ルーセルは外交がその人間的次元を取り戻すこれらの瞬間を評価していた。

「この松方事件…もちろんご存知ですね？」

「無視するのは困難です。1週間前から日本の報道で大きく取り上げられています。そして日仏関係にとって良い意味ではありません」

ジャン＝マルク・ルーセルは茶を啜り、困難な交渉に必要な心境を取り戻すのに役立つこの儀式を味わった。

「あなたの政府の公式見解は？」

「公式には？我々には何の見解もありません。これはフランスのNGOの個人的イニシアティブであり、我々が関与すべきことではありません」

「非公式には？」

山形恭孝は微笑んだ。

「非公式には、コレクションが我が国にとって重要な象徴を表していることを皆が知っています。松方は我が国の偉大な文化パトロンの一であり、彼の作品が外国の博物館に分散されているのを見ることは、日本の世論にとって常に痛ましいことでした」

「事件を起こすほどまでに？」

「誰も事件を望んでいません。しかし日本の世論は文化遺産の問題に非常に敏感です。事件が悪い方向に向かうとすれば、それは我々の関係に影響を与える可能性があります」

ジャン＝マルク・ルーセルは箸を置いた。物事の核心に迫る必要があると感じていた。

「率直に話しましょう。友好的解決を得るには何が必要でしょうか？」

「フランスが、少なくとも象徴的に、1944年の取得が…言ってみれば、疑問視されるものであったと認めることが必要でしょう。必ずしも違法ではないが、疑問視されるものと」

「そして次は？」

「次に、日本がこの遺産との結びつきを取り戻すことを可能にする解決策を見つける必要があります。必ずしも即座の返還ではなく、少なくとも中期的な展望を」

「どのような種類の？」

「日仏文化センターの創設を考えています…長期貸与…双方が創造性を発揮すれば、可能性は豊富にあります」

ジャン＝マルク・ルーセルはこれらの提案を心にとめた。交渉による解決のための余地がまだ存在することを理解していた。

「そしてフランスがすべての譲歩を拒否した場合は？私たちが条文の上で自らを擁護することで満足した場合は？」

山形恭孝の表情がかすかに硬くなった。ルーセルは、日本人の対話者が国家の威厳に触れる問題と呼び起こす時によく観察していたこの表情の変化を認識していた。

「それは遺憾なことでしょう。我々の二国間関係にとってだけでなく、フランスの国際的イメージにとっても。世界の世論は文化的返還の問題にますます敏感になっています」

「他の類似した争いをお考えですか？」

「もちろんです。フランスがこれらの問題で組織的な妨害を行えば、他の国々が自らの要求を急進化させることを助長する可能性があります。古代遺物についてはエジプト、原始芸術についてはアフリカ、大理石についてはギリシア…あなた方は同時にあらゆるところで守勢に回ることになるかもしれません」

これはフランス当局が恐れていたことだった：ドミノ効果。ジャン＝マルク・ルーセルは話題を変え、日本の動員の範囲を評価しようとした。

「そしてあなた方の世論の側では？ 事件はどのように受け取られていますか？」

「返還要求に対する真の民衆的支持があります。日本人は自らの文化遺産が20世紀の間に大規模に略奪されたと考えています。まず西洋列強によって、次に戦争中に。松方コレクションを回復することは一つの正義の形として受け取られるでしょう」

レストランを出る時、ジャン＝マルク・ルーセルは争点のより明確な視野を持っていた。日本は対立の論理にはなかったが、後退もしないだろう。両国が面子を保つことを可能にする解決策を見つけなければならなかった。

日仏協議と並行して、ヨーロッパの首都間で激しい活動が展開されていた。松方事件はもはや単なる日仏争いではなく、文化的返還要求に対する西洋の連帯のテストとなっていた。

ロンドンで、外務省はフランス、ドイツ、イタリアの代表者との会議を組織していた。英国外務省の会議室は、ビクトリア朝の羽目板と元大臣たちの肖像画とともに、古い植民地諸国間のこれらの議論に適切な枠組みを提供していた

。建築そのものが、文化的正統性の問題が同じ鋭さで提起されなかった時代を思い起こさせていた。

文化問題担当国務次官サー・ウィリアム・ペンバートンが議事を主宰していた。彼は危機を協力の機会に変える才能があり、この才能が彼をヨーロッパ外交界で評価される対話者にしていった。

「我々が集まったのは、直接的にはフランスの友人たちを標的とするものではあるが、我々全員に関わる案件について議論するためです」

フランスを代表するクレール・フォンテーヌは同意した。

「この協議のイニシアティブを取っていただき、感謝いたします。松方事件はフランスの利益だけにとどまりません」

「状況について説明していただけますか？」ドイツ代表のハンス・ミューラーが尋ねた。

ミューラーは記憶に関わる争いの管理において訓練されたドイツ外交官の一人であった。彼の国は返還問題の扱いにおいて特別な専門性を獲得しており、この経験が彼にこの種の議論において特別な正統性を与えていた。

「状況は憂慮すべきものです。我々を攻撃するNGOは強固な論拠を持っています。我々が勝利する可能性は低いです」

イタリア代表ジュゼッペ・ビアンキが対話者に向けて話した。

「そしてあなた方が負けた場合、我々残りの者にとってどのような結果になりますか？」

「非常に不都合な先例です」とクレール・フォンテーヌは率直に答えた。「あなた方の疑わしい起源のコレクションはすべて、類似した要求の対象になる可能性があります」サー・ウィリアム・ペンバートンは両手を組んだ。

「それが我々の恐れることです。国連が返還に有利な先例を作れば、我々は要求に押し流されるでしょう」

ハンス・ミューラーは強く同意した。彼のドイツでの経験が彼にリスクの鋭い視野を与えていた。

「ドイツも晒されています。我々の博物館は今日あいまいと呼ぶことができる状況で取得された作品で満ちています。国際法が返還の一般原則に向かって進化すれば、我々是不快な状況に置かれるでしょう」

「財政面を考慮に入れずに」とジュゼッペ・ビアンキが付け加えた。「略奪されたすべての国に補償することは、ヨーロッパ諸国に何十億ユーロもの費用をかけることになります」

クレール・フォンテーヌは彼女が求めに来た調整を提案する機会を捉えた。

「だからこそ我々は調整される必要があります。統一した前線を示せば、現状を保持するより良い機会があるでしょう」

「具体的に何を提案しますか？」

「まず、我々の論拠の調和です。我々は皆同じ原則を擁護しなければなりません：取得時効、取得の善意、コレクションの公益…」

「次は？」とハンス・ミューラーが尋ねた。

「すべての返還案件における恒常的協議。我々の一人が攻撃されたら、他の者が支援と論拠を提供する」

ジュゼッペ・ビアンキは首を振った。

「それは少し理論的です。例えば日本の場合、我々は具体的に何ができますか？」

クレール・フォンテーヌは答えを準備していた。

「あなた方は人権理事会で第三者観察を提出することができます、NGOの要求が文化交流の国際的均衡を脅かすと説明できます。それは我々の防御により重みを与えるでしょう」
サー・ウィリアム・ペンバートンは興味を示した。彼はフランスの提案の巧妙さを理解していた。

「それは考慮できます。しかし引き換えに、フランスは我々自身がパルテノンの大理石や他の争いで攻撃された場合、我々を支援することを約束すべきでしょうか？」

「もちろんです。それがヨーロッパの連帯です」

ジュゼッペ・ビアンキは疑問を示した。彼の経験が彼を国際協力についての美辞麗句に対して不信にしていた。

「問題は、誰もだまされないということです。皆が我々が芸術的宝物を返還することを避けるために団結していると考えるでしょう」

サー・ウィリアム・ペンバートンは慣例の英国的慎重さで会議を結んだ。

「我々は合意していると思います。これらの文化的返還問題について我々の立場を調整することに利益があります。しかし企業主義的に見えることを避けるため、実施において非常に巧妙でなければなりません」

「我々はヨーロッパの公的コレクションの統合性を保持することの重要性に関する共同宣言の草案を準備します」とクレール・フォンテーヌが提案した。「あなた方は今後数日でご意見をお聞かせください」

ロンドンを離れる時、クレール・フォンテーヌはヨーロッパのパートナーたちの支援を得たという確信を持っていた。しかし彼女はまた、松方事件がフランスにとって悪い方向に向かえば、この支援が非常に脆弱であることが明らかになるリスクがあることも知っていた。ヨーロッパの連帯は力の試練にほとんど抵抗しない。

パリに戻ると、彼女はヨーロッパ・外務省に緊急招集された。

大臣官房長ベルナール・ヴァリエは老練な高級官僚であった。彼は爆発する前に危険な案件を特定する能力があり、この才能が彼を政治的交代を生き延びることを可能にしていた。

「クレール、座ってください。今朝3本の電話を受けました。まずエリゼ宮から、いらいらしています。次に日本の同僚から、東京が我々の側からの働きかけを期待していることを隠しませんでした。最後にルーヴルから、我々の他のコレクションへの反響を心配しています」

クレール・フォンテーヌはファイルを取り出した。彼女はヴァリエの行動に、彼女の使命を特に複雑にする圧力の高まりの前兆を感じ取っていた。

「官房長官、この状況には慎重さが求められます。しかし、我々はいくつかの選択肢を特定いたしました」

彼女はベルナール・ヴァリエにエリーズ・レニエルが提案した三つの選択肢を説明した。最大限の防御、取引的交渉、または過失の承認と返還である。ヴァリエは注意深く聞

いていた。彼は今後数時間で下される決定がフランスの立場を長期にわたって左右することを知っていた。

「この第三の選択肢は政治的に考えられません。エリゼ宮が正式に反対しています。我々の国立美術館の傑作を日本に返還すると発表した場合の世論の反応を想像してみてください！野党が我々を徹底的に攻撃するでしょう」

ヴァリエはここで事件全体に重くのしかかる制約を表現していた。彼には世論の反応を予測する能力があり、それが彼を信頼される顧問にしていた。

「理解いたします。しかし、長期的な結果についても考える必要があります。妨害行為を行った後に敗北すれば、我々の国際的なイメージは長期にわたって損なわれるでしょう」

「あなたの個人的な推奨は何ですか？」

クレール・フォンテーヌは数秒間躊躇した。彼女は自分の答えがフランスの戦略全体を方向づけることを理解していた。

「NGOとの取引的交渉です。我々にはまだ名誉ある合意を見つけるための機会があります。あまりに長く待てば、窮地に追い込まれる危険があります」

「そして我々のヨーロッパのパートナーたちは？我々が諦めることを受け入れるのでしょうか？」

「彼らは響きわたる敗北よりも交渉による解決を好むでしょう。もし我々が本質を保護しつつ日本人を満足させる創造的なアプローチを見つければ、彼らはそれに順応するでしょう」

ベルナール・ヴァリエは受話器を取り、直接大臣に電話をかけた。彼は状況を詳細に説明した。十分後、会話は終了

した。ベルナール・ヴァリエはその時、曖昧さの余地を残さない表情でクレール・フォンテーヌに話しかけた。

「大臣は断固としていました。命令は上から来ています。状況は変化しました。大統領にとって、NGOと何かを交渉することは問題外であり、ましてや作品を返還することなど論外です。従って第一の選択肢しか残されていません。最大限の防御です。明確ですか？」

「非常に明確です、官房長官」

フォンテーヌは衝撃を受けていた。彼女は円満解決への最後の希望が消え去るのを見ていた。

「そして私に情報を提供し続けてください。私は驚きを許すわけにはいきません」

訴訟の道が今や優先されたことで、すべての関係者がフランスの防御を完璧にすることに取り組んだ。逆説的に、この明確化は圧力を下げた。フランス国家の公僕たちは馴染みのある領域を取り戻した。それは国家的立場の必死の防御であり、その本質的な弱点がいかなるものであろうとも。

法律は厳密な科学ではなく、単なる技術であるため、NGOの論拠を一つずつ解体すれば十分であった。フランス政府はこの種の演習において優れていた。

しかし同時に、別の企画が権力の回廊で進行していた。この企画は政府の計算のすべての複雑さを明らかにしようとしていた…

第10章：立法の行き詰まり

パリ、文化省、2025年7月15日

ヴァロワ通りの事務所は息苦しかった。特に暑い夏がパリを襲い、十七世紀の古い壁でさえもはや涼しさを保つことができなくなっていた。

この堂々たる建物では、活動が最高潮に達していた。廊下には古いパーケット床を踏む靴音が響き、書類のめくる音と電話での絶え間ない会話のささやきが混じり合っていた。改革の準備が進められていた。ただの改革ではない。二〇一七年十一月二十八日のワガドゥグーでの大統領の有名な演説以来、フランス行政は話題を呼んだ約束について取り組んでいた。「アフリカ諸国の文化遺産の大部分がフランスにあることを受け入れることはできません」と、共和国大統領はアフリカの若者たちの前で述べたのだった。

雷鳴のような衝撃だった。博物館界は驚愕し、外交官たちは顔をしかめ、法律家たちは法典に駆け寄った。ある者たちはそこに天才性を見出し、ポストコロニアル関係を再定義できる大胆なビジョンだと考えた。他の者たちは、それを純粋な迎合主義、後に続くもののない単なるコミュニケーション戦略としか見なかった。どうでもよいことだった。方針は決まり、国家機関は従わなければならなかった。

そこで彼らは従った。果てしない考察の年月、国の遺産専門家すべてとの協議、終わりのない交渉。すべては最小限の法的枠組みを生み出すため、最も厄介な粗い部分から浄化されたものを。反ユダヤ主義略奪と人間の遺骨返還に関する先の二つの基本法に続き、この国家への返還に関する法案は循環を完成させることになった。確立された秩序を

覆すことなく、すべての要件を満たすことを可能にするアプローチだった。

松方事件は、訴訟の道が選ばれて以来、二次的なものとなっていた。少なくとも一部の責任者はそのように捉えていた。NGO「帰還と返還」は確かに国連での手続きで話題を集めることに成功したが、所轄官庁は自信を取り戻していた。彼らの立場は堅固で、論拠は練り上げられていた。

省の五階では、会議室で作業会議が招集されていた。法案の進捗状況を確認し、それが進行中の訴訟とどのように関連するかを見る必要があった。楕円形のテーブルは蛍光灯の下で輝き、新たな国家奉仕者たちを慈愛をもって見守っているように見える歴代大臣の厳粛な肖像画に囲まれていた。

アントワヌ・ドラクロワが司会を務めていた。官房長は夏用のベージュのリネンスーツと明るいネクタイを着用し、気温への服装上の譲歩であったが、彼の自然な威厳を少しも損なうものではなかった。

ワガドゥグーでの大統領の約束？管理すべき制約、それ以上ではない。彼の巧妙さは、確立された均衡の本質を保持しながら、革命的野心の幻想を与えることにあった。

「親愛なる同僚の皆さん、我々は文化分野におけるこの任期の最も重要な案件の一つの完成について状況を確認するために集まりました。大臣が昨日閣議で提出した法案は、二〇一七年十一月にワガドゥグーで大統領が行った約束の直接的な適用を構成しています。我々は一八一五年から一九七二年の間に不正な取得の対象となった作品について、不可譲渡性の原則の例外を設けます。これは、より公平な基盤でアフリカパートナー諸国との関係を刷新するという大統領の意思に応えるものです」

ワガドゥグー演説への言及は、テーブルの周りで小さな効果をもたらした。誰もが覚えていた。これはただの行政改革の追加ではなく、国際遺産問題へのフランスのアプローチを持続的に近代化するとされるビジョンの具現化だった。

アンリ・ラヴァネルが発言した。この顧問は高等師範学校出身、公法の教授資格を持ち、国务院及び首相府の部局との調整で法案の起草を監督していた。彼は権力の知識人の典型を体現し、共和国の最高学府で育まれ、憲法の機微に熟達していた。ラヴァネルは、フランスエリートを特徴づける博学と機会主義の混合を持っていた。彼にとって法案は均衡の傑作、矛盾を満足させる技術の実証だった。最終結果が大統領の約束からその実質を空虚にしたとしても、本質は推論の優雅さにあった。

「官房長殿、この法案は注目すべきものです」

ラヴァネルはこの瞬間を愛していた。数ヶ月間テキストを検討し、細かい法律家の軍隊とコンマ一つ一つを交渉し、各自が自分の縄張りを守る省庁間会議を生き延びた後、ついに彼の赤ん坊を発表できる。彼の傑作を。

「我々が保持した地理的範囲は、国家への返還のすべての問題を扱うことを可能にします。もちろんアフリカのパートナー諸国ですが、同様に彼らの国民的遺産に属する作品を要求する可能性のある他のすべての国々も。エジプト、ギリシャ、イタリア、地中海盆地全体…我々のアプローチは普遍主義的であることを目指しています」

彼はテキストに身を傾けた。

「保持された期間、一八一五年から一九七二年は、ナポレオン戦争の征服から一九七〇年のユネスコ条約の発効まで、我々の過去の最も疑わしい取得に対応します。我々は、

国家の要求のすべてを一貫して扱うことを可能にする現代的で効率的な手段を構築しました」

ドラクロワは承認してうなずいた。提示は筋が通っており、少なくとも書面上では。現場での試練と政治的圧力にどう耐えるかが問題だった。ドラクロワは法案の欠陥について何も知らないわけではなかった。それは事実上国家と個人の間の差別を作り出し、爆発的になる可能性があった。

「今後数年間で我々が扱わなければならない案件数についての評価はいかがですか？」

「我々の最も合理的な見積もりでは、今後十年間で約五十件の潜在的な要求が言及されています」とラヴァネルは躊躇なく答えた。「主にアフリカのパートナー諸国からです。ベナン、マリ、セネガルが意向を表明しています。これは我々の部局で管理可能な量であり、特に手続きが我々の決定の客観性を保証する二国間科学委員会の設置を予定していることを考えれば」

五十件の案件。数字は出席者を安心させる価値があった。フランスの博物館がコレクションを空にされるのを既に見ていた多くの批判者の終末論的予測から遠く、準備室の略奪の合法化を恐れていた学芸員たちの悪夢から遠く、行政は統制された実施を予想していた。段階的で、体系的で、制御された。

カトリーヌ・デュボワは八年間オルセー美術館長を務め、博物館機関の観点を代表していた。元ルーヴル美術館学芸員として、改革の準備に密接に関与していたことが、同僚の代弁者として語る特別な正当性を与えていた。彼女の専門知識は尊敬され、分析は聞かれていた。彼女は大衆の芸術教育に真摯な崇拝を捧げていた。しかし作品への愛が彼女を所有欲の強い、自らが守るコレクションに対してほと

んど母性的にした。返還要求は彼女には冒涇として現れ、普遍的遺産の解体の試みとして映った。彼女の鋭い知性は、まず保護本能から生じるものを知的に正当化することに使われていた。

「官房長殿」彼女は落ち着いた声で介入した。「適用範囲を国家の要求に限定することで、我々はよりの的を絞らないアプローチから生じたであろう個人の要求の管理不可能な流入からコレクションを保護します。相続人、略奪されたコレクター、共同体…もし我々が水門を開けていたら、どんな混乱になっていたか想像してください」

デュボワが示す平静は、準備作業の質について多くを語っていた。学芸員たちは聞かれ、彼らの異議は統合されていた。行政は大統領の野心と博物館の運営上の制約を調和させることに成功していた。微妙な均衡、数ヶ月の小委員会での交渉の成果だった。

「我々はまた、堅固な安全装置も予定しています」とラヴァネルが付け加えた。「各要求は文書化され、反駁できない証拠によって裏付けられなければなりません。専門家委員会は、問題が要求する厳格さで各案件を検討します」

法務局長のジャン＝クロード・ゴメスが初めて発言した。控えめだったが、彼は装置の重要な歯車の一つだった。

ゴメスは、光よりも影を、壇上よりも舞台裏を好むタイプの高級公務員だった。国際法の熟練した技術者として、彼はカリスマ性の欠如を条約や協定の百科事典的知識で補っていた。彼の控えめさは真の洞察力を隠していた。同僚以上に、彼は彼らが構築している建造物の危険を察知していた。しかし彼の性格は疑念を公然と表明することを妨げ、誰も聞いているように見えない警告をあちこちに忍ばせることに満足していた。

「手続きは、各要求に対する外務省の監視権も予定しています。我々はこれらの遺産問題をより広範な問題から切り離すことはできません。返還は外交政策の行為でもあります」

ゴメスの観察は、数人の参加者の懸念に呼応した。

松方事件は他の点の中の一点として言及され、特別な劇的演出はなかった。行政にとって、国連での手続きは別の論理、別の枠組みに属し、政府行動の一貫性を問題にすることはなかった。決して衝突してはならない二つの平行世界だった。

「親愛なる同僚の皆さん」とドラクロワは観察した。「我々の新しい立法と進行中の私的訴訟との関連についても言及する必要があります。特にNGO『帰還と返還』によって開始された手続きです」

誰もが案件を知っていたが、誰もそれについて話しながらなかった。それは足の棘、美しい行政機構を狂わせる可能性のある砂粒だった。

ラヴァネルは機会に飛びついた。それは彼の得意分野、法の洗練と異なるタイプの訴訟間の巧妙な区別だった。しかし心の奥底で、小さな声が彼の推論は世論の試練に長くは耐えないだろうと囁いていた。

「官房長殿、国家の要求への限定は、大統領が行った約束と一致する選択に対応します。彼は特に国家間の関係、文化外交を目指しており、私人と公的当局間の紛争ではありません」

カトリーヌ・デュボワは、法的区別が常に世論と報道批評の試練に耐えるとは限らないことを知るほど、博物館と報道の世界を十分に知っていた。彼女はラヴァネルの言葉を遮った。

「しかしアンリ、限定は明らかな矛盾として認識される危険はないでしょうか？もし我々が国家に対する返還の原則を認めるなら、なぜ私的権利者を除外するのですか？扱いの違いをどう説明しますか？」

これらの質問は本質を攻撃していた。実際には、主要な政治的選択、改革の適用範囲の限定が隠されていた。

ラヴァネルは手振りで異議を払いのけた。彼は何十回もこの論拠を聞いており、彼の回答は練り上げられ、準備会議を重ねて磨かれていた。

「全くそうではありません、カトリーヌ。国家の要求は二国間関係の論理に属します。これは特別な扱い、適応された手続きを正当化します。私的紛争は、他の仕組み、他の機関に属します。既存の民事手続きが申立人の権利を保証しています。司法裁判所、控訴院、破産院…全体の装置が既に設置されています」

「そして松方案件についてはより具体的にはいかがですか？」とドラクロワはラヴァネルの方にわずかに身を乗り出しながら主張した。

「事件は国連機関の前でその進路を辿っています」とラヴァネルは安心させようとする口調で答えた。「外務省の我々の法律家が堅固に論証された防御を準備しています。さらに、注目すべき事実として、日本当局はこの手続きでNGOを公式に支持していません。このイニシアティブの限界的性格について多くを語っています」

ジャン＝クロード・ゴメスは、フランスの立場を明確にするために介入することが適切だと判断した。

「公式にはではありませんが、おそらく非公式には…」

「それは問題ではありません。すべてを混同してはなりません」とドラクロワは断言した。「続けてください、ジャン＝クロード」

「我々は手続きを詳細に分析しました。国連人権理事会はこの件について拘束力のある権限を持ちません。もし勧告があるとすれば、勧告は象徴的な領域に留まるでしょう。我々は立場を正当化するための堅固な先例を持っています」

会議の冒頭から機械的にペンをいじっていたカトリーヌ・デュボワは、二度目の介入をすることにした。

「博物館に関して言えば、私たちのコレクションは通常の地位を保っています。問題となっている松方の十八点の作品は、引き続き私たちの常設コレクションの不可欠な一部です。私たちはそれらを展示し、パートナーに貸し出し、通常の文化政策を行っています。緊急措置を講じたり、プログラムを変更したりする必要はありません。」

この発言は行政の精神状態を表していた。通常業務を継続する。松方事件？進行中の改革とは無関係な些細な問題。交渉された大きなバランスに干渉してはならない並行手続き。

アンリ・ラヴァネルは肘掛け椅子に楽に身を沈めた。

「なぜ私たちが個人を立法装置に含めることができなかったのか、説明させてください」と彼は一語一語はっきりと発音して宣言した。「私たちの分析では——そして信じてください、私たちは何ヶ月もそれに費やしました——個人の請求に門戸を開くということは、フランスの公的コレクション全体で潜在的に一万五千から二万点の作品が対象となることを意味していました。」

彼はこの数字の効果を待ってから続け、自分の小さな演出効果に満足していた。

「状況を想像してください。私たちを文字通り圧倒したであろう要求の洪水があったでしょう。すでに過重労働の私たちのチームは、あらゆる種類の何千もの請求で押しつぶされていたでしょう。ロシア貴族の相続人がアイコンを要求し、戦争中に略奪されたコレクターの子孫、ナポレオンの下で没収された絵画を要求するイタリアの家族…完全な行政的混乱です。」

カトリーヌ・デュボワは力強く頷いた。

「これらすべてのファイルを処理することの実際的不可能性は言うまでもありません。各要求には、国立、県、時には外国のアーカイブでの綿密な調査が必要です。作品を認証し、その来歴を文書化するための詳細な芸術的専門知識——そしてこれは専門家の報酬、科学的分析、出張費の間で財産を費やします。継承、売却、寄付の混乱を解きほぐすための専門相談…予算は爆発していたでしょう。そして私たちの学芸員は、彼らの真の仕事——研究、展示、文化的仲介——をする代わりに、某夫人の祖父が一八一五年に本当にルイ十六世の箆笥を略奪されたかどうかを知るために埃っぽいアーカイブを掘り返すのに時間を費やしていたでしょう。私たちの博物館は調査事務所になっていたでしょう。」

アンリ・ラヴァネルが言い添えた。

「個人に門戸を開くことは、私たちのコレクション全体に永続的なパラノイアを生み出していたでしょう。一九七二年以前に取得されたすべての作品は、最小の疑い、最小の噂に基づいて、一夜にして疑問視される可能性がありました。平静に展示を企画することは不可能、作品を回収でき

るかどうか疑問に思うことなく海外に貸し出すことは不可能、一貫した文化政策を実行することは不可能でした。地獄ですよ。」

「そして具体的に財政面では？」とデラクロワは予算面に気にしているが、彼らの論拠がますます守勢になっていることをひそかに心配して強く求めた。

「すべての潜在的なファイルを処理するだけで数百万ユーロ、私たちが返還しなければならなかった作品の市場価値を数えずに。国家は現在の予算状況において、特にこの贅沢を支払う手段を単純に持っていませんでした。」

ジャン＝クロード・ゴメスは追加の次元を加えた、死ぬほど苦しんで。

「行政裁判所での訴訟のリスク、緊急手続き、仮処分を忘れずに…返還または拒否の各決定は管轄機関で争われる可能性があります。私たちの訴訟サービスは圧倒され、麻痺していたでしょう。」

誰もがこの背理法による実証に満足していた。行政はその防衛線を見つけていた。自分の足を撃つことなく大統領の約束に応える。野心と経営現実主義の間のバランス。しかし彼らの心の奥底で、数人の参加者は敢えて表現しない漠然とした不安を感じていた。

デラクロワは、テーブルの周りでコンセンサスが形成されているのを感じて、この種の演習で規則である楽観主義でセッションを締めくくった。

「私たちは野心と現場の現実との間の適切なバランスを見つけたことを祝福できます。改革は、国際パートナーの期待に応えながら一般利益を保護する、段階的で責任ある取り組みに位置づけられます。」

彼はすべてがすでに決定されていることを知っているが協議の形式を維持する指導者の自然な権威で任務を配分した。

「アンリ、あなたは法律が定められた期限内に通過するよう議会サービスと密接に調整してください。国民議会の最後の解散以来、立法日程は厳しいですが、私たちには楽観的である良い理由があります。カトリーヌ、あなたのチームは新しい手続きに今から準備してください。職員を訓練し、情報システムを適応させ、最初の要求を事前に予想する必要があります。」

会議は相互の自己満足の雰囲気の中で解散し、各人は義務を果たしたという確信を持って戻った。

その後の数日間、行政のロードローラーは知られているメカニカルな効率で動き始めた。アンリ・ラヴァネルはこのバレエすべてを監督し、彼の改革の運用実施に完全に取り憑かれていた。返還の妥当性についての哲学的議論は終わり、植民地遺産についての道徳的議論は終わった。それが機能し、手続きが流暢で、期限が守られる必要があった。高級官僚としての彼のキャリアはこのプロジェクトにかかっていた。

行政の動揺が孤独な反省に場を譲る夜の明晰な瞬間に、ラヴァネルは間違いを犯しているのではないかと自問した。会議であれほど見事に擁護したこの国家と個人の間の区別が、彼の事務所の静寂の中で、正当化できないものを隠すための詭弁として現れた。しかしこれらの疑いは朝が来ると消え去り、行動の陶醉と自分の作品を眺める建築家の誇りによって追い払われた。

「要点は」と彼は週例会議で協力者たちに説明した、「私たちがプロセスを掌握していることを実証することです。」

性急さも固定化もなく。誰もを安心させる段階的な立ち上げ。」

最初はコレクションが雪のように溶けるのを見て警戒していた学芸員たちは、国家だけが公式な請求を提出できることを知って平静を取り戻していた。法案のプロジェクトの限界に最初は消極的だったカトリーヌ・デュボワは、もはや調整会議での安堵を隠さなかった。

「結局のところ、私たちの傑作は予見可能な最初の要求で危険にさらされることはありません。それらは確実に民族学的オブジェクト、マスク、儀式的彫像…確かに重要だが、あまり中心的でない作品に関するものでしょう。私たちは公共サービスの使命を根本的に疑問視することなく、これらの返還を管理できるでしょう。」

分析は準備研究に合致していた。最初の請求は実際にアフリカの芸術作品に関するもので、植民地時代にしばしば疑わしい状況で取得されたが、パリの大博物館の常設コレクションで選択の場所を占めていなかった。

ケ・ブランリー、オルセー美術館、ルーヴル美術館の保管庫で、潜在的に関係する作品を特定するための慎重な目録が行われていた。地平線に警戒すべきことは何もなかった。最大で数百点、目録化され、文書化され、評価された。展示ケースを空にすることなく国家の要求を満足させることを可能にする管理可能な在庫。

セレでは、ピエール・ベルティエは表面的な改革と流産した革命を多く見てきた老練者の面白さでこの小さな劇場を推測していた。教授は、行政が最も迷惑の少ない国家の請求に満足することによって回避を選ぶであろうことを予見していた。

彼は鋭敏な知性を最も細かい分析に透けて見える諦観した人間嫌いの形に混ぜていた。数十年の闘いが彼を苛立たせることなく固くした。彼は人間の不完全性を識別しながら自分の大義の正当性への信仰を保つ偉大な理想主義者に特有のこの能力を保っていた。彼の見かけの厳しさは、彼の反省を司る「アルルの寝室」の複製に向かい合って、彼の大聖堂事務所の親密さでしか濾過させない感受性を隠していた。ピエール・ベルティエは自分の傷から力を引き出し、失望から明晰さを引き出す人々の一人だった。

「友人たち」と彼は閣僚理事会の最後の発表で発表された法案についてNGOの月例調整会議で会心の微笑みで説明した、「このプロジェクトは私たちが最初から考えていたことを確認します。その適用範囲から私人を意図的に除外することで、国家は返還の原則を認めることを暗黙のうちに認めています…しかし私たちのためではありません。純粹で単純な差別です。」

組織のすべての文書を古文書学者の几帳面さで集めることに従事していたヴェロニク・フルニエは、その日の新聞記事を分類しながら微笑まずにはいられなかった。彼女は闘争的信仰によってチームに加わったが、権力の秘密を魅力的に発見していた。政治行政の小宇宙への彼女の新鮮な視点は、ピエール・ベルティエの分析を豊かにしていた。

「明白な矛盾は国連手続きで私たちを非常に助けます。彼らは人権理事会の専門家に、私人が除外されている国家のための特別な装置を作成することをどう説明するのでしょうか？ 処遇の違いをどう正当化するのですか？」

事件の法的側面を追っていたジェラルド・ランファン弁護士は、見かけ上単純な状況を複雑にする法学者の癖で、常に悪いタイミングで良い質問をしていた。

「私たちの手続き戦略はこの新しい立法状況でまだ有効ですか？フランス法の発展によって私たちの論拠が弱められるリスクはないでしょうか？」

「逆に、この法案は私たちのアプローチを何も変える必要なく私たちの立場を強化します」とベルティエは答えた。

「私たちが開始した国連手続きは適応しており、おそらく以前よりもさらに適切です。ご覧ください、国際的専門家は表示される美しい意図の宣言とその具体的適用の違いを知っています。法律が議会で可決されれば——そしてそれは可決されるでしょう——これは意図的な差別であることを例証するでしょう。同じ問題だが、申請者の地位に応じた異なる処遇。これは人権に関する国際条約が非難していることです。」

松方事件は各人が美しい確信を持って自分の立場に陣取る新しい段階に入った。フランス行政は自分の主要な人道主義的価値と十分理解された自分の小さな利益との間のバランスを見つけたことを祝福していた。ピエール・ベルティエと彼のチームは政府の矛盾と不一致を指摘して知的ゲリラを続けていた。

国家への返還に関する法律の採択はワガドゥグで取られた約束の正式な成果を記すが、私的請求に直面したその内在的限界も明らかにするであろう。

その後の数週間で、アンリ・ラヴァネルは省とブルボン宮の間の移動を増やした。議会の往復は危険を予告していた、政治的反対によってというより——テキストは広範なコンセンサスの恩恵を受けていた——自分の領域を示すことを気にする議員が提案することを怠らないであろう修正によって。

ラヴァネルは自分の作品が議会の篩にかけられることを思うと心配を感じた。彼は夜を過ごして可能なすべての反対を予想し、自分のテキストの各コンマを擁護するための論拠の砲列を準備した。

国民議会文化問題委員会の事務局は通常の会話で騒然としていた。テキストの報告者であるジロンド県の社会党議員シルヴィ・ポティエは問題をよく知っていた。

元学芸員のシルヴィ・ポティエは現場の女性だった。彼女は博物館の年月から精密への顕著な嗜好と専門知識への誠実な敬意を保っていた。しかし政治への彼女の転身はまた、最も入り組んだ行政の繚れの中の亀裂を察知する恐るべき嗅覚を彼女に授けていた。

「アンリ」と彼女は彼を迎えながら言った、「私はあなたのテキストを細部まで詳しく調べました。全体的に、それは良い仕事です。しかし私にはセッションで再浮上するリスクのあるいくつかの疑問があります。」

ラヴァネルは楽に腰を下ろした。

「シルヴィ、お聞かせください。主要な懸念事項は何でしょうか？」

「まず、立証責任の問題です。あなたのテキストでは、申請国が不法取得の証明を提供しなければならないとされています。しかし、この概念をどう定義するのでしょうか？ナポレオンの征服は当時の法の観点から不法だったのでしょうか？植民地での取得は？基準をどこに置くのでしょうか？」

議員は装置の潜在的弱点の一つを指摘していた。ラヴァネルはこの質問を予想していた。

「我々は現代の国際基準に依拠しています。一九五四年のハーグ条約、一九九八年のワシントン原則、一九七〇年の

ユネスコ条約…これらの概念を客観化することを可能にする、確固として確立された法体系があります」

「第二点は、」とシルヴィ・ポティエは動揺することなく続けた。「あなたは私的な請求を除外していますね。しかし、私的利益の代弁者となる国家のケースをどう扱うのでしょうか？もし明日、ある政府がNGOの請求を公式に支持することを決めたら、あなたの装置は適用されるのでしょうか？」

この質問は厄介で、ラヴァネルもそれを知っていた。彼は躊躇の時間を置いたが、それは相手に見逃されなかった。

「手続きでは、各要求の正当性を二国間科学委員会が審査することが規定されています。国家の請求が私的利益を隠蔽している場合、それは発見され、制裁されるでしょう」

「どのように発見されるのですか？誰によって？どのような基準で？」と議員は食い下がった。

ラヴァネルは足場が崩れていくのを感じた。改革の精神について慣例的な発言で議論をかわすことになっても、主導権を取り戻す必要があった。

「シルヴィ、この改革の精神を思い出していただきたい。我々は文化外交、国民記憶の和解という論理にあります。我々に期待を通知してきたアフリカ諸国は、私的請求を利用しようとは考えていません。彼らは自国民の利益のために、分散した国民遺産の再構成のために行動しています」

この論拠は部分的に功を奏した。シルヴィ・ポティエは留保を保ちながらも頷いた。彼女はこの策略に騙されてはいなかった。

「それに反対とは言いません、アンリ。しかし、限界事例、可能な悪用を予見しなければなりません。報告者として

の私の役割は、公開会議で必ず出てくるであろう異議を予見することを義務づけています」

パリの美術館の回廊では、学芸員のコミュニティがこの移行期を複雑な感情で生きていた。私的請求の除外が大いに心を安らげたとはいえ、改革の具体的な影響についてまだ疑問を抱く者もいた。

オルセー美術館のカフェで、カトリーヌ・デュボワは数人の同僚と非公式な仕事上の昼食会の約束をしていた。テーブルの周りで、パリの大施設の館長たちが意見を交換していた。

「カトリーヌ、」ギメ美術館館長のフィリップ・カンデッシュが尋ねた、「この文脈でのマツカタ事件の展開をどう捉えていますか？国連の手続きは厄介な先例を作るリスクはないでしょうか？」

カトリーヌ・デュボワは答える前にコーヒーを一口飲んだ。

「正直に言って、フィリップ、私は心配していません。我々の十八点の作品はしっかりと文書化され、我々のコレクションに統合されています。それらは我々の美術館のアイデンティティの一部です。来館者はそれらを知り、評価しています。我々は隠匿や疑わしい取得の状況にはありません」

「確かに、しかし道徳的論拠は影響力を持ち得ます」と、アフリカ・オセアニア芸術館館長のマリー＝クレール・コムラードが介入した。「国連の専門家が請求の正当性を認めれば、それは政府に相当な圧力を生み出すでしょう」

「純粋に象徴的な圧力です」とカトリーヌ・デュボワは和らげた。「この種の勧告に対して聞こえないふりをしてきた国の例は十分にあります」

ルーヴル美術館の学芸員イヴ・サロモンは、安心させることを期待した視点をもたらした。

「マツカタが日本政府の公式代表ではなく、日本人の私的収集家だったことも忘れてはなりません。彼の取得は、日本の西洋芸術への開放という文脈に位置づけられていたとはいえ、個人的な取り組みに関わるものでした。我々は植民地略奪の問題とは異なる状況にあります」

この分析は聴衆を安心させた。マツカタ事件は、古典的なアフリカの請求と区別する特殊な特徴を示していた。

「それに、」とカトリーヌ・デュボワは疑いをうまく隠す笑顔で付け加えた、「NGO『帰還と返還』の友人たちは、おそらく自分たちの影響力を過大評価していたのでしょう。騒ぎを起こすのは一つのこと。具体的な結果を得るのは別のことです」

セレにおいて、ピエール・ベルティエは活動を停止していなかった。すべては法廷と同じく世論の領域で決まることを意識し、彼は巧みに組織されたメディア攻勢を開始していた。彼の人脈帳は貴重だった。

「ヴェロニク、」と彼は報道関係者のリストを眺めながら協力者に言った、「強く打たなければなりません。国家への返還に関する法案は、政府の偽善を糾弾する絶好の機会を我々に提供しています」

代替コミュニケーションの真の才能を持つヴェロニク・フルニエは、ノートパソコンを見ながら頷いた。

「『ル・モンド』、『リベラシオン』、『テレマ』の専門家に連絡しました。彼らは改革への批判的な角度を求めています。国際的には、BBCとニューヨーク・タイムズの我々の接触先も関心を示しています」

NGOのチームはメディアのコードを操ることを学んでいた。インパクトのあるプレスリリース、非の打ちどころのない文書ファイル、テレビニュース向けに調整された発言。成果を上げ始めた情報戦の機械。

ジェラルド・ランファンがキャンペーンのヨーロッパ次元を調整していた。

「欧州議会の側から好意的な反響があります。数人の議員が返還問題に関心を寄せています。この主題に関する公聴会は、フランス当局に追加的な圧力を生み出すことができるでしょう」

「素晴らしいアイデアです」とベルティエが答えた。「討論をヨーロッパ化し、より広い次元を与える必要があります。フランスはもはやこれらの問題を密室で管理することで満足することはできません」

メディアへの各介入、各公的立場表明は、フランスの立場を孤立させることを目指すグローバル戦略に位置づけられていた。

しかし、全方位攻勢は政府装置の最初の亀裂を明らかにし始めてもいた。文化省では、コミュニケーション部門が討論の展開に困惑していた。

コミュニケーション局長のマリー・モローは、緊急に招集された危機会議で自分の懸念を隠そうとしなかった。彼女は主要危機の前兆を認識するのに十分なメディア嵐を経験していた。

「アントワヌ、我々は物語の一貫性の問題を抱えています。一方では、アフリカ諸国への返還政策の長所を誇っています。他方では、完全に文書化された私的請求に断固として抵抗しています。この矛盾はメディア空間で維持することがますます困難になっています」

ドラクロワは安心させようとした。

「マリー、我々の立場は堅固です」

「しかし、まさにアントワヌ、一般大衆はこれらの微妙な点を理解しません。彼にとって、文化的返還は文化的返還です。国家と個人の地位の違いに関する我々の説明は、ビザンチンの的に見えます」

会議に出席していたアンリ・ラヴァネルは、自分の装置を擁護しようと試みた。

「持ちこたえなければなりません。もし我々が譲歩すれば、パンドラの箱を開けることになります。明日、何千もの権利者が我々の扉を叩くでしょう。これが法律で我々が避けようとしたことです」

「しかし、アンリ、」マリー・モローが異議を唱えた、「全てか無かの論理は我々に不利に働きます。それは我々を道徳的問題に無感覚な技術官僚として見せています。NGO『帰還と返還』はそれをよく理解し、我々を法的領域ではなく象徴的領域で攻撃しています」

この分析は的中した。交渉の世界で進化することに慣れた行政は、現代コミュニケーションの冷酷なルールを発見していた。メディア空間では、最も堅実な論拠も、うまく組み立てられた物語の前では大した重みを持たなかった。世論のための戦いが始まったばかりで、武器は平等ではなかった。自分の正当性を確信しているが矛盾に絡め取られた行政。機敏で決意に満ちた、代替コミュニケーションのコードを完全に習得したNGO。国家の部門にとって、戦いは予想より困難になることが予告されていた。これらのメディアの混乱と野党の批判にもかかわらず、議会は最終的に激しいが予測可能な討論の末に法案を採択し、この法案は二〇二六年三月九日に共和国大統領によって公布された。

第11章：長い戦い

ジュネーブ、国連本部、二〇二七年九月

苛立ちが目に見えるほどになり始めていた。松方事件がフランスに正式通知されてから三十か月。三十か経っても、まだ何もない。内容についての詳細な見解すら一つもなかった。

議長を務めるカルメン・バスケスは、報告者のクラウド・ウェーバーを警戒の目で見つめていた。忍耐の仮面の裏で、彼女は長年にわたって隠すことを学んだ苛立ちに煮えくり返っていた。裁判を引き延ばそうとする訴訟当事者たちに慣れ親しんだ元判事として、彼女はその兆候を見抜いていた。しかしここでは、処罰を免れることがほぼ完全であった。

「クラウド、これで六度目の督促要請よ。六度目よ！世界中に教訓を垂れる国にしては、あまりにも多すぎる」

ウェーバーは何でも分類する癖で自分のメモを読んでいた。それは秩序が混沌に対する避難所となったプロイセンの幼年時代の名残りであった。彼の細心さは、国際正義を茶番に変えるこれらの引き延ばし工作に対する鈍い怒りを隠していた。

「カルメン、私は彼らの回答をすべて研究しました。これは偉大な芸術です。最初に、彼らは『案件の例外的複雑さ』を持ち出します。六か月の追加猶予。それから必要な調査の『前例のない』規模。さらに六か月。彼らには豊富なレパートリーがあります、認めざるを得ません」

彼はページをめくり続け、悪意を感じさせる往復書簡を明らかにした。

「そして、ここに注目してください。突然、彼らの内部部署はもはや『十分に有能』ではありません。彼らには『国際的名声』を持つ外部コンサルタントが必要なのです。当然、さらに六か月。九か月前から現在まで、彼らは『国立公文書館へのアクセスに困難』を抱えています」

カルメン・バスケスは、不条理が頂点に達した瞬間のために取っておいた小さな笑いを漏らした。

「我が国で言うところの『カタツムリ戦略』ね。彼らは消耗を狙っている、それは明らかよ。彼らの頭の中では、案件が忘却の彼方に消え去るか、メディアが飽きるかのどちらかなの」

ウェーバーは同意した。国際正義が現実政治によって蹂躪されるのをあまりにも頻繁に見てきた者の疲労が察せられた。

「彼らは我々に彼らを強制する手段が全くないことを知っています。彼らは何年でも引き延ばすことができるのです」

その告白は残酷だったが、現実的だった。国連の人権保護システムは張り子の虎に似ていた。印象的だが、現実には無力なのだった。

パリ、二〇二七年十一月

ケ・ドルセーで、クレール・フォンテーヌはこの遅延のバレエを指揮していた。外交地図で覆われた壁を持つ彼女のオフィスは、優雅な回避に捧げられたキャリアを物語っていた。

「親愛なる友人たちよ」と彼女は協力者たちに説明した。「我々の目的は単純です。手続きを最大限に引き延ばすこ

と。時間が我々の最良の武器です。四、五年後、評議会が決定を下すときには、誰も松方のことなど覚えていないでしょう」

多国間文化問題部を指揮するオリヴィエ・ルコントは創造性に事欠かなかった。

「具体的には、悪いプレーヤーと見なされることなく遅延を要求できる八つの段階を我々は把握しています。詳細な専門知識、省庁間協議、国務院による承認、欧州協議・・・各段階で六から九か月を稼げます」

ヴァロワ街の文化省で、アントワヌ・ドラクロワは引き延ばし工作を積み重ねていた。

「我々の学芸員たちは一つのことを認めなければなりません。稼いだ一か月ごとに、我々のコレクションへの圧力が少しずつ軽減されるのです。この紛争は他のすべてと同様に、結局は沈静化するでしょう。忍耐強くあることが必要なだけです」

同僚の熱意を抑制することに慣れていたカトリーヌ・デュボワは、邪魔をせずにはいられなかった。二十年の博物館経験によって培われた彼女の自然な慎重さは、ドラクロワの楽観主義が盲目性に属するかもしれないと囁いていた。彼女は二重の忠誠の重みを背負っていた。自分の機関への忠誠と、損なわれていると感じる倫理への忠誠である。

「アントワヌ、原則的には同意するけれど、私たちは純真ではありませんわ。ピエール・ベルティエのNGOは受動的のままでいいでしょう。必ず反応し、報道キャンペーンを強化します。それはより複雑な管理となる可能性があります・・・」

セレ、二〇二八年一月

ピエール・ベルティエは案件の完全なコピーを報道陣に広く配布し、行政の不活性を強調していた。ル・モンド紙で、十年間の調査ジャーナリズムによって信念を培ったジュスティヌ・ブーシェは、ヴァロワ街で歯ぎしりを引き起こすであろう記事を準備していた。

「松方事件は、ついに我が国の美しいフランス文化政策の真の顔を明らかにする。言葉では寛大、行為では卑しい」と、彼女は各単語に透けて見える怒りを込めて打ち込んだ。

フィガロ紙では、包装がより上品なままであったにもかかわらず、論調は同様に激烈だった。国際関係の古参者であるコラムニストが、獲得した地位が彼に許すその痛烈な皮肉を展開していた。

「松方事件の真摯な扱いを拒否することで、フランスは自分が座っている枝を鋸で切っている。我が国の大使たちは他国に透明性の助言を与えると、自らを滑稽にしている。国連で自らダチョウのように振る舞いながら、良き教えを説くのは困難である」

批判は、手応えのある論争を好むパリの小さな知識人世界に反響を見つけた。ソルボンヌでは、ジョルジュ・ペルティエ教授が『国際機関に対する国家の回避戦略』について学会まで組織した。政府が都合が良いときに聞こえないふりをするのを非常によく知っているということを言うための大げさなタイトルであった。地政学分析に転向したマルクス主義者であるペルティエは、そこにブルジョワ偽善についての自身の論文の確証を見出した。

国際比較法雑誌の編集長であるエレヌ・ファール教授は、明らかな喜びを持って自身の分析を展開した。男性中心の環境で地位を築くために戦わなければならなかった性格的な女性として、彼女は自身の分析が適切であることが明らかになるこれらの瞬間を味わっていた。

「フランスの立場は痛烈な問題に指を突っ込んでいます。国連は加盟国にいくら説教をしたところで、彼らに協力を義務付ける手段を厳密には全く持たないのです。松方事件は、何も聞きたくない国家に直面したとき、国際法が純粋に無力のままであることを露骨に示しています」

ピエール・ベルティエは状況の推移を観察していた。六十八歳で、彼は歳月の重みを感じていたが、自分の計画が展開するのを見る戦略家の満足も感じていた。刻まれた彼のしわは、失われた大義に捧げられた人生を証言していた。そして時には、あらゆる期待に反して勝利することもあった。彼はそこから一種の平静を汲み取っていた。

「親愛なる友人たちよ」と、彼を特徴づけるその教育者の忍耐をもって始めた。「フランス当局の曲芸は私を一秒たりとも驚かせません。むしろ彼らが別様に行動したら驚いたでしょう。そして、我々の間では、彼らの頑固さが長期的に我々の役に立つのです」

ヴェロニク・フルニエは当惑を隠さなかった。彼女は正義の迅速性について幻想を抱いてチームに加わったが、戦いの数か月がそれらの幻想を深刻に傷つけていた。民間部門から来た活動的な三十代の彼女は、変化の遅さを苦々しく発見していた。新参者の焦りは、老練な活動家の経験にぶつかっていた。

「ベルティエさん、すみませんが、あなたの論理についていくのが困難です。最初に迅速な決定を望んでいたのに、

どうして彼らの妨害が我々の都合になり得るのでしょうか？長引けば長引くほど、忘却の彼方に終わる危険があります。人々が具体的な結果を見ないとき、動員は息切れします」

ピエール・ベルティエは立ち上がり、長年にわたって蓄積された新聞の切り抜きが広がる壁に向かった。わずかに前かがみな彼の歩様は年齢を裏切っていたが、彼の眼差しは常に彼を特徴づけてきたその鋭敏さを保っていた。彼はこの文書の蓄積に一種のアーキビストの喜びを見出していた。

「ヴェロニク、最初から我々の小さな戦いの推移をよく見てください」と、最も雄弁な見出しを指して言った。「開始時、我々は新聞の文化欄に限られ、誰も読まない専門雑誌の数行でした。今日では、文化的略奪が二十か国以上で定期的に一面を飾っています。目立たないままでいるはずだった事件としては悪くありませんね？」

彼は彼らの大義の漸進的国際化を証言する特に示唆に富むいくつかのタイトルを指さした。彼の身振りには、自分の手法が実を結ぶのを見る戦術家の誇りが察せられた。

「『フランスはその責任から逃げているのか？』、『略奪に直面するフランス国家』、『松方：パリが系統的妨害を行うとき』・・・追加遅延の一か月ごとに公的議論を養っていたのです」

数か月をかけてゲームに興味を持つようになったジェラル・ランファンは、ピエール・ベルティエの推論の精妙さを理解し始めていた。彼は最初、NGOの方法に懐疑的で、古典的な争訟手続きを好んでいた。年齢とともに一彼は五十歳に近づいていた一彼は彼自身を面白がらせる一種の建設的批判を支持していた。

「ベルティエさん、フランスの妨害が我々の案件を国家略奪のシンボルに変えるとおっしゃりたいのですか？それが計画ですか？」

「その通りです」とベルティエは確認した。「国連での手続きを頑固に遅らせることで、フランス行政は壮観な迷い方をしています。それは我々の道徳的正当性を強化します。彼らが要求する新たな遅延のたびに、彼らが持ち出す官僚的口実のたびに、報道が暴露する工作のたびに、伝統的にわが美しいフランス外交が培う尊敬のイメージを破壊することに貢献しています。最終的に、彼らの妨害は悪意を暴露することで彼らに不利に働きます。ほとんど容易すぎるほどです」

大きな言説が現実には優るとき少し不安になるヴェロニク・フルニエは、直接的な質問で同僚たちを現実には引き戻した。彼女の管理者的側面が優位に戻った。

「ベルティエさん、具体的に、彼らの系統的妨害で、我々にはまだどのくらいの時間が必要ですか？」

ベルティエは諦めたような顔をした。

「現実的であるなら・・・一偽りの希望は大嫌いなのはご存知でしょう・・・二〇三一年か二〇三二年より前には最終決定は得られないでしょう。最良の場合でも」

小さな集会に数回の落胆のため息が走った。ベルティエは流行と焦りが過ぎ去るのを見てきた古い活動家たちのやや腹立たしい知恵で相対化を急いだ。

「友人たちよ、この期間を決して罰として見てはいけません。逆です！それは我々の立場を固め、我々の影響を拡大する時間を与えてくれます。過ぎ去る年ごとに我々の要求を強化し、彼らの不安定な論拠を弱体化させるのです」

他の人々が無視することを好む実践的問題を指摘する才能を持つジェラルド・ランファンは、苛立ちの身振りをした。弁護士として、彼はイデオロギー闘争についてそれほどロマンチックではない見方を持っていた。

「しかし五、六年間メディアの注意を維持するためにどうすればよいのでしょうか？世論は我々の案件に永遠に焦点を当て続けることはないでしょう。人々は飽きる、それは人間的なことです」

ベルティエは自分のコンピューターに向かった。彼は数字が自分を正当化するときそれを愛していた。教授のこの癖は常に彼に付き添っていた。説得には実証が必要だった教育年月の名残りであった。

「あなたは間違った道を進んでいます。我々の使命は見世物を持続させるために芸人の役を演じることはありません。我々の松方事件は、フランスと西洋の文化的略奪の問題全体を持ち上げるための単なる梃子なのです」

彼は厳密に最新状態に保たれたファイルを開いた。真の戦争の宝であった。

「我々が国連でのイニシアティブを開始して以来、他の略奪されたコレクションに関する九十三件の援助要請を受けました。九十三件です！ユダヤ人家族、ナチスの犠牲者である個人収集家、アフリカの村落、アメリカ先住民共同体、アルメニア組織・・・」

松方事件は連鎖効果を生み出していた。

現象の規模を理解し始めたヴェロニク・フルニエは再定式化した。

「理解したとすれば、我々はすべての略奪の犠牲者が殺到する突破口を開いたということですか？我々は前例を作ったのですか？」

「その通りです、ヴェロニク。松方事件は、最も古いものでさえ、国家の略奪に異議を申し立てることができることを証明しています。我々は、犠牲者が最も強力な国家に疑わしい専有について説明責任を負わせるための手段を持っていることを実証したのです」

その後の出来事は、これらの予測を不気味なほど正確に裏付けることになった。松方事件は世界中に波及し、フランスの国境を大きく超える抗議運動を生み出した。イングランドでは、旧植民地諸国の協会がブリティッシュ・ミュージアムに保管されているアフリカ美術品の返還を求める申立書を提出していた。アメリカでは、先住民部族が十九世紀の博物館による複数の取得に異議を申し立て、彼らの神聖な物品の返還を求めている。

この運動は学术界にも反響を見出し、論争を研究会に変える準備が整っていた。ハーバード大学では、デイヴィッド・メシング教授が制度的文化略奪への現代的抗議戦略に完全に特化したコースを開講していた。

「松方事件は、厳密に構築された論証が専門家の争いを国際的規模の政治運動に変えることができる方法を示している。ピエール・ベルティエは、専門家の輪に限定されていた問題を政治化し、それに象徴的な次元を与えることに成功した」

オックスフォードでは、ジェニファー・ブランドン教授がイギリス学派の批判的視点でその含意を分析していた。ポストコロニアル不平等の研究にキャリアを捧げてきたこの女性は、そこに自分の論文の検証を見出していた。

「この事件は、現代西洋文化政策の矛盾を残酷に露呈している。博物館は、明らかな略奪によって取得された作品を保存しながら、どうして教育的使命を主張できるのか？松

方事件は、我々の文化機関の道徳的正当性の問題を正面から提起している」

フランス国内でも、議論は次第にすべての文化構造に広がり、伝統的に組合的連帯によって結束していた博物館界内部に分裂を生み出していた。数人の学芸員が、階層の圧力にもかかわらず、勇敢にいくつかの取得に疑問を投げかけ始めていた。

パリ、二〇二九年二月

オルセー美術館では、カトリーヌ・デュボワが他の要求を予想するため、チームと密かに検討会議を組織していた。時代の雰囲気は変わりつつあり、適応する必要があることを彼女はよく感じていた。管理者としての訓練は慎重さを促していたが、良心は開放性を命じていた。

「我々は、松方事件が我々の最も疑わしい取得の全般的見直しの時期を促進したという事実を受け入れなければならない。我々は他の類似した異議に備え、一貫した原則を設定する必要がある」

ルーヴル美術館では、絵画部門長のアンリ・ロワレットが類似の懸念を表明していた。彼は保存のすべての階級を上り詰め、コレクションの完全性への非理性的な愛着を保ちながらも、倫理的な問題を理解していた。

「我々は、コレクションの根本的完全性を疑うことなく、来歴の問題を必ず扱わなければならない」

ルーヴル学院では、保存を学ぶ学生たちが松方事件の含意について熱心に議論していた。ポストコロニアル問題に精通した彼らは、もはや先輩たちの博物館的自明性を共有していなかった。

「略奪の承認を頑固に拒否する機関で働くことをどうして受け入れられるのか」と博物館学修士課程の学生マリー・デュボワは、若さ特有の憤慨をもって自問していた。

「現在の責任と過去の責任を区別しなければならない」と同級生のセドリック・カミレリが答えた。「作品は八十年間、フランスの遺産の一部となっている」

「八十年間の隠匿というべきだ」とマリーは反論した。

「長い間何かを持っているからといって、それが我々のものになるわけではない」

これらの議論は、松方事件がフランス人の意識の進化に与えた持続的影響を明らかにしていた。

セレ、二〇三〇年三月

教授は、自分が引き起こすのに貢献した運動の規模を、その国際的影響とは対照的な謙虚さで測っていた。失われた大義を守ることに人生を捧げた彼は、社会変革は長期間で行われることを学んでいた。

「友人たちよ、我々は主要目標を大幅に達成した。専門的な返還問題を社会的議論に変えることだ」と彼は、冷めたコーヒーを手にNGOの年次評価会議で宣言した。

彼は今や世界中の文化略奪に関する数百の新聞記事が掲示された壁に向かった。この記録の蓄積は、彼自身をも楽しませる頑固さを証言していた。

「進展を見てください。もはやメディアのどこかが文化返還に言及しない週は過ぎません。我々は諦めと威嚇によって窒息させられていた言葉を解放した」

統計で武装したヴェロニク・フルニエは、具体的な波及効果の評価を行っていた。

「ベルティエさん、我々のウェブサイトは月に一万五千人以上の訪問者を受けています。そして我々があらゆる所で言及されているソーシャルネットワークについては言うまでもありません」

ジェラルド・ランファンは、数年前には知らなかった楽観主義で将来の展望を語っていた。

「文化略奪の問題は世界民主主義議論に持続的に刻まれている。西洋諸政府はもはやこれを無視できない」

ピエール・ベルティエは、時期尚早な熱狂に対する知的慎重さを保ちながら賛成していた。年齢は彼を簡単すぎる勝利に対して疑い深くしていた。

「我々の成功を強調するのは正しいが、勝利主義を慎もう」

フランソワーズ・マルタンは、当然ながらチーム全体を悩ませていた質問を提起した。協会活動に転身した元ジャーナリストの彼女は、メディア専門家としての明晰さを保っていた。

「ベルティエさん、非常に長期にわたってどのように勢いを維持するのですか？ 具体的結果を得る前に運動が息切れすることをどう避けるのですか？」

「フランソワーズ、我々の役割は、もはやこの戦いを無期限に個人的に担うことではない。他の人々がそれぞれの分野で松明を引き継ぐのだ。運動は我々を超越しており、それは良いことだ」

彼は自分の書庫に向かい、厚い通信ファイルを取り出した。すべてを保管する癖がここで完全に意味を持っていた。

「この六カ月間、私は略奪と特に戦うために様々な国で創設された十一の新しい協会の定款を受け取った。すべてが直接我々の経験に着想を得ている。運動は自律性を獲得し、生きるためにもはや我々を必要としていない」

この啓示は転換点を示していた。地方の小さなNGOの孤立した戦いから、この件は力関係を持続的に変える国際運動の象徴と触媒になっていた。

二年後、二〇三二年十二月、ピエール・ベルティエは少し皮肉な微笑を浮かべることができた。彼の分析は全面的に正しいことが証明されていた。松方争議は依然としてUNの埃っぽい歯車の中で膠着していた。しかしフランスの時間稼ぎは、期待されたのとは逆の効果を生み出していた。パリが足を引きずれば引きずるほど、この件は地球規模の次元を帯びていた。世界中で、「帰還と返還」をモデルにした数十の組織が誕生していた。同じ武器、他の略奪を追跡する同じ決意。運動はそれほどの比率を取ったため、ユネスコはついに特別常設委員会を創設することになった。公式名称：「現代国際関係における文化的賠償」。

国連事務総長自身もそれに参加し、年次演説で「国際的文化和解」の必要性に言及した。松方事件に触発された運動への辛うじて隠された言及だった。

セレ、二〇三二年四月

ラベンダーと古い本の匂いがする家で、ピエール・ベルティエは道徳的勝利を味わいながらも、自分の時間が終わりに近づいていることを感じていた。彼の体は年々彼を見捨てていた。しかし結局のところ、それは重要ではなかった。彼が始めた運動は彼を大きく生き延びるだろう。この

展望は、常に自分の戦いの有用性を疑っていた彼に、これまで知らなかった平静をもたらしていた。

衰えた健康は、彼に最も重い仕事を協力者に任せることを強いていた。運動に対する彼の影響は相当なものだった―誰も彼の方向性に疑問を投げかけることを敢えてしなかった―が、彼は次第に行為者というより象徴になりつつあることをよく感じていた。

「友人たちよ…」と彼は最後の介入となるものの中で彼らに言った。「…我々は仕事をやり遂げた」

彼は中断し、最初からオフィスの壁に君臨していたヴァン・ゴッホの「アルルの寝室」の複製に一瞥を投げた。

「そうです、人権理事会が我々を間違っているとするかもしれない。公式に勝訴することは決してないかもしれない。しかしそこが本質ではない。重要なのは、我々が取り返しのつかない何かを始めたということです」

セレの庭園で、十二月の太陽がまだ石を温めている下で、老教授は歩んできた道のりを熟考していた。フランス政府は意識の変革を防ぐことができなかった。新しい国際的力関係が生まれていた。ベルティエはそこに、理想主義的な青春時代には決して期待していなかった形の成就を見出していた。

オルセー美術館の空調の効いたホールのどこかで、ヴァン・ゴッホの「アルルの寝室」が無言の証言を続けていた。今、それは芸術の永遠の美しさ以上のものを表していた。それは正義が最終的に通るために必要な忍耐を象徴していた。

なぜなら真実のための戦い―ピエール・ベルティエは長い間それを理解していた―においては、忍耐と時間への信頼だけが重要だからである。

二年後、二〇三四年、人権理事会が何年もの逡巡の後、ついに財産権侵害と司法拒否でフランスを効果的に非難する決定を下したとき、この出来事は国際新聞でわずか数行しか報じられなかった。この事例は非常に象徴的になっていたため、その公式な結論は世界の心性に与える変革的影響よりも重要性が低かった。

ピエール・ベルティエは最終的勝利を味わうためにもはやそこにいなかった。彼は一年前、眠りの中で、本と書類に囲まれて平和に息を引き取っていた。国連非難の後に追い詰められたフランスは、ついに交渉することになった。松方コレクションの六作品が日本に戻る一方、パリは実質的な文化的・財政的対価と引き換えに最も珍しい作品を保持した。要求を半分満たしながら国家コレクションの本質を保持するフランス式妥協だった。

西洋の博物館は来歴問題専門部門を創設することを強いられていた。彼らは世論の圧力と、ポスト松方精神で形成された新世代の学芸員の下で、前例のない透明性政策を発展させていた。

西洋普遍主義は消失していなかった。

しかしそれは正義と人民の権利尊重の現代的要求に適応していた。松方事件は、真実だけで武装した一人の男が、数人の忠実な者に囲まれて、最も強力な国家に挑戦できることを証明していた。国際文化正義のための長い戦いは、数千人の新しい戦士によって担われて続いていた。

今やピエール・ベルティエが眠るセレの墓地では、記念碑が彼の好きな格言を思い起こさせていた。「真実は遅いが、確実である」。松方事件はこの公式の正しさを見事に例証していた。時間は老カタルーニャ教授を正当化していた。

エピローグ

ここで終わるこの小説は、実際の事実に着想を得ているが、虚構の枠組みに移されており、国家文化略奪の複雑なメカニズムと修復的正義への長い歩みを例証している。それは「帰還と返還」のようなNGOのように、真実が勝利するために勇気をもって戦うすべての人々に敬意を表している。

ここで語られた松方事件は、正義が具体的返還の獲得だけでなく、何よりも公的議論の漸進的変革によって測られることを実証している。時には、適切な答えをすぐに得るよりも、忍耐をもって適切な質問を提起することの方が重要であることが証明される。

この小説が正義を支持する他の実際の行動を鼓舞し、文化と芸術の分野でより公正な世界の到来に貢献することを願う。
